清水長一郎遺文集（２）

清水長一郎遺文集2

目次

一、昔の婚禮風俗……1
一、婚礼風格の変遷……2
一、夏日巷談入山の野火……3
一、夏日巷談試胆会……5
一、夏日巷談度胸くらべ……6
一、山祭りと山の神……7
一、紀南俗風土記(1)……8
一、第二次世界大戦に於ける
　日高地方の戦災記資料……12
一、地方新聞は
　如何にあるべきか……21
一、日曜随想を讀む……25
一、亡友をおもう……27
一、旦那氣質……29
一、天誅倉に就て……31
一、千匹山……33
一、南紀俗風土記……34
一、餅まき……36
一、主も先年・柱も千年……37
一、煙樹濱雑感……38
一、手取城趾に遊ぶ記……41
一、白崎行……44
一、岩代遊記……46
一、一升と一はらい……52
一、西川公園の建設に望む……53
一、三十木矢之助に就て……54
一、御坊祭りを見て……57
一、かんのんさま考……59
一、かんのんさま考補記……61
一、夏の夜噺……62
一、鳥に因む姓の話……64
一、徳本上人の奇蹟……65
一、宮原から海南まで……67
一、徳本上人と大殿様……71
一、二つの世界……73
一、おけつさん……75
一、煤拂と世繼ほだ……76
一、三穂の海……78
一、節　分……81
一、小石を帯に込む噺……81
一、地名と姓……82
一、王子趾と
　徳本上人遺跡巡り……84
一、小池から入山へ……91

一、塩屋・野島紀行……96
一、おせちさんとしまくら草……102
一、宮川早生温州傳来聞書……103
一、衣奈八幡宮と西教寺……105
一、興国寺の一夜……110
一、御坊あちこち……115
一、戯瓢踊り雑感……120
一、山名將治詩集を讀霧む……123
一、土橋俊一著
福澤諭吉をすゝむ……125
一、南方先生の書……127

昔の婚禮風俗

「紀州婦人新聞」昭和三十年五月二十五日掲載

荷入れ

1

私の勤めている専売公社御坊出張所は、日高川河口の南岸にある。七・一八水害には地下室まで浸水したが、事務所は危うく難を免れたくらいで、高くもあり、眺めもよい。

春さき仕事に疲れた眼を、ほっと窓外に移すと、嫁入道具を満載したトラックが、勢いよく風を切って走る。おや今日は日がらがよいのだなと気がつくと、またその後へも同じように箪笥や長持を積んだ車がつゞく。そんな日は注意していると何台も〳〵婚礼の車を見かける。西から東へ行くもの、東から西へ行くもの、トラックあり、バタコあり、時にはリヤカーへ載せて、のんびりひいて行くのさへある。考えて見ると自動車が普及して、婚礼風景もひどく変わった。まだ三、四十年にもならぬが、私の子供時代は箪笥も長持もすべて人が担って行ったもので、一寸今昔の感がある。

2

その頃箪笥や長持を担う人を荷持と云い、近所の人達の中で、元気のよい、唄の上手な若衆がえらばれた。荷持は婚礼当日、振舞酒で景気をつけ、シャツと股引の威勢のよい姿に身をこしらえ、鉢巻きをしめ、青竹を杖にして荷物を担いだ。青竹は途中で休息したり唄を歌う時、荷物をさゝえる杖である。

出発の時刻が来ると荷物の一同は勢揃いをし、先ず花嫁の家の門で出立の唄を歌う。唄は色々あるが、一番よく歌はれたのは

〃祝いナー目出たや此の長持は　行たらナー来やせん戻りゃせぬ〃

と云う唄であった。それがすむと一行は、ゆる〳〵と田舎道を練り歩いて、婚家へ向かう。

この道中がまた賑やかなもので、今日は〇〇さんの婚礼だとわかると、道中には村の女房連中が待ちかまえて、「ショモ」「ショモ」と口々に呼びかける。「ショモ」は蓋し「所望」で、唄を所望するわけであるから、よびかけられると、一行は荷をとめて歌はねば名折れになる。そこで仲間の中ののど自慢が、美声をはりあげて歌う。

〇　〃道中ナー雲助蕾の花よナー　今日もナーさけ〳〵明日酒〃

○　〝お前ナー百まで私しゃ九十九までょ　共にナー白髪の生ゆるまでよー〝
歌がすむと一行は、亦数々の荷物を担って、ゆら〳〵と婚家へ向かい、見物衆は今日の唄は上手であったとか、長持が立派だとか、めい〳〵勝手な批評をしながら引き揚げる。考えて見ればのぞかな婚礼風景であった。
嫁入りの一つの道具は荷にならず。

昭和三十、五、一〇稿

婚礼風格の変遷

「紀州婦人新聞」昭和三十年六月十五日掲載

米つぶて

1

自動車が普及した此の頃では、花嫁は大抵自動車に乗って行くが、以前は主に人力車を用いたものである。私の子供の頃、婚礼があると、田舎ではめったに見慣れない人力車が何台も車を連ねて通った。角かくしを風になぶらせ、花カンザシをちら〳〵させ乍ら、田舎道をゆられて行く花嫁姿は、如何にものんびりした光景であった。

が、更にそれよりもう一つ昔はまだ人力車さえなかった時分は、近い処から大抵歩いて行くし、少し遠い処になると、主に駕が用いられたようである。

現に今年六十九歳になる私の母が嫁いできた時は、母の里は川上村で、私の家とは十里近くも離れた山里なので、川上村から船津村まで駕にゆられ、船津村からは船に乗って来たという。

2

昨今はすっかりすたれてしまったが、今から三、四十年前まで、私の住む川辺町附近では、結婚式の当日、新郎新婦が席に着き、愈々三三九度の盃を交さうとする時、嫁見に集った人々は、主に女、子供が多かったが、手に手に白米を紙に包んで手ごろなつぶてにしたものを、花嫁目がけて投げつける風習があり、うまく花嫁にあたると吉いとされた。

これは早くすたれて今は老人達の語草にのみ遺っているが、私もほんの子供の時分、親類に婚礼があって、下婢に負はれて見物に行き、たった一度だけ米つぶてを投げた事が、今もなほかすかに記憶の底にのこってい

る。

3

西牟婁郡田辺近在では、古くから婚姻の際婚家の式場へ石を投げ込む風習があり、被害が甚だしいので、藩庁から屢々取締の令が出たが、もと〳〵これは祝賀の意味で行う向きが多いので、取締にも手加減があったらしい。

亦田辺市に近い新庄村では、昭和廿四、五年頃まで、婚礼の式場へ、村の若者達が、藁のコモの中へ粘土を容れたものを投げこむ風習があり、これを「つとうつ」といゝ、嫁を固める為で、祝意を表したものだということが、田辺の郷土研究家雑賀貞次郎氏の「紀南の俚俗」に見えている。

して見れば米つぶてを投げたのも、石やつとをうつたのと同じことで、一種の祝意の表れであったのだろうか。……完……

昭和三〇、五、十七稿

夏日巷談

「新紀州新聞」昭和三十年六月三日掲載

入山の野火

1

御坊市湯川町丸山と美浜町入山の間、所謂入山田圃には、五、六月ごろから秋へかけて、風のない生暖かい晩にしば〳〵野火が燃えて、通行人や夜釣りの人々を驚かせる。

亀山の頂きで青い燐火がぽおっと燃え上がったと思うと、見る〳〵大きな火の塊となって、音もなくスーツと入山田圃へ飛んでゆく。同時に入山の頂上でも青い怪火がもえて、忽ち巨きな野火となり、尾をひきながら入山田圃へ転げてくる。

二つの怪火はやがて上になり下になりもつれながれ、広い田圃中を転がると、終いには一つの野火となり、長い尾を引いて南の方へ転げ、寝静まった御坊市の上を音もなく飛んで御堂さんに入り、境内の老白槇の周囲をぐるぐるとまわる。白槇の老樹は一回りするごとに、苦しそうに枝をゆすぶり葉をふるはせて、ギイッーと幹をねじらせる。

今も御堂さんの老白槇（一名ねじ白槇）には、こうした暗い過去が秘められていると伝えられる。

2

今からざっと三百年の昔、亀山には湯川直春の居城があった。平素は山麓の小松原に舘をかまえ、日高地方に威を誇っていたが、天正十三年（一五八五年）春三月、豊臣秀吉によって一族は滅ぼされ城も焼けた。

また入山もつい最近まで城跡があり、青木勘兵衛が住んでいたと云われ、附近には女郎橋などの名も残っているが、その所伝は一向明らかでない。

いづれにしても三百余年の古い昔に亡び去った、湯川、青木の亡魂が、今もなお荒れはてた城跡にのこり、風のない生暖かい夜迷い出て、入山田圃を彷徨し、菩提寺日高別院を訪れるのだと云われる。

3

ところが最近これについて御浜町長湯川忠一氏から面白い話を聞いた。

今から三、四年前、湯川氏は所用があって和歌山へ出かけた。何かの都合で意外に時間がかかり、やっと終列車で御坊駅に着いたのは大分遅かった。

一人で駅前の広い通りを西にとって、斎橋を渡り和田村の自宅へと近道を急いだ。あの辺りはどちらを見ても広い田圃中で、人家は遠く淋しいところである。時々斎川で雑魚のはねる音がした。

と突然行く手がボオッと明るくなった。「オヤッ」湯川氏は目をみはった。すると怪しむべし、前方数十米の所に一抱え程もある野火が浮かんでいるのではないか。と見る間に怪火は「ザアーッ」と音を立てながら近づいてきた。流石の前陸軍獣医大佐湯川氏もこの時は度胆を抜かれた。さては入山の野火が出おったか。湯川氏は思はず道傍に立ちすくんだ。

野火は然しそんなことにおかまいなく距離をちじめ、アッという間に湯川氏の体を包んだかと思うと、更に進んで田を渡り、畔を越え長く尾をひきながら、斎川の水中へ音を立てて消えた。

4

「だから清水君」湯川氏は一息ついて語った。

「入山の野火は、あれは直春の亡魂でも、青木の妄念でもなく夜光虫の一種だよ。何故って、君、野火が飛ぶ時ザアーという低い音が聞こえた。つまり虫が空気を切って飛ぶ音さ。現に野火に体を包まれた時、顔といわず手といわず、無数に細かい虫がぶつかったし、川へ消えた時ザアーと水音がしたのもその証拠だ。昔から入山の野火に出くわしたら、ワット大声で怒鳴ると火の魂がわかれるというのも、夜光虫が驚いて群れをわる

のだよ。」
語り終わって湯川氏は煙草の煙を、うまそうにはいた。

「新紀州新聞」昭和三十年六月九日掲載

試胆会

この頃はあまり聞かないが、昔はよく試胆会が催された。若い者が集まって一つゞ怪談を披露し、一話がすむごとに部屋の蠟燭を一本づつ消してゆく。こうして皆の怪談が終わった時、部屋は真の闇となり、夜も更け渡る。

この時仲間の者が順次火葬場や鎮守の森へ出かけて、香炉を持ってきたり、算術の問題を解いてきて、その豪胆さを自慢しあったのだ。

私の村でも今から三十年程前青年団の主催で試胆会を行ったことがある。何でも春さきの小雨のびしょびしょと降る淋しい夜であった。例のように怪談がすんで火葬場へでかけ帰るという定めであった。

火葬場は部落から遠く離れた山の中にあり、昼間でも鬱蒼とした気味の悪い所である。

第一番にくじに当たったのは、運悪く某というひ弱な青年であった。某は然し行けないとあっては仲間から笑はれるので意を決して出かけた。ところが何処にでも悪戯好きの青年があるもので、このまゝでは面白くない、途中で臆病者の某をおどしてやろうと相談し、二、三人でひそかに先廻りして、某が通る道端の柿の木に上り古莚をだらりと垂らして待っていた。

そんなこととも知らぬ某は、暗さは暗し、雨は相変らず降るし、全身の神経を針金のように鋭くしてやってきた。

「来た来た」

柿の木の二、三人がささやいた。愈々足音が近づいた。今や柿の木の下を通り過ぎようとした瞬間、かねて用意の古莚をバサリッと某の頭上へ落しかけた。と思うと「ヒャー」某は世に悲しい大声をあげてへたくとその場へ腰をぬかした。

ところがおかしいのは一角（いっかど）勇士ぶった樹上の三人である。彼等は莚を落した瞬間、余りにも大きな悲鳴に、逆にキモをつぶし、ワッツとばかり飛び上った拍子に、相前後してドサくと木上から転げ落ちた。

これは筆者の住所川辺町小熊にあった事実談である。　……おわり……

度胸くらべ

「新紀州新聞」昭和三十年六月十四日掲載

御坊市藤田町吉田の素封家山本昇太郎氏の父君某は、豪胆な人であった。

生来酒を好み、夕食がすむときまって小松原の小料理屋の「平次郎店」へ出かけて、一杯のむのを楽しみにしていた。

吉田から小松原へ行くには吉田八幡社の社前を通らねばならぬ。あそこは通常八幡の越と云われ、最近樹木が伐られて明るくなったが、もとは幾抱えもある樟の大木が茂り、昼なお小暗く淋しいところであった。然し豪胆な某はそんなことには頓着なく、毎夜、夜半の十一時、十二時頃ほろ酔い気げんでこゝを通って帰る。

このことを知った村の若者達は、某は胆のすわった男というが、果たして事実かどうか試みて見ようではないかと云いだした。それには八幡の越でおどすのがよい。日は何月何日。方法はこういう次第でと相談がまとまった。

愈々当日になると日の暮れるのを待ちかねた若者達が五人、六人と集った。偵察の一人が「平次郎」店へ走った。

「居る、居る」

某はいつものように、店先の火鉢の前で盃を傾けていた。九時になり十時になった。某はまだ御輿を上げない。

「おそいナー」

誰かゞをあくびした。

「待て〳〵もうしばらくだ」

今夜こそは流石の某もアッと腰をぬかすに違いない。一同は意気込んで夜の更けるのを待った。

「来た〳〵某は今「平次郎」店を出たぞ！」

偵察の一人が荒い息を吐きながら注して来た。

「ソレッ！」

一同はかねて手筈の部所についた。

そこはちょうど八幡社の前で、道が少しカーブし大きな樟樹がある。若者達は木影に集まると、五人程で順

次肩車をしたので、一番上の者は樟の木の一の枝へ届く程の高さになった。そこで上部の者は樟の枝に片手をかけ、片手には夜目にも白い晒木綿を持って地上までだらりと垂らしたので、何のことはない一寸見ると異様な大入道が出来上った。

そんなことゝは知らぬ某は、例によって一杯機嫌で義太夫の一節を口ずさみながら、ふらり〳〵と歩いて来た。若者達と某との間隔は次第に近くなる。程よい処と見た怪物は、おもむろに声をかけた。

「これッ！某」

「ハッ！」

不意に名を呼ばれた某は流石にハッとして左右を見まわした。然し昼間でさえ小暗い所なのではっきりとは見えないが行く手に異様なものが映った。じっと瞳をこらすと、それは途方もない大入道であった。

瞬間某は二、三歩後へ飛び下がると、その場へ平伏した。

「流石の某も今度は参ったナ」

若者達は内心微笑んだ。

然し平伏した某は低いがしっかりした声で

「ごいされもせ」（御免なさいの方言）

「ごいされもせ」

と、しきりに繰り返した。然もおかしいことには、某は平伏したまゝ「ごいされせ」を繰り返しながら、少しづつ怪物の方へにじり寄ってくるのだ。腰を抜かしたのなら後へさがりそうなものだが、反対に若者達の方へにじりよって来る。そして今や怪物へ二、三歩という距離まで近づいたと思った瞬間、某はサッと立上がったと見るや、ヤッばかり白木綿を奪い取り自分の腹へくる〳〵と巻きつけ、いきなり肩車をしている一番下の若者に掴みかゝったからたまらない。忽ちにして五、六人は不意をくらって、ドッとばかり折重なって地上へ崩れ落ちた。

かくて若者達の計画は見事に敗れ、やっぱり某は豪胆者と相場がきまった。五、六十年前の話である。

「紀州新聞」昭和三十二年四月十四日掲載

山祭りと山の神

山祭りと山の神のことを訊かれたが、詳しいこと知らない。

川辺町矢田地区で現在山祭りの行われているのは、中津川、千津川の二部落のみで、それも極少数の山稼ぎの人達（主に製炭業者）に限られている。即ち旧暦十一月七日を山祭りの日とし、終日業を休み御神酒やおはぎを供えて山の神を祀る。

この日は山の神が樹木の数をかぞえるので、立木を伐ってはならぬという全国的な戒めが、此処でもまた伝えられている。

○

手もとにある民族学辞典によると

山の神は山を領する神として、全国一般に信じられ・ナニサマ・サガミサマ・オサトサマとも呼ばれる。農民のいう山の神は、春は山から里に下って田の神となり、秋の収穫がすむとまた山に帰って山の神となるが、猟師や、炭焼き・木樵など山稼ぎ人の信ずる山の神は、田の神と関係がないらしい。神社の祭神としての山の神は、大山祇命や木花開耶姫とされている。山の神の性格を男神とする所と女神とする処があり、また夫婦神として信ずる処もある。云々

とある。

○

さて山祭りが何故旧暦十一月七日かは私には分からない。この日山の神が木を数えるため、立木を伐ってはならぬとの傳承は、山稼ぎの人達が一斉に仕事を休み、厳粛に神を祀るべく、云い出されたものではないかと考える。古い時代のお祭りは現代のように遊戯的なものではなく、もっと厳かな真剣なものであり、祭礼に当たっては、各自が精進潔斎して、心から神に仕えたものであるからである。

○

話が飛んでもない方向に脱線するが、亭主が女房を山の神と云うのは、田楽の舞いに出て来る里の神は、素晴らしい美人であるが、山の神はまた恐ろしく醜婦である。そこで自分の妻君を他人に云う時、「うちの女房は山の神のように醜い女で」と云ったことによる由。これは隠語辞典にある。

紀南俗風土記

「紀州新聞」昭和三十年七月二十八日掲載

南方先生の一面

十八ヵ国の国語に通じ、専門の粘菌研究では数々の新種を発見し、その他、民族学・人類学・国文学・佛教研究も特異な地位をしめ、紀州が生んだ世界的学者として有名であった南方先生の著作の一部は、先年十六巻の全集として公刊されたが、その中には昨今流行の「はだか随筆」や「馬のり随筆」以上の、珍奇な話が充ちている。

氏嘗て大英博物館に勤務中のこと、日本からさる高貴な方が英国に遊ばれ、大英博物館を訪われた。この時南方先生が謹んで、やんごとなき方を案内されたのが、事もあろうに博物館の特別室で、そこには日本から流れ出た夥しい春画が陳列されていた。先生はこの目も眩むように艶かな男女秘戯図を前にして、我国殖産興業の基、実にここにありと滔々たる熱辯をふるった。

海外生活十五年を終て皈国した先生は、しばらくして西牟婁郡田辺市に居をかまえ、有名な闘雞神社の社司の令嬢を妻に迎えた。時に先生は四十歳、夫人は廿八で共に初婚であった。

然し研究に没頭していた先生の日常生活は、世間の新婚風景とは全く違っていた。二六時中殆んど素ッ裸で顕微鏡ばかり覗きこみ、研究半ばに昼飯を出したと云っては膳部を投げ飛ばし、思索の最中に話しかけたと云っては鉄瓶が舞い、如何に貞淑柔順な夫人もたまったものではない。三度に一度は売り言葉に買い言葉で、つい荒い言葉に花が咲いて実家へ逃げ皈る。

すると先生はその後を追うて闘鶏神社の拝殿に素ッ裸で上りこみ、大あぐらをかいて、結婚以来の夫婦間の秘戯を、微に入り細かに至るまで洩らさず書きつけた日記を、声高らかに第一頁から読みあげる。

まことに天下無類の珍妙な日記だ。これを読み上げられては夫人は顔から火を出さんばかり、真赤になって便所へ隠れて耳を塞ぐ。舅も姑も開いた口がふさがらず、何事がおこったかと駈けつけた町内の人々も、腹を抱えるやら、おかし涙をこぼすやら大騒ぎ、両親は娘を呼び出し、「親が両手を合わして頼むから、どうどもう一度皈って呉れ」と宥めすかして、もどすのが常であったと云う。

この話は中山太郎の、「私の知っている南方熊楠」の一節にある。

陰陽石

最近ハイキングコースとしてめきめき売り出している、煙樹浜アメリカ村コースのほゞ中ほど、紀州灘の怒濤が岩に砕ける所、美浜町本の脇磯辺に一個の奇石がある。岩の内部が空洞になっていて、潮が満ち、

波が打ちこむと、恰も巨鯨が潮を吹くように、岩の割れ目から数米の高さに潮を吹きあげる。殊に海が荒れた日は噴水も一入り見事で、道行く人を思わず立止まらせる。

抜け目のない地元の観光会社では、早速写真にとり、潮吹岩と名づけて、大いに宣伝につとめている。

然し土地の人は潮吹岩などと云う利いた風な呼び方をきらい、無雑作に〇〇〇岩と呼んでいる。蓋し巨岩の割れ目から潮の吹くところは、女陰を連想させるためで、これに似た話は他にもある。

由良町衣奈に黒島という孤島があって、この島を形成する岩石は割れ目が深く、中にまた小さな岩があり、常に潮を打ちこんでいる。「紀伊名所図会」では之を仏岩と称し、挿絵まで入れて示しているが、土地では専らチョボ岩と云い、女陰をあらわしたものと傳えている。

また東牟婁郡熊野川沿岸にも陰陽石があって、寛政頃（西暦一七八九～一八〇〇年）大阪の人林信章が、熊野に旅行した時書いた熊野紀行「浦のはまゆう」の中に、男岩・女岩として記しているし、雑誌「郷土趣味」三巻六号（大正十一年（一九二二年））田中緑江氏の「性的神行脚」の項に陰陽石と題し

熊野川をはさんで、大まら石とよぶ太陽石と、すっぴ石とよぶ陰石が相対している云々

とある旨芝口常楠先生が「紀州文化」第一巻二号に紹介されている。

〇〇山

今から四十年ほど昔、私がまだ小学校の一年生のとき、由良峠へ遠足をした。道成寺表を通り、下富安を過ぎ、荊木へかゝった時、一行中の悪戯小僧某は、右手に聳える白馬連山の一峯を指して、

「あの山の名を知っているか？」と訊いた。もとより七つ、八つの子供達には他村の山の名など知ろう筈がない。

「教えてやろうか、あの山はナ〇〇山と云うんだゾ」

蓋し〇〇とは女性器中の一部を指したもので、流石の腕白小僧連もアッと声をあげた。

「本当だゾ。父ちゃんがそう云ったんだから間違いはない。」

某は昂然として肩をそびやかした。

以来四拾年、所要があって荊木を通るたびに、私はこの幼い日のことを思い出し、〇〇山と云う珍妙な名前を心に浮かべる。成程そう云って見れば、たしかにその山の形は女性器中のある物によく似たところがあって、〇〇山とは、よくも名づけたりと感心する。

然し実際に土地ではそうよんでいるのか如何か、一度荊木方面の人に訊いてみたいと思いながら、余り

にも露骨なその名称の故に、いまだ機会を得ないでいる。

○○○桜

海草郡貴志村栄谷福聚寺の境内に、面白い桜の木がある。この桜の木は表向き異名桜、または乙女桜と呼ばれているが、○○○桜の名で一般に知られている。

昭和六年（一九三一年）三月発行の、「和歌山縣史蹟名勝天然記念物調査報告書」第十輯に曰く

此ノ桜ハ通常○○○桜ノ名ニヨッテ知ラレタモノデ、現在ノ大ナル三株ノモノ、母木ハ、二、三十年前マデ同寺境内ニ於テ相当ノ古木トシテ残存シテヰタソウデアルガ、其ノ後老衰ノタメ枯レ失セ、今ハ其ノ跡スラ残ッテヰナイ。

此ノ桜ノ通称タル○○○ハ其ノ果形カラ起ッタモノデ、婦人ノ陰部ヲ意味スル俗語デアル（異名桜デハ里人ノ間ニ通用シナイ）。

現在ノ最大ナルモノ二株ハ特ニ竹ノ柵ヲ繞ラサレ、無風流ナ一ツノ句碑ガ建テラレテアル。碑面ニハ例ノ○○○桜の四文字ガ大キク刻マレ、其ノ下ニ、

〃花も実もゆかしき名なり　此の桜〃

ナル句ヲ二行ニ刻シ、蘭亭ノ二文字カ最下ニ見エテヰル。此ノ碑ハ前ニモ記シタ古木ノアッタ附近カラ、近年発掘サレタモノデアルトノ事デアルカラ、○○○桜ノ名ハ随分昔カラ一般ニ知レ渡ッテヰタモノト察セラレ、先年同村ノ有志デハ、古イ縁起ヲ有スル当寺ト、此ノ特異ナ桜トノ宣傳ヲ企畫セラレタ際、○○○桜ナル称ノアマリニ露骨デ卑猥デアルノヲ避ケ、異名桜ナル新シイ名称ヲ与エ、表向ニハ此ノ新名称ヲ用フルコトトシタノデアル云々

とあり、昭和六年和歌山県天然記念物として、立派に指定を受けた。愉快な話である。

続○○○桜

前晩つれ〴〵なるまゝに○○○桜を草した後で、和歌山県出身の我国新聞界の大先輩で、洒脱経妙（軽妙）の麗筆と謹厳重厚なる人格を以て知られた、楚人冠杉村広太郎先生に、同じくこの桜について書かれた一文のあった事を思い出した。楚人冠の文に曰く。

×　×　×　桜

和歌山で芸者に出ていた頃は、相当嬌名を走せていた或る女が、その後ひかされて、人の妻となってから、それからその男と別れて、今は和歌山在の山寺に、ただ一人引き籠っているといふ話を、和歌

第二次世界大戦に於ける日高地方の戦災記資料

はじめに

「紀州新聞」

昭和三十年八月五・六・七日掲載

山で友人から聞いた。それでは一つ小春日和の散策かたがた、弁当持ちで、尋ねて見ようぢゃないかといふ相談が、忽ち三、四人の間に纏った。ところが、困ったことは、和歌山在とのみで、村の名も寺の名も分らない。たゞその寺には有名な「×××桜」といふのがあって、それを尋ねて行きさへすれば直ぐ分かるとのことであったが、そも〳〵その「×××桜」なるものが、一寸赤面することなしに口にはし難い物件なのである。宿の女中にそこまで自動車をあつらへさせたら、女中が極て悪がって、その何とか桜〳〵と「何とか」をくり返している内に、自動車の方では委細心得ていて、「はゝ×××桜ですか」と、何の苦もなく埒があいたさうな。それほど有名な桜であって、和歌山県では昭和六年七月を以て天然記念物に指定している。

和歌山から約一里、北の方紀の川を渡って南海線の紀の川駅といふのから、彼是七、八丁も行った小山の麓に、その有名な桜のある曹洞宗の尼寺がある。その寺の庭に膝を容るるだけの草庵があって、そこに彼女は自炊している。ここから和歌山へ、煎茶と生花の出稽古に通っているのだという。彼は心がけのいゝ女であったから、芸者の勤めをしている内から、万一の用意にとそんな稽古をしていたらしい。

行って見ると、寺は山裾の日だまりになったところに立って、庭には山茶花が今を盛りと咲き乱れていた。如何にも有髪の尼が行ひすますには似つかはしい境地だ。有名な「×××桜」は堂のすぐ前にあって、立石に麗々と「×××桜」書いてある。和歌山県から立てた天然記念物の立札には、流石に憚って、「乙女桜」と書き改めてあるが、それでも、その説明が、一言でもいへることを、

「子宝に特異なる点あり其の熟したるものに心皮縫合線の一部裂開し中核露出す」とは、まはりくどい。これを書いた県庁の役人のくすぐったさうな顔があり〳〵と目に見えるやうな。

……以下略、カナ使いは原文のまゝ……

咽喉もとすぐれば熱さを忘れると云うが、どんな歓びも、悲しみも、苦しみも年月を立てば忘れられてゆく。あれからちょう度拾年。昼夜米機の空襲におびえ、美浜町三尾の焼夷弾炎上をはじめ、御坊市周辺の工場は爆破され、幾多の痛ましい犠牲者を出し、夜もゆっくり足を伸ばせなかった悲惨さも、十年の歳月はいつか薄紙をはぐように、私達の記憶を淡くした。

洵に第二次世界大戦に於ける日高地方の混乱は、今から三百年前天正十三年（一五八五年）の春豊臣南征軍の日高攻略以上の惨劇であった。然も変転常ない社会情勢は、今や憲法改正、再軍備と、再び私達を戦争街道へ押し出そうとしているかに見える。

この時にあたり、もう一度拾年前のあの苦難の日を回想するのも、あながち意味のないことではなかろう。

私は久しい以前から、第二次世界大戦に於ける日高地方戦争記をつくりたいと、準備を進めているが、実は私はその当時大阪に住んでいた為、戦争中の日高地方の事情にくらく、おまけにあの当時は上下挙げての大混乱と、軍当局の極度の秘密主義に禍され、何処にも詳しい記録がなく、たま〳〵残っていた資料も、敗戦直後の書類焼却命令で火中に投じられたものが多く、従ってこの記録もいまだ不完全な資料の域を脱しないものであるが、敗戦十周年を機会に一応公表した。

一、中津川空襲（昭和十九年（一九四四年）十一月二十七日）

第二次世界戦争に於ける米空軍の日高地方攻撃の第一弾は、川辺町中津川（矢田村中津川）に向けられた。この日は朝からどんよりとした天気で雲が多かった。川辺町役場（矢田村役場）八田菊蔵氏の報告によると、午前十一時頃川辺町東部で爆音が聞こえたと思うと、突然中津川字早稲田一六一番地の水田と、通称よゝも平の山林、その他中津川区内に六ヵ所と、早藤方面の山林に大型爆弾が投下された。落下地点には何れも直径十米、深さ三米ぐらいの大穴があき、松の大木が爆風で根こそぎ吹き飛ばされ、惨状目をおゝわしめたが、幸い人畜に被害はなかった。何しろこれは日高地方最初の爆撃であったので、各地から見物人が押しかけ、役場もその案内で多忙を極めた。

猶、御坊小学校日誌には、

十一月二十七日月曜

警戒警報発后〇時四五分

空襲警報発后〇時五一分

空警解除后二時十分
警戒報解除后二時十五分

とあって、中津川空襲の時間と少し符合しない。

二、三尾炎上（昭和二十年三月十四日）

その後戦局は益々緊迫し、連日のように空襲警報が発令されたが、幸いにして当地方に被害はなかった。処が年が革（あらた）まり昭和二十年に入り三月十四日夜半、突然美浜町三尾は米空軍の焼夷弾攻撃をうけ、三尾はじまっての大混乱に陥った。当時の模様を同村龍王神社神官奥山静雄氏の、「三尾村龍王神社記録」より抄録する。

昭和二十年三月十四日夜半頃突然大音響に眼を醒まし、外を見れば雲は一面の火に焦がされ、静雄の家の周囲も七、八個の流弾落下、之を防がんと力を尽く漸く消しとめたり。併し逢母は一面火の海と化し、誰の家とも見当つかず。然るに消防に手をつける者なく焼けるまゝにて、我隣家は異状なかりしが、暫くして大江方の竈屋より火を吹き出し、見る間に本家と隠居、倉庫に火は拡がり、あわや我家も焼けんとする勢い。老人の事故難を避け、暫く立退き居たり。神社境内及森林はこの間も間断なく見守り、いざと云う時の準備は怠りなく注意せり。幸いに異常なく、只鳥居脇の枯木に流弾一個かゝり居るのみ。之神徳の畏美恐美奉る次第こそあれ、我家も幸い危難を免れしは、御神徳と只管喜ぶの他なし。罹災家屋二十餘り。老母の妻子または夫婦の焼死せるものあり、実に悲惨の極なり。暁頃漸く鎮火す。焼失家屋は専ら直撃焼夷弾とす。失火等の際は村民挙げて消防に尽力するも、右の火災なれば各自我家を守り、消防に従事するものも、爆撃を恐れ出合う者少し。絶え間なく頭上には花火の如く焼夷弾、爆撃の音響き、落下する様実に恐怖の外なし。若し宮の森林に延焼せば全村に及び、其被害甚大ならん。然るに村の東端逢母より起り、一部落焼失せるは誠に不幸中の幸いなり。当夜は風なく小雨さえ降り出したり　云々

また昭和二十八年七月八日旧三尾村役場西一夫氏の報告には

① 焼失家屋＝弐拾弐戸
② 焼死者＝男弐名、女四名、計六名

とある。

三、阿尾方面山林炎上

この時また日高町阿尾部落の背後、三尾との境界附近の山林にも多数の焼夷弾が投下され、山林三、四町歩を焼いたが、幸いに人家の被害はなかった。もしこれが阿尾部落に落ちていたなら、三尾以上の惨害を免れなかったであろう。

四、小浦山林の炎上

この時の米機は先ず三尾を襲い、順次阿尾、小浦と焼夷弾を投下しながら、大阪方面に向かった模様で、日高町小浦の北、海岸際の山林へも多数の焼夷弾を投下、為に山林一町歩ほどを焼いた。その後焼失山林から拾いあげた焼夷弾ケースは約壱千個に及んだと云われる。猶この外にもこの時は日高町上志賀と、柏の山林へも焼夷弾が投下されたが、大した被害はなかった。

五、龍神村山林へのB廿九の墜落（昭和廿年五月五日）

山また山の和歌山県上、中、下山路の三ヵ村民は、昼頃尾鷲から真っ黒な煙を吐きながら落下して来た飛行機の音にびっくりした。

B廿九は上山路役場から三里余りの道一つない通称西ノ谷へ落ちた。谷川の河原を上って行った村民はそこに見たのは、無惨な幾体かの死体と、手を挙げまだ生きていた二人の米兵の姿だった。敵愾心をあおられた時代だ。しかし米国人を初めて見た村人の胸には、出征しているわが子の姿が浮かんだ。一旦殿原小学校に収容された米兵に、村人達は当時貴重な銀メシでつくったニギリ飯や、乏しいキザミをつめたなた豆きせるを差入れた。和歌山と奈良の県境で、全く文化に見離された貧しい村の人達であったが、敵味方を忘れ「ただ気の毒な兵隊を慰める」、これはその時出来るせめてもの行為だった。翌日米兵は憲兵に連れられて何処かへ行った。　下略　（昭和廿八年二月十日附大阪毎日新聞記事による）

六、切目村の機帆船と列車の襲撃（昭和廿年五月某日）

戦局が次第に逼迫するにつれて、米空軍の大型機のみでなく、艦載機も屡々日高沿岸に現われ、耕作中の農民や、人家、漁船、列車を襲うた。

この日もグラマン戦闘機は切目上空に姿を現わし、切目沖を航行中の機帆船一艘、七、八十屯ぐらい（船名、所有者未調査）に襲いかゝり銃爆撃を加えた。瞬間船は至近弾を受け、猛烈な水煙に包まれたが、浪おさまった時は、既に雲霧消散して船影はどこにも止めず、流れ出た重油のみが不気味に漂うていた。

またこの時別の一機は折から進行中の紀勢西線の列車を襲撃し、機銃掃射の雨を浴びせた。車中からは絹を裂くような乗客の悲鳴が聞こえ、客車は忽ち蜂の巣の様な銃孔をうけたが、幸い乗客に被害はな

かった。

（お願い＝この切目爆撃の日時と、船名、所有者、列車番号を御存知の方は、御手数乍ら紀州新聞社または筆者宛ご教示賜りたい。）

七、日高平野への機銃掃射（昭和廿年五月十一日）

御坊小学校日誌に曰う

空襲警報発令のため午前中授業なし。

敵機日高平野へ機銃掃射。

その他詳細不詳。

八、源行寺爆撃（昭和廿年六月七日）

御坊小学校日誌に曰う

午前十時十分空襲警報発令。

十二時解除。臨時休校。

とあり、この日御坊町が初めて米空軍の本格的な爆弾攻撃を受けた。即ち御坊町名屋源行寺とその附近へ大型爆弾三個が投下され、源行寺は全壊、附近民家数戸も破壊され、拾数名に上る死傷者が出た。旧御坊町役場の調査では死者九人、傷者六人、家屋全壊九戸、半壊拾戸とあり、源行寺住職湯川憲文師の筆者宛書簡に

昭和廿年六月七日B廿九の直撃弾により、本堂、庫裡、鐘楼、表門倒壊、墓石の破片は遠く数町さきの人家の中へ落下した―云々―

とあり、町民を恐怖のどん底に叩きこんだ。

九、寒川村串本へB廿九の墜落（昭和廿年六月廿二、三日（六月廿六・七日））

上山路村通称西ノ谷へ米機が墜落して漸く一ヵ月余。ここ日高川上流川上、寒川兩村民は、この日正午過ぎまたしても、B廿九の不気味な爆音に驚かされた。田植えに忙しい手を休めて空を見上げた。高い山と山の間を煙を吐き乍ら、大型機がよろめくように飛んで行った。

これぞ同日大阪市を襲い、府下金岡町付近で日本軍の攻撃のため傷つき、紀州の山岳伝いに熊野灘に脱去中の米機であったが、遂に力尽き、寒川村串本の吊橋、通称小ざくら橋附近に墜落した。

墜落に先だち搭乗中九名は、それ〴〵落下傘を身につけ、川上村初湯川に二名、同猪谷に二名、其他

は附近山中に降下し、二名は機体と運命を共にした。

村民は直ちに集合して手を挙げて部落に出て来た兵隊を収容したが、中には山林中に入って、姿を見せぬ者もあり、降下地点を目あてに、手んでに竹槍、鎌、鍬を提げ捜索にあたった。すると深い木立の上に落下傘が目についたが、人影は見えなかった。附近を探すと一人の兵隊が右足を爆弾で打ち抜かれ、苦悶していた。これは金岡方面上空の戦闘で負傷したもので、村人達は直ちに落下傘の布で急製の布で担架を作り河原河まで運んだ。

また戦死した二人の遺骸は山蔭に葬られ、粗末ながらも墓標を建て、恩讐を超えて冥福を祈っていたが、戦後米軍に引取られ、村民の三、四人は東京の米軍に召喚された。然し当時の取扱いが当を得ていたので、何事もなかった。

（お願い＝この日も廿二日とも廿三日とも云い、はっきりしない。御存知の方の御教示をお願いする。）

十、切目川村空襲（昭和廿年六月十五日）

切目川村長滝本惣太郎の筆者宛書簡に曰う。

昭和廿年六月十五日午前九時頃、切目川村宮の前にB廿九による空襲あり、大角形長さ二尺位の黄燐焼夷弾、二間位に一弾位の割で落ちた。弾を受けた家は堀清太郎家の軒を貫いて道路に落ちたが焼けなかった。滝本正夫住宅、納屋等一切全焼。飼牛も焼死（数弾を受けた）。滝本惣太郎住宅一弾、火災を起こしたが、愚妻疎開して皈っていたので消しとめた。弾は何個か一束になっていたが、バラケないで落ちたのも相当あった。拙宅の西隣、東隣、北隣に各一束落ちていた。之がバラケていたら拙宅も全焼していたでしょう。天祐ですよ。妻が田辺で防火演習をやっていたのが有効でした。

十一、浜之瀬、日本アルミ　天　田、臨鉄日高川駅の爆撃（昭和廿年六月廿二日）

御坊小学校日誌

金曜晴午前七時半空襲警報発令、十一時半解除

空襲のため学童四名爆死。

御坊町外三ヵ所投弾。浜の瀬五十名爆死、天田、名屋等

旧御坊町役場報告

死者二十一、負傷六十、全壊八〇、半壊十二

旧松原村役場報告

爆死三十四、重傷三、軽傷二十、全壊一戸、半壊六戸

とあり、戦争中を通じて最も凄惨な爆撃であった。目標となった日本アルミ工場は、蜂の巣のように叩きこわされたのは勿論、浜の瀬松林の中に退避した市民や学徒動員は、襲撃されて多くの犠牲者を出し、爆風にあふられた死傷者の肉塊はあたりに散乱し、鮮血は飛んで煙樹が浜の砂を紅に染め、惨状目をおおわしめた。

また、御坊臨港鉄道日高川駅も、一トン爆弾十一弾を受け、機関車及び油槽庫が全焼し、待合室その他全壊した外、天田方面の山野も爆撃され、折りから陣地構築中の兵隊数名が死傷、附近人家の硝子は破れ、雨戸は吹き飛ばされた。

なおこの被爆の状況について、昭和廿八年六月廿五日から七月一日まで六日間に亘り、御坊町稲葉稔彦氏が「私と爆死のS君」と題して、詳細な回想を「紀州新聞」に発表している。

十二、源行寺附近と田井畑爆撃（昭和二十年六月二十六日）

御坊小学校日誌によれば

午前七時警戒警報発令
七時卅分空襲警報発令
十一時四十分空襲警報解除
十一時五十分警戒警報解除
午前臨時休校
源行寺附近投弾。学児一名爆死

とあり。

旧松原村役場報告には

大字田井、田井畑に於て全壊家屋三戸、半壊一戸とある。

十三、川上村浅間の焼夷弾炎上（昭和廿年七月某日）

川上村大字浅間は、関西電力株式会社越方発電所の堰堤のある所で、日高川をはさんで東西に二十数戸の人家が散在する淋しい山村である。

むし暑い夏の夜で人々はまだ床に入らず、厳しい灯火管制の下で、不安な戦争の前途を語り合って

いた。と突然無気味なB廿九の爆音が聞こえたと思うと、ザアーと一種異様な空氣を切る焼夷弾の落下音がして、日高川の東西にまたがる全部落に亘って、三十数発の焼夷弾が、雨のように投下された。瞬間二、三戸は火の柱となり燃え上がった。家財一つ取り出す暇もなかったし、村人も各家庭を護るに手一杯で、消火に馳けつける事も出来なかった。

全焼　住家一戸二棟　製材所一棟　納屋一棟

また部落を外れ日高川に落ちた焼夷弾は、河中で発火して燃え上がり、一時火の川となり、恰も長良川の鵜飼を見るようであったと云う。

（お願い＝この日時も未調査である。御存知の方は紀州新聞社、亦は筆者宛御教示を乞う）

十四、艦載機の来襲（昭和廿年七月十日）

御坊小学校日誌に

九日零時頃警戒警報発令

続いて空襲警報発令、艦載機来襲

とあるが詳細不明。

十五、小竹八幡宮附近新町爆撃（昭和二十年七月二十四日）

御坊小学校日誌に

早朝より空襲警報あり臨時休校

御坊八幡社附近に投弾、小川通子先生宅被害。

とあり、旧御坊町役場調査には

死者弐名、全壊九戸、半壊七戸

とある。遭難者の談によると、爆弾は小竹八幡神社広場と、新町田淵善兵衛氏宅附近に投下されたため「葵美人」醸造元田淵酒造店、田淵国蔵氏、八百福商店、その他が全壊、居合した二、三名は倒壊家屋の下敷きとなったが、後救出された。また八百福商店の家族二名が爆死、日本アルミの守衛某は退避の途中、八幡神社前で爆風で飛んで来た石片で負傷した。

十六、田井畑の空襲（昭和二十年七月二十五日）

御坊小学校日誌に

同日早朝より空襲警報あり、敵小型機御坊上空より爆撃す

とあり

旧松原村調査資料には

全壊一戸、半壊七戸、人畜被害なし、詳細不明。

十七、日ノ岬燈台の機銃掃射（昭和二十年七月二十五日）

米軍艦載機グラマン戦闘機は日ノ岬燈台に機銃掃射を浴びせ、反射レンズ、折射レンズ、回転機械等を大破、点灯不能に陥らしめた。かくて明治二十八年（一八九八年）一月二日の創立以来五拾年に亘って、南海の守りとして灯しつゞけて来た燈台の灯も、この日限り消滅した。（註＝戦後復興、昭和廿六年七月十二日現在の位置に移転点灯）

十八、由良湾内海防艦の爆沈（昭和二十年七月二十八日）

御坊小学校日誌に

七時空襲警報発令、十一時解除、後突然空襲あり、臨時休校。

とあり、昭和二十八年三月十七日付「紀州新聞」に左の記事あり。

昭和廿年七月廿八日午前九時頃、由良港停泊中の海防艦第三〇号七百五十噸はB廿九の直撃弾を受け、司令塔にて指揮中の楠見直俊中佐艦長は、「危ないから機関室に入れ！」と云いつゝ倒れた。その後、松尾艦長代理が指揮をとり応戦したが、午後八時炎上、廿九日午前零時頃沈没した。またこの時附近に碇泊していた姉妹艦百二十号も損傷を受けた。

十九、日ノ岬炎上（昭和二十年七月三十日）

午後、米軍艦載機グラマン戦闘機は、日ノ岬燈台に機銃掃射を浴びせ、小型爆弾を投下し、これを全焼した。

十九、和田済広寺の機銃掃射（昭和廿年八月初旬（月日不明））

米艦載機は日高平野に飛来し、和田方面の水田に作業中の農夫をねらい、人家を襲い、済広寺の山門を機銃掃射し、屋根瓦約三十枚を破壊した。後日破れた山門を修理した際、屋根から多数の機銃弾が発見された。

おわりに

以上で私の集めた資料は尽きたが、多忙の間に成ったもので、この外に調査洩れや、日時その他の点に誤りが多かろうと思われる。御気付きの方や外に資料を御存知の向きは、川辺町大字小熊清水長一郎宛御連絡賜れ

ば幸いである。日高地方史上空然であった戦災の事実も、誰かの手によって整理しなければ、やがて永久に忘れられてしまう。それでは一寸次代の人々に無責任な気がする。この点戦後出版された西牟婁郡「田辺市誌」などには、編者雑賀貞次郎氏によって、詳細正確に記録されて羨ましい。御協力をお願いする所以である。

―昭和三十年七月二十四日稿―（完）

地方新聞は如何にあるべきか

「紀州新聞」昭和三十年八月二十一日掲載

序

一口に地方新聞と呼ばれるものにも、一郡、一市、或は数ヵ町村ぐらいを基礎とした、発行部数三、四百程度のものから、北海道、九州または山陰、北陸と、広い地域を対象にし、数万乃至数十万の読者をもつものまで、その種類はいろ〳〵あるが、こゝでは凡そ一郡ぐらいを単位とした、地方新聞のことをとりあげてみる。

一、地方新聞のニュース

新聞のもつ第一の使命は云うまでもなく報道であって、このことは中央紙も地方紙も異るところはない。たゞ何を報道すべきかは、その新聞の規模や性格によって、著しく違って来る。

例えば一郡ぐらいを単位とした地方紙に、国際ニュースを大きく掲げたとしても、それがその地方に特に関係がない以上、多くは大新聞の受売りに終り、読者も中央紙で一通り読んだものをくり返すことになり、さらに感興がないばかりでなく、時には編集者に対し軽蔑感さえ抱かせるから、これは扱わない方がよい。亦国内の大ニュースでも、特にその地方や地方出身者と縁のないものは、取りあげない方が賢こく、それだけの精力と紙面は、地方的なニュースの報道に集中すべきである。

従来の地方紙の報道はやゝもすれば新聞社所在地のでき事のみ偏したきらいが、ないではなかった。これは通信網が各町村にゆき亘らない為に生じることであり、通信員を各町村にまで配置することは、とうてい望むべくもないが、一面取材記者が安易な市内めぐりのみに終始する罪でもある。

幸いにして昨今は、軽便な気動車が普及しているのだから、これを利用して、せい〴〵各町村を廻ることである。

総じて地方新聞の読者は、読者自身の身近におこった事柄に興味をもつものであるから、例え小さな事件で

も、ニュース價値のあるものは、こまめに拾うべきである。これは何も刑事事件のみに限らないし、ニュースの提供者は、警察署や役所だけではないのである。

二、地方新聞の文章

次に地方新聞の文章であるが、今までは往々にして、その表現が少し低劣すぎはしなかったか、もとより新聞紙は学術雑誌や論文集ではないのだから、必ずしも上品ぶる必要はなく、紙面に潤いを持たせることも大事ではあるが、くだけすぎて真面目さを失ったり、ことさら他人の人格をきづつけ、品位を損なうような表現は厳に戒めたい。

三、地方紙の指導性

嘗て無冠の帝王と誇称し、がく〳〵の論を持って一世を指導した、ひと昔前の華やかさは既に去ったが、社説なり新聞の主張の影響力は今も大きい。

この故に新聞紙は中央紙たると地方紙たるを問わず、世論の正しい動向を察知して、これが育成助長につとめねばならぬ。新しい問題は常に私達の身近におこりつゝある。

殊に地方紙の場合は、問題が読者の身辺に近く、その帰趨が直ぐ目の前にあらわれ、実生活に影響することが多いから、読者にとってはそれだけ興味が深く、かつ真剣である、従ってこれを上手にとりあげ、盛りたてゝ行き、地方の輿論化に成功すれば、新聞紙の信頼性を高め、期せずして読者は増えて来る。たゞ正しい方向を見極める識見と正しいと信じたなら、あらゆる反撃にもひるまぬ勇気を忘れてはならぬ。

四、地方紙の文化性

中央の大新聞が、何れも家庭欄や趣味欄乃至文芸欄に大きな紙面を割いているのは、最早や今日の新聞が、単にニュースを傳えるだけでは成立たないことを物語るものであるが、これも下手に真似するだけでは、中央紙の二番煎じになって、却って物笑いの種になる。

矢張り地方新聞は地方新聞として、その土地に則した話題をとりあげたり、企画を行わねばならぬ。例えばその地方の特産物、日高地方では夏柑、椎茸、梅の由来、沿革の紹介や、村々にかくれている特異な人物の訪問記、忘れられた伝説や風俗をさぐるなど、数え挙ぐれば新しいプランは幾らでもある。

然しその為には記者自身の努力と、勉強が必要である。はっきり云えば、従来の地方新聞の記者諸君は、もう少し勉強が必要ではないかと思う。例え毎日筆にする事柄が雑駁な俗事であるにしても、内に深い教養があれば、自ずと気品が滲み出て来るものである。

五、地方新聞と情実

是も地方新聞に限った問題でないが、特に地方新聞は情実に流れやすい傾向がある。都合の悪い記事が出そうになると、あの手この手を使って、早速新聞社へ駈けつける。新聞社も平素の心易だてに負けて、つい希望をいれてやる。

その結果当然報道されるはづの事件が、うやむやに葬られ、却って中央紙の地方版に出て、ナーンだと云うことがまゝある。然し何しろ狭い土地のことだから、世間の人は事件のあったことをよく知っていて、そこに疑惑の目を向けられる余地が生まれる。何故あの事件が報道されないのか？、何かあったに違いないと、痛くない腹をさぐられ、新聞への信頼感が崩れる。

こんな場合は新聞社の立場も辛かろうが、やはり事実は事実として報道するのがよいのではないか。信ずるものゝ少ない今日、私達はせめて新聞だけでも信じてゆきたい。

六、地方新聞と投書

一読して明らかに人を中傷したものや、〇〇と〇〇さんがどうしたと云うが如き投書は論外としても、総体に地方紙の寄稿の取扱い方は甘すぎる。玉石混淆が甚だしい。

雑誌「文藝春秋」がその編集上もっとも苦心するのは、同誌のはじめの方に収められている拾数篇の随筆であって、これは如何なる大家、碩学の寄稿といえども、精彩を欠くものは一切とらない方針であると、何かで読んだ記憶があるが、地方新聞の編者にもこれ位の見識がほしいものである。例えその為に自惚強い多くの投書家から怨まれようとも、敢然として投書にする勇気を希望する。

寄稿が勝れているかどうかは、文章の上手下手ではない。原稿の文字の巧拙では勿論ない。要するに内容である。何を読者に与えるかできまる。

七、地方新聞と広告

広告料が地方新聞社の経済面に、どれだけのパーセントを占めるかは知らないし、少なくも名の通った日刊紙では不当な広告は見受けないが、中には記事よりも広告の方が多く、購読料よりも広告料を目的としたものがあって、関係者を困らせるものがある。然しこうしたものは、正しい意味で新聞紙と云えるかどうか、一考の余地がありそうだから触れない。

一時暦とした大新聞で如何にも記事のような広告を掲げたことかあった。うっかり真面目になって読んでゆくと、おしまいの方に小さな字で(広告)と断り書きがしてあって、ひどく馬鹿にされたような気がしたもので

ある。これは読者の方にも広告と普通記事を広告を見分ける眼識がなかった為で、あながち新聞社のみを責めるのは当を得ないが、やはり瞞(だま)されたという感じが強く残り、ひどく後味がよくなかった。

このごろは流石にこんな種類の広告は見かけないが、一見して如何にも依頼されて書いたような特定商店の提灯もち記事を、地方新聞では時々見る。オヤオヤと思って広告欄を見ると、その商店の広告がチャンと出ている。思うにこれは広告を貰った御礼の意味で、記事の方でも宣傳しているのであろうが、これなどは如何にもやり方が現金すぎて、新聞社の品位をおとすから避けねばならぬ。

またよく問題になることだが、映画の紹介なども、毎日あれ程大きな紙面を割く必要があるだろうか。成程今日の世界では映画程多くのファンを持つものは少ない。映画を知らずして現代を語る資格はないとも云える。然し世の中の人は、毎日映画ばかりを見ているわけでもなく、推奨に値する傑作はそうザラにあるものではない。何事もほど〳〵にこそ。

八、地方新聞記者のあり方

このごろは地方新聞記者の素質が立派になった。ひと昔前地方新聞記者と云えば羽織ゴロと間違われ、無頼漢のように思われた時代とは、隔世の感がある。

これは記者諸君の不断の修養と、一般人の地方新聞に対する理解ができて来たこと、新聞社の経済が裕になったことなど色々の結果であろうが、何にしてもよろこばしいことである。

然し中には、今でも新聞社を毛嫌いし、新聞記者と云えば恐ろしい者のように考える旧い型の人がいる。記者諸君のうち万一にもこうした人の心理を見誤り、若しくはその弱点に乗じて、何か己れを一個特別の者、偉い者、許された者として、思いあがった行動をする者がありとすれば、それは己れの身を破るのみならず、ひいては新聞社の名声を傷つけ、世間の指弾を受けるであろう。

云うまでもなく新聞記者といえども、善良なる一個の市民であらねばならぬ。そこに何等の特権もない。どこまでも愛され、親しまれ尊敬される社会人であってこそ、よい新聞ができ上がる。コワモテされる新聞記者や、新聞社になってはおしまいである。

九、地方新聞の首脳部へ

例え数百、千の新聞の経営者であっても、歴とした一国一城の主で、その地方の名士であり、有力者である。従って地方の政界や実業界、その他色んな方面から誘惑が多かろうと思われる。

然し迷ってはならぬ。欲を出して八方へ手を拡げ、精力を分散してはならぬ。道はひと筋である。あらゆる

力を新聞に傾注すべきである。この点死んだ朝日の村山龍平や毎日の本山彦一を範として貰いたい。

十、結　び

以上で私の云わんとする所は大方つくした。平凡な一市民の日ごろの考えを、順序もなく書並べただけで、何等の卓見もない。

世の中には色んな人がいるもので、地方新聞というと、中央紙に較べて一段格がおちるかのように考え、私の家では地方新聞はとりません、或は私は地方新聞は見ないことにしています。と、妙なとこへ力瘤を入れる人が、私の知る限りでも、二、三人いるが、私はそうは考えない。

地方新聞には地方新聞の使命がある。中央に大新聞が必要な如く、それ〴〵の地方にはそれ〴〵の地方新聞が必要であると考える。

私は私の力相応の協力をして、少しでもよい地方新聞が育ってゆくようにと念願する。

このさゝやかな念願が私をしてこの一編を成さしめた。用語その他礼を失した点があるかも知れないが、乞うこれも諒されたい。　＝完＝

この「地方新聞は如何にあるべきか」は、「紀州新聞社」創立十周年記念事業募集論文の応募作です。

日曜随筆を讀む

「紀州新聞」昭和三十年九月十四日掲載

紀州新聞社創立十周年記念出版、西村蓬秋さんの「日曜随筆」を贈られた。

見事な出来栄えである。紙質と云い、製本、印刷、組方、装釘とも先ず申分ない。これなら東京一流の書店発行と銘打っても立派に通る。

殊に地方出版にありがちな、語字、誤植の少ないのは関係者の並々ならぬ苦心が伺われる。

正直に白状すると、こんな素晴らしい本になるとは予期しなかっただけに、手にした瞬間思わずアッと感嘆した。純白の表紙に紅と緑の二色で、サッと画かれた草花も印象的で、内容の美しさをよく表徴しており、清潔な感じを与える。

極端な云い方をすれば書籍は文字さえ読めればよい訳であるが、四季とり〴〵の花が人の心を和やかにする

ように、装釘の美しい書籍は読む人の心をたのしませる。この本を届けてくれた時は、私は事務所で面倒な計算をしていたが、その美しさにひかれて、しばらく忙しい仕事をおいて、ためつすがめつ眺め、手にとってドッシリした重量感をたのしんだ。聞いて見ると表紙と扉の絵も、背文字も題字も、すべて西村さんの手になったものと云うが、西村さんは詩情ゆたかな俳人であるばかりでなく、書画ともに巧みで、私のように口先だけが達者で、何のとりえもない無芸居士には一寸羨ましい。

私は昔から、随分ロクでもない本を乱読して来たが、読書の醍醐味は何と云っても随筆に尽きる。従って私は西村さんの日曜随筆も、毎号欠かさず愛読して来たが、時には西村さん京都の話もよいが、少しは日高のことも筆にしては如何だろうなど、勝手なことを考えたこともあるが、こうして一冊になって見ると、そんな感じは少しもしないばかりでなく、粗末なザラ紙に印刷した新聞で讀んだのと、こうも味いが異うものかと、今更ながら感心した。

この春であったか和歌山市のある新聞社から「紀州太平記」という随筆集が出版され、新紀州新聞の山崎円之助君から贈られた。著者は長く新聞界にいた人だけに、興味ある話題が数多くおさめられていた。が惜しむらくはひどい誤字、誤植である上、筆が達者すぎて、矢張り新聞記者が書いた文章という感を如何することもできなかった。それにくらべると「日曜随筆」は、流石に俳人蓬秋の筆になっただけに、肌合いが細かく、ちょうど絹ごし豆腐の味わいである。

殊にとりあげられている素材の多くが、著者の住む稲原村を中心にした日高地方の風物であり、私達の近所合壁が自然にかもし出す生活詩であって、しみ〴〵とした親しさを覚えさせる。これは傑れた随筆集であると同時に、昭和二十年代の日高地方の風俗誌としても一読に値する。

おしまいに、こんな事を云って西村氏に失礼だが、この本を読んで私と西村さんは趣味嗜好が非常に似通っていると思った。例えば西村さんは「昭和の一茶」と題して、もとの朝日の天声人語子、釈瓢斉を懐かしんでおられるが、私も句作は出来ないが大の瓢斉ファンであった。毎朝新聞の配達されるのを待ちかねて、真ッ先に天声人語欄に飛びつき、寸鉄人を刺す警句に喝来し、最後の軽妙な一句に腸を洗われる思をしたものだ。私の書斎の片隅には、今も幾冊かの天声人語の切抜帳が保存されており、瓢斉の著書は一通り揃っている。どこかで手に入れた瓢斉の色紙も、確かに押入の一隅にある筈だ。

亦、萩の花を愛することも西村さんと同じだ。萩は一見すると弱々しい女性的な植物だが、意外に強い生活力を持ち、この辺の野山の至る所に、卵形の可愛いゝ葉を付けて生い茂り、美しい花をつける。私はこのナヨ〴〵しな姿に心をひかれ書斎の前へ幾組か植えている。

その他「生理的緊張」の一章なども共感がもてる。西村さんがその昔、往復の途次用を足したと云われる、丹生、川中両村境の隧道附近は、私も二十年ばかり前、毎日自転車で越した所で、読んでいるうちに、矢筈、清冷を見はるかすあの辺りの壮大な景観が瞼にうかんだ。西村さんではないが、景色のよい所で悠々と立小便をする爽快さは捨て難い。これぱかりは男女平等の今日でも、男子のみが味わい得る特権と心得ている。上の句は忘れたが誰やらの歌に〝何とかゞ何とかで心しみじみ小便する〟と云う一首があった事を思い出す。こう書くとこの随筆は、たゞ花鳥風月を語り、西村さんの身辺雑事ばかりに終始しているかのように思えるが、そればかりではない。一例を挙げると、「四川蕎麦」と題する一章の如きは、甚だ興味があった。西村さん曰く

古書に見える四川蕎麦は中国四川省に産する蕎麦かと思っていたら、丹生村の江川、猪内川、大滝川、三津川の四川の地域に産する蕎麦なので、余りの身近に蕎麦の産地がある事を知り、今更嬉しく思った。これは初めて知った。日ごろ郷土研究の何のと大層らしく云っているが、実はこんな身近な事すら知らなかった。私はその古書と云うのも知りたいし、果たして四川が前記の地を指したものかどうかを究めたい興味が、湧然と沸きたつのを禁じ得なかった。この一事を教えられただけでも、「日曜随筆」は確かに、読むに値する書籍であった。

私は「日曜随筆」に事よせて、少し勝手なおしゃべりをし過ぎたようである。最後に紀州新聞が更に発展して、二十周年目には、第二、第三の「日曜随筆」を出されん事を祈ってやまない。═ 完 ═

昭和三十年九月九日夜、宿直にて公社事務室で、窓外の虫声を聞きつゝ之を草す。

亡友をおもう

「紀州新聞」昭和三十年十月十五日掲載

友人岡部愛治君が死んだ。こう書いても恐らく大方の読者の方は何のことやら分からないに違いない。彼は市会議員でも、会社の重役でも、役所の偉い人でもなく、全く名もない一介のサラリーマンに過ぎなかったのだから。

然し私にとっては思い出の多い男であった。まだ小学校へ通わない時分から、私達は毎日遊んだ。いわば竹馬の友である。今彼の死に逢うて私の胸にはさま〴〵な感懐が去来する。読者諸君には甚だ迷惑なことであろうが、しばらく私の甘い追慕を許されたい。

○

彼とはまだ小学校へ行かぬ頃から、学校を卒業するまで毎日遊んだ。私達の村の川や野や山や畑や田が舞台であった。私達は野山で虫をとらえ、魚をとり、秋は蜜柑や柿、栗を訪ねて日の暮れるも知らなかった。

その頃彼の家はあまり裕ではなく、その上弟妹が多かったので、彼の背中にはいつも幼い妹が負ぶされていた。が、彼は体格の丈夫な、きかん気な男であったので、背中の子をゆすぶりゆすぶり元気に跳ね回った。村の山の中で茸のある所や、栗のある所を見つけ出しては私達をさそった。

小学校へ通うようになると、彼はたちまち喧嘩の総大将になった。一方の腕白大将であった鼻柱の強い村長の息子も彼には敵わなかった。そのくせ決してやん茶ではなく、どちらかと云うと、おとなしい方であった。頭もよく成績も優秀であったが、家庭の関係で余り復習などはできないようであった。

彼は私と共に学校へ通い、帰ってから亦彼と遊んだ。早熟であって立川文庫など讀み出したのは彼の方が早かったのではないかと思う。話も中々上手で、荒木又右エ門、石見重太郎の噺など、手を振り身振りおかしく語った。

「やあやあ我こそは荒木又右エ門なり、汝等ぐらいは猪口才なり……」

彼が濃い眉毛を動かしながら語っている光景が今も目にうかぶ。その上私などのぼんやりと違い、世間智もたしかに彼の方が豊であった。私達は彼の指導によって蜜柑畑へしのび込んだり、芋をぬいたこともある。

○

学校を卒業して彼は京都へ出た。長い間京都市電に勤めていると聞いた。市電でも持ち前のきかん気と、明せきな頭で活躍したらしい。「京都市電の岡部を知らないか！」と一喝したら相手は、這々の態で逃げ出したよと語った事もある。

その後どういう経路を辿ったのか知らないが、戦後妻子とともに郷里にひっこみ、関西電力御坊営業店へ勤めていた。時々自転車を並べながら、彼の電力会社へ出勤するのと一緒になったこともあった。然し両方共一介のサラリーマンで、お互いに生活に追われ、しみじみ語る機会もなく数年たった。

しばらくして「愛ちゃん胸が悪いらしい！」と云う噂を聞いた。成程気をつけて見ると会社を休んで家に居る日が多かった。しかし時々日高川へ出掛けて鮎をとる彼の姿を見かけたし、元来が丈夫な体だから、そのうち回復するだろうと、意に介しなかった。そのうち療養所へ入院した事を聞いたが、相変わらず時々自宅へ帰っているし、その姿も元気だった。こうして数年たった。「愛ちゃん長いナァー」時々夕食の時など彼の事を、

それとなしに家内に聞いたりしたが、まさかそんなに進行しているとは知らなかった。

○

だからそのうち見舞に行かうと気にしながら、ズボラな私はまだ彼を見舞わなかった。今年八月同級の悪友達数名で同窓会と称して一杯やった時、岡部が大分悪いと聞いた。もうやせ衰えて声も出ない状態で、訪ねて行った友人が何かほしいものはないかと聞いたところ、何もほしくない、新しい刺身を食べたいと、だけ云ったそうである。

そこで皆で少しづゝ拠金して何か贈ろうと話がきまり、私が世話人を仰せつかりながら、怠けているうちに忽然として逝った。どこまでも薄情な私は彼の告別式にも出席できなかったが、会葬者の話では参列者も少なく、淋しいものであったと云う。

が私はそれでよいのだと思う。社会の第一線にたって万人に惜しまれながら、盛名のうちに逝くのも人生なら、彼のように平凡なサラリーマンとして、世間の人達から忘れられて、一人でこっそり死んで行くのも決して悪くはない。否むしろ生前一度も貰ったことのない花輪を、死んでから幾ら貰った処で何の役にも立たぬ。さらば愛ちゃんよ靜に睡れ。

（昭和三十年十月五日御坊祭の日、宿直室にて）

旦那氣質

「紀州新聞」昭和三十年十月二十五日掲載

①

御坊中町の和佐屋と云えば近在に聞こえた素封家で、大旦那の津村佐右衞門氏は古く御坊町長などもしたことがあるが、一癖も二癖もあった人らしい。

或時私の村の小作人某が年貢米の運搬を頼まれて、米俵八俵ばかりを荷車に積んで運んだ。

「旦那！年貢米を持ってきました」頬被りをとって頭をさげると旦那は、

「御苦労、御苦労、裏の蔵へ入れて呉れ」と上機嫌であった。

「今日は、どうやら旦那のお天気様はよいらしいナ」某はせっせと米俵を担ぎこんだ。三俵ばかりも蔵へ運んだ時、旦那はつかつかと荷車の側へ来て、出しぬけに

「お前、この米盗ったナッ」と、飛んでもない云い掛かりである。某も余りの事に一瞬キョトンとして
「そんな！旦那！」
「そんなって、その俵を見よ縄がこんなにゆるんでいるじゃないか。これが米を盗っている何よりの証拠じゃ」旦那は威丈高になって、いっかな聞きいれない。某も小作人こそしているが中々氣の利いた男なので、ここで態勢を立て直した。
「さようか、米を盗っているのか、いないのか俺は知らない。俵の中味がどれだけあるかも知らん、俺はとに角米俵八俵を和佐屋へ届けてくれと頼まれただけの話、今蔵へ納めた三俵と、車の上の五俵合せて八俵、ちゃんと見ときなはれ！」と云いすてると、荷車の上の五俵を和佐屋の庭へ転がしこんで、さっさと帰り仕度をはじめた。
「何だ、お前こんな処へ置いて、蔵へ運ばんか」佐右衞門氏の面にチラと当惑の色が浮かんだ。
「いや旦那、俺は和佐屋まで運んで呉れと頼まれて来たが、蔵まで入れるとは約束しなかった。蔵へ入れたいんなら旦那あんた入れなはれ」某はこう捨台詞すると、空になった荷車を軽々と輓いた。

②

この男はまた農閑期に牛車を輓いて、物資の運搬もやっていたので、ある時佐右衞門氏から庭石の運搬を頼まれた。巨きな石で車へ載せるのに大骨であったが、とも角積みこんで、早蘇村吉子奥から打谷峠も越し、和佐屋の表まで運んできた。
「旦那！頼まれていた庭石持ってきましたぜ」
「アゝそうかドレ〳〵」佐右衞門氏は庭下駄をつっかけると、庭の表まで出て来て、牛車の上の石を眺めると
「何だこんな石か」噛んで吐きだすような云い方である。
「こんな石なら、庭石にならぬからいらぬ。お前どこかへ持って行けっ！」と、劔もホロ〳〵の挨拶である。遠い山坂をせっ角持ってきたのに、某もむっとした。
「何処かへ持って行けって？旦那ッ旦那のいらん石は俺もいらんがの、捨てるのなら旦那自分で捨てなはれ」某は牛車の上の巨石を力まかせにつき落とした。石は地響きを立てながら、和佐屋の入口へ転がりこんだ。

後記

この二つの噺は、今年十月二日第一日曜日に村の道普請に出た時、休憩の間に村の老人から聞いた。この

噺をした人はもう八十近い爺さんだが、津村佐右衛門氏にかぎらず、昔の所謂旦那衆には、こんな人が多かったのではないかと思ったので、一寸書きつけて見た。

（昭和卅年十月廿日稿）

天誅倉に就て

「紀州新聞」昭和三十年十一月二十六日掲載

この一編は御坊市松原通り稲田稔彦氏から本紙「よろず相談」係へ、「日高郡龍神村の天誅倉、維新の史蹟について御教示下さい」との設問に対する清水長一郎氏の回答である。清水氏の労に対し感謝する。

一、発端

尊皇攘夷か、佐幕開港か、幕末の国論は鋭く対立した。然も徳川政権は既に昔日の威力を失い、世論に屈し文久三年（西暦一八六三年）将軍家茂上京して、攘夷の紀元を五月十日と定め

「攘夷期限のこと来る十日相違なく拒絶決行仕り候間、奏聞に及候、猶列藩へも布告致す可く候事」

と奏上した。が、六月に入っても実行の気配がなく、依然として開港場の交易を続け、あまつさえ生麦事件の賠償金を支払っていた。ここに於て

「この上は幕府の力は信じ難い。よろしく御親征あるのみ」

の強硬論が提唱された。こうした折柄、長州藩の吉川監物、益田右衛門介が上京、堺御門の御警衛に任ぜられ、彼等は藩主毛利慶親に代わり、藩主の名において攘夷御親征を建議した。

かくて孝明天皇は八月十三日、攘夷御祈願のため大和神武山陵、春日神社に行幸、御逗留の上御親征の軍議を遊ばされるとの御沙汰があった。

この報一度傳るや尊皇攘夷の急進分子たる浪士三十余名は、時こそ来れ！、今こそ我等先駆して大和に入り、義兵を募り天皇を迎え、攘夷御親征の先鋒たらんと、白面の貴公子中山忠光侍従を首班に仰ぎ、八月十四日武装を整え、京都方広寺広場に集合の上、京師を進発行動を起した。

二、経過

こうして一行は大阪川口に出て、海路泉州堺に至り、楠公遺跡観心寺に詣り、千早を越えて大和に入り、五条代官所を襲撃して代官鈴木源内以下数名を誅し、意気天を衝いた。文久三年八月十七日午後四時頃であった。

然しこの時は既に京都では朝議急変し、大和行幸は中止され、史上有名な七卿の長州落ちとなっていた。この飛報は八月十九日正午前、京都残留の同志古東領左衛門から届いた。たった今まで天皇御親征の先鋒を以て任じていたのが、急転して今は叛徒狼藉者の汚名を着、討伐を受ける身となった。かくて彼等は迫り来る幕府と各藩の追討軍と大和河内に戦い、或は斃れ、或は捕えられたが、一味のうち水郡長雄以下十三名は九月十一日一書を首領忠光に致して訣別し、十津川人野尻隈之信を道案内とし、紀州方面に脱出すべく十津川郷に入った。

三、残党竜神村に入る

然しこの時は既に紀州藩にも天誅組討伐の命令があり、十津川人心も義軍を離反し、身辺に危険がせまったゝめ一行は血路を紀州に求め引牛越の嶮を越え、九月二十一日今の竜神村丹生ノ川菅野に出た。ここで折りよく目についた菅野の百姓、松本彌蔵について紀藩の防備状態を聞いたところ、ここから五十数町の西に陣地があり、多くの兵が固めていると正直に答えた。

よって一行は再び北に折れて谷川を遡り、二十二日竜神村小又川に着いた。偶々見かけた樵夫に土地の状況を尋ねたが、ここにも矢張り紀藩の壘(トリデ)があり、凡そ百五十名の兵が厳重に守備しているという話で、進退谷まり遂に意を決して、隊長水郡長雄は営所に自首した。紀藩守備隊の応接方吉本伍助はこれに接見し、一旦小又川村百姓喜助の倉庫に一行を幽閉した。即ち天誅倉である。

四、結び

天誅倉は今も竜神村小又川字津越十九番地にあり、間口一丈、奥行一丈二尺、、内部二階建、昭和八年和歌山県史跡に指定されたが、当時でも下層部の用材が腐朽していたと云うが、どうなっているいるだろうか。

猶、このとき小又川で縛についたのは

丹田彦次郎、保田健、岡田一作、辻郁之助、

水郡英太郎、吉田重蔵、田中楠之助、水郡小隼人(善之助・長雄)

の八名で、九月二十五日山輿で和歌山に護送され、後京都六角の獄に繋がれ、英太郎が年少の故をもって免された外七名は、悉く斬罪に処せられた。

皇国の為にとつくすまごころは神や知るらん人ど知る

事、志と違い雄図空しく破れた感懐を、国風に託して、水郡長雄が幽閉された倉の柱に書付けた一首であり、この柱は後切取られ、今竜神村某氏が保管するという。

鬼神も恐れざりしがまことある人のなさけに神ぬらすらん

一子英太郎の重傷を、紀藩隊長が恩讐を越え手厚く看護したのに対し、父水郡長雄が感謝の詠である。また

秋の野に露と消ぬべき命とも知らでや人の吾を待つらん

廻国の巡礼に託し小又川の天誅倉から、故郷の妻に送った長雄が辞世の歌で、共に百年の後猶私達の心に惻々とせまる。明治革命前夜を彩る一片の哀詩である。

（このほど私がよろず相談係を煩わし、「天誅倉」について不躾な回答をお願いしましたところ、早速清水さんの記事を掲載下さいまして恐縮です。今後とも尚一層のご指導のほどお願いします。稲田稔）

「紀州新聞」昭和三十一年一月一日掲載

千匹山

四、五年前の本紙に、日高珍姓録と題して、川辺町土生の小猿姓、日高町志賀の猿渡姓を挙げ、その何れもが土地の小祠の名や、地名から来た事を指摘したことがあったが、このほか川辺町和佐には「さるま」姓がある。

「さるま」は今、佐留間と書いているが、ひょっとすると「猿間」と書くのが正しいのかも知れぬ。附近に「千びき」の地名もあり、何か猿に関係がありそうな気がする。土地の方々の御教示を得たい。

× × ×

一体「せんびき」と云うのは、野口山の一部が川辺町和佐と、御坊市野口と境とする辺りを指した山の名で、（川辺町の小字図にはこの地名は見当たらない）。川辺町に属し、日高川の流れが山麓に激突して急に南に方向を転じ、後は山がせまって千仞の断崖をなし、紀勢鉄道が和佐駅を発して田辺に向かうと、直ぐ右手の車窓にそそり立って見える。

ここは今採石場となって大きな木はないが、昔はやはり相当樹木が生い繁り、樹間に群猿が戯れ、時には道行く人を驚かしたこともあって、猿の群猿を昔の人は、猿の千匹づれ、或は千匹猿とも云うたから、いつか山の名が「千匹山」となり、それが地名になったのでなかろうか。

× × ×

またこの近く、和佐と江川の間に小川が流れ、「千曳橋」という小さな鉄橋が架かっている。「千曳橋」の名

は云うまでもなく「千匹」から来たもので、せんびき橋では不体裁とあって、橋がつくられた時「千曳」とした。比較的新しい名称であろう。尤もこの鉄橋ができる数十年前の明治初年（一八六八年）に伊達千広が竜神入湯の帰途瀬見善水を訪ね、光源寺で歌会を催した時の詠に

　うごきなき我が君が代のためしには　千曳の山ぞひくべかりけり

とあって、或はこの歌から来たものかも知れない。千広の歌は後善水の手で碑につくられ、歌碑は今も千匹山の麓に苔蒸して遺っている。　―終―

紀南俗風土記

「新紀州新聞」昭和三十一年一月一日掲載

はじめのおことわり。

正月のことで、軟らかい話をしてみたい。内容が少し軟らかすぎるが、ふざけている譯でない。

昨今はどんな山奥でもラジオのない家は少ないし、巡廻映画なども頻煩と行われて、娯樂には事を缺かないが、つい最近までは電灯もラジオもなく、めったに芝居を觀るでなく、スポーツに興ずるではなし、農山村の若者は日が暮れると酒を呑むか寝るより外はなかった。然しそれではたぎりたつ若い血潮はおさまらない。そこで今から考えると、野趣に富んだと云へば聞こえはよいが、実は野蠻な遊びが半ば公然と行はれた。

が、事柄が事柄であるためか、風俗史の方面でも民俗学でも余りとり上げられていない。然し或る時代世上廣く行はれていた事実であるから、忘れられないうちに記録にとどめたい。これが本稿を草した理由である。

風呂のぞきの事

明治時代、有名な出歯亀事件と云うのがあった。何でも少し變態性の男が女湯を覗いて刑せられた事件であったと記憶する。ところが筆者の村あたりでは、これが日常盛んに行はれた。

覗きに廻るのは主に十八、九才から廿一、二才の青年で、村ではこの青年層の者を小若衆とよんだが、この小若衆連中は夕飯をすますと夜遊びをする。村の飲食店や駄菓子屋に集まって無駄話をしている中に、仲間が一人、二人と増えて來る。

農山村では一般に女性の入浴は遅い。殊に娘や主婦は大抵終い風呂になるため、ひとしきり無駄話の花を咲かして出掛けると、ちょうど女性の入浴時になる。狙われるのは主に娘や若嫁や女中のある家で、彼等は夜陰

にまぎれてヤモリのように風呂の窓に身をよせる。
風呂場では薄暗い灯火のかげで、ピチャ〳〵と体を洗う音が聞こえる。若衆達は息をひそめて、音のする方向へ眼をそゝぐ。風呂場はうす暗い上にモウモウたる湯氣が立ちこめて、もとより女性の姿などは、はっきり分からないのであるが、彼等はそれでも満足して引揚げる。
翌朝主婦達が何氣なく出て見ると、風呂場の裏手に幾つかの下駄の跡が乱れていたり、窓の障子に指先であけた小穴を発見して、驚くことが屢々あった。然しこれもスリ硝子が窓に用ひるようになって、昭和初年頃でやんだようである。

閨房のぞきの事

主に新婚家庭が、時には中年者の閨房も狙われた。
近ごろまで農山村の家屋は粗末であったから、うっかりすると、壁の隙間や雨戸の節穴から寝室の内部が覗かれるし、例え内部の情景は窺えなくとも、門も垣もない家が多いから、寝室の近くまで立ち寄ることは困難ではない。従って若者達はこれに近づき、閨房の睦言とを盗聴して悦んだ。随分罪な話である。

○その一例

これは筆者の村のある部落での実話である。その家には中年の夫婦が住んでいたが、家の構造上若衆達が狙うには格好の家であった。寝室の雨戸に近よると、内部の秘語が氣の毒な程はっきり聞こえた。
忍びよった若者が息をひそめて聞き入ると、夫婦のなん〳〵の聲は盡きることを知らない。夏のことで家の周圍の田圃で蛙がやかましく鳴きたてゝ、ともすると寝物語が打ち消されそうになる。若者はそっと手頃な小石を拾うと、水田めがけてサット投げる。蛙は驚いて鳴き声をぴたりとやめる。。若者は再び閨中の愛語に聞き入る。また蛙が鳴き立てる。石を投げる。
こうして飽きもせず石を投げては、藪蚊に食われながら懸命に房中語に聞き入った。

× × ×

○もう一つこんな事もあった。

村の青年が別居して嫁を迎へた。街道端の一軒家で障害物は一つもないし、常日頃ひょうきんな男であったので、村の若者達はドットばかりに押しよせた。夜になると某の寝室の近くには黒い影法師が幾つも並んだ。これではうっかり夫婦の營みもできない。たまりかねた某は村の駐在所へ取締り方を泣きついた。
或る晩例によって常連の一人が某家の裏手へ忍びこんで見ると、すでに先客があって寝室の近くに黒い影法

師がうづくまっている。青年はソッと近よって小聲で
「誰な？」と聲をかけると
「俺だよ！」と答えたが、
その聲はついぞ聞き慣れぬ聲なのでよく見ると、何と村の駐在巡査が私服で張りこんでいたので
「お前も來たのか！」とニヤリと笑った。
昭和六、七年頃の話であるが、この風習も今は絶えたようである。　―完―

昭和三十年十二月十一日稿

餅まき

「紀州新聞」昭和三十一年二月十六日掲載

正月早々酒気嫌いの全国民を驚かせた彌彦神社の惨事は餅まきが原因であった。私達の郷土日高郡では、道成寺をはじめ寺々の会式には定って餅まきがあり、そのほか上棟式、橋の渡り初めなど目出度い時は餅まきがつき物になっている。日高人は余程餅まきが好きだナと思っていたが、彌彦神社の例を見ると、必ずしも日高人だけの特質ではないらしい。

一体餅まきはどんな意味から、また何時ごろから行われて来たものであろうか。この私の疑問に対し最も明快に答えてくれたのは、最近読んだ大森志郎の「米と人口と歴史」の一説である。曰く

家を建てる棟上げのとき、棟の上から餅やお金をまく習慣がありますね。この時のお餅やお金には、その敷地や建物を祓い清める力があると感じています。源氏物語などを見ますと、邪気をはらためにに、お米をまきちらす「うちまき」というしきたりがいく箇所も出て来ます。米そのものに、邪しまな霊をしりぞける神秘な力があるのです。節分にまくのは大豆であって、お米ではありませんが、穀物のもっている神秘の力であることは同じです。そうして、鬼を追いはらうという（ついな（追儺）は、宮中では、もとは年の暮れに行われたものですし、節分を年越しという云い方は今日でも広く残っています。年の暮れに邪気をはらって、お正月を迎えるのにふさわしい、穢れのない、清浄さを保とうとしたことがわかりましょう。云々

ところで、この前本誌に「矢田村の冠婚葬祭習俗」を載せたとき、森常吉老から川辺町山野地方では上棟式

の際、青竹に紙に包んだ白米と米を棟木に結びつけるが、小熊辺ではやらないか？またそれはどう云う訳だろうかと云う葉書を受け取った。早速村の古老や棟梁に聞いたが、私の方ではその習俗は古く絶えたと見え、最早誰も知るものはなかった。

この話を何かの折に芝口常楠先生に伺うと、もう十数年も以前なるが川中村下田原の某家が新築の時、古い家を取壊したら、今云った米とかお金が棟木に結びつけてあった、と話された。して見るとこの習俗も古くは広く行われたが、時がたつにつれ先ず平野地方から廃れ、交通の劇しくない奥地に遺ったものであろう。どうしてこう云う事をしたかは、さきの大森志郎氏の説で自ら明らかであるが、私が聞いたある棟梁の話では、新築した家が、萬一将来家運振るわず貧窮することがあっても、銭一文もないと云われないように、棟木に結びつけておくのだと答えたが、この説はどうも近代のこじつけのような氣がする。

主も千年　柱も千年

「紀州新聞」昭和三十一年二月十七日掲載

この一、二ヵ月村誌民族篇の年中行事の項を纏めたいと、村の古老や古風を伝えていそうな家を訪ねたり、家へ来る誰彼をつかまえて、牛休みにはどんなことをするとか、亥の子はどんな風にするかと、うるさく聞くのを又聞きして、家族の者はかげで色んな事を云っていたらしい。或晩夕食の時

「お父ちゃん、こんな事を知っている。」と妻が語った話はこうだ。

× × ×

真妻村上洞辺では新しく着物を縫い上げ、袖を通す前に、必ず大黒柱に着せる真似をし

「主も千年・柱も千年」と唱え事をして初めて着るのだと云う。側にいた私の母も

「それなら川上辺でもしたよ……」と合づちを打った。

「ほうそれは面白いなナ」

然し私の妻は真妻から来たものだし、母は川上村の生まれなので、旧矢田村附近にもそんな風習があったか一寸疑問に思われた。そこで正月休みに村の誰彼に聞いて見ると、やはりそんなことをしたと云う。今年五拾余才になる男が子供の時と云うから、もう四十余年も昔であろうが、母が新しい着物を仕立てゝ呉れた時、さきに書いたように、大黒柱に着せる真似をし、

「主も千年、柱も千年」
と唱え、その上新調の着物を着て、先ず氏神に参拝したものだと云う。

×　×　×

今でこそ金さえ出せば、どんな着物でもすぐ手に入る。然し一昔以前は中々そうはゆかなかった。農家では綿を栽培し、それをつむぎ、主婦は仕事の暇を見ては家で織り上げたものだ。一枚の着物をつくるのも並大抵のことではなかった。こうしてやっと縫い上げた着物は、銭金では代えられぬ慈愛と、真心のこもったものであったのだ。さてこそ一枚の着物ができ上がった時、家の中で一番大切な大黒柱に着せ
「主も千年、柱も千年」と着る人の将来を祝福し、長くその着物を用いんことを祈ったものであろう。

×　×　×

またその男の云うには着物ばかりではない、下駄一足買うてもそうであった。新しい下駄をおろした時は、先ず井戸端まで履いて行き、決して便所へは履いて行かなかった。古人は一足の下駄をおろした時にも、不浄の所へは履いて行かない程敬虔（けいけん）な心構えを持っていたのだ。

×　×　×

誰であったか現代文明は消費文明であると云った。まさにその通りだと思う。現代人はたしかに貯蓄し創造するよりも、消費することにより多くの快感を得ているようである。殊に私などはだらしのない浪費家の典型である。それだけに顧みてこの話は、単に面白い習俗と云うだけでなく、深く心をうつものがあった。（終り）

「紀州新聞」昭和三十一年二月十七日掲載

煙樹濱雑感

1

高校増設をめぐって煙樹浜が郡民の議論の的になった。私は百姓をしていないから、この松原が防潮、防風にどれだけ役立つものかは知らない。従ってその方面のことは関係者の意見を傾聴することにして、この機会に風致乃至観光の点から、思いついた事を順序もなく書いて見る。

2

今日まで論議の跡を見ると、多くは防潮、防風の点のみに終始して、風致乃至観光の点に触れたものゝなかったのは聊かさみしい感じがする。無論風致などと云うものは、米が作れないか作れるかと云うような問題に較べて、第二議、第三義的なもので、それ程切実なものでないから、自然後まわしになったのであろうが、私のような頭の古い閑人にとっては、矢張り無視出来ない問題である。

私の家は川辺町小熊にある。ここからは煙樹浜は一望のうちにある。朝起きると先ず目に入るのは、黒々と続く煙樹浜の松林である。一日の勤めを終えて家に帰った頃、太陽の沈むのもこの日高湾頭の樹海である。

最近煙樹浜を日本一とか、東洋一の大松原と云う声も聞くが、それはとも角としても、事実これだけの規模と雄大美をもつ松原は、そうざらにあるものではない。確かに私達日高人が自慢するだけの値打ちはある。

一日、二日の短い旅をしての帰り、汽車が内原駅を過ぎるころから、先ず目に入るのは黒々と横たわる煙樹浜の松林だ。私はいつも車窓に入るこの樹海を眺めては、あゝ日高に帰ったなと思う。然もこの感傷は恐らく私だけのものではあるまいと思う。それ程この松原は日高人に親しい繋がりを持っているのだ。云わば日高人の心の古里とも云えるかと思う。

3

従って私達日高人は、この松原を大切に愛護してゆきたい。況んやその上、防潮・防風の上に大きな役目を果たし、日高平野農民が、代々心血を注いで育成してきた事実があるにおいておや。（日高平野と農民と煙樹浜との関係は、書けば長くなるからここでは省略する。昭和八年（一九三三年）和歌山県発行、和歌山県史跡名勝天然記念物調査報告第十二輯に森彦太郎先生が詳記しておられるから、就いて見られたい）

最近新聞紙の報ずるところによると、この天下の美林も松食虫の繁殖で枯死に瀕していると云う。これは重大な問題である。煙樹浜に関心を持つ者にとっては、高校を持って来るか来ないかどころの騒ぎではない。うっかりすると、煙樹浜一帯が丸坊主になりかねないのである。然もその最も大きな原因は松自体の衰弱に基因すると云う。松が元気であれば松食い虫の被害はある程度食いとめられるのだと云う。然も松が衰弱して来たのは落葉を掻きとったり、松の根元を踏みつけたり、無闇に家を建てたりするからだと聞いた。

されは地元の人々もむやみに松原の中へ建築物を持ちこむ事に反対するだけでなく、同時にその保護育成にも充分留意してほしいものである。

煙樹浜はひとり美浜町のみの誇りでなく、私達郷土の大きな誇りなのだから、さし当たり町当局あたりでも、

町条例を設けて、猥りに松葉を掻いたり、人家を建てることを厳禁してほしいものと思う。

宝暦四年（西暦一七五四年）三月和田浦、吉原浦風下村々庄屋肝煎へ、藩から下した松原保護の触書に

一、松原の内下草刈、落葉掻きをしてはならぬ。
一、松原の内十八道筋の外横道をしてはならぬ。
一、土をとることを禁ずる。
一、墓場をみだりに拡げてはならぬ。
一、家を建つることはならぬ。
一、藁すすきをしては火事の恐れがある。
一、志賀、入山、天田各組の大庄屋共毎々巡視取締りをなすこと。
一、取締りの実があれば、吟味の上植松申しつける。

右村々小前末々迄申し開くべく云々。

とある。昭和の今日まさかこの通りにはゆくまいが、こうした厳しい制道があったればこそ、今日見る処の美林となったのである。

4

私がこう書いたら、それみろ高校を持って来るのは反対だ、と云われては困る。それとこれとは別問題だ。森常吉老は先日うまい事を云った。曰く、「人材と木材とどちらが大切か」全くその通りだと思う。結局は比較の問題であり、軽重の問題だ。故に近い将来においてもし高校問題が円満に解決し、煙樹浜の一角に新校舎が建設される日があっても、それは洵に真にやむを得ざる事情にあるものであり、一本の松と雖も無雑作に伐ってはならぬ。少し大時代的な形容をすれば、涙をふるってこれを伐ると云う気持ちを失わないでほしい。百本の松を伐ることは一夜にして出来るが、一本の松を育てるには幾十年の歳月を要するのだ。そしてこの新しい校舎を中心に、新時代に相応しい林相美と云うか、自然と人工との調和した構成美を打ち樹ててほしいものである。

また近頃は松食虫の被害から、昨今流行のユーカリを植えたらとか、観光的な点から棕梠とか、他の亜熱帯植物に切りかえ、エキゾチックな味を出したらと云う声も聞くが、私は矢張り頭の古い関係か、成るべく松を中心とした雑木林として遺したいと思う。何故なら一部都市人の浅薄な趣味に来迎した施設なら、どこにでもあるからであり、天下に一つ位時代おくれの、昔ながらの何の奇もない大松林があってもよいのではないかと

も思い、また松と日本人と云う、古臭いノスタルジアが捨て切れないのである。

5

閑話休題、私はさき程から煙樹浜浜の愛護について、地元の人々にのみ多くの勝手な注文を出したが、もとよりこの大松原の保護育成は地元民だけの力では充分ではあるまい。従って同時に郡民一同の特に御坊市をはじめ、周辺市町村の識者に訴えたい。何とかして私達の力でこの美林を保護してゆこうではないかと。農作に関係ある人々は勿論、日高平野に生を受けて、この松林を愛し、私達の一つの誇りとする程の者は、反面この松林の生来に一個の義務を有するものと思う。従って松林の破壊に反対するばかりが能でなく、平素の管理育成にも充分留意して行きたい。そのため日高観光協会あたりも利用するだけでなく、もっと真剣になってほしいし、さしづめこの浜の松樹の育成に最も尽力されつゝある中西悦太郎氏あたりにお世話を願い、煙樹浜愛護会と云うような会でもつくり、関係当局筋へも仂きかけると共に、自分たちの手で愛護して行く方法を樹てほしいものである。そうすれば私などは何の関係もないが、たゞ煙樹浜が好きだ、荒廃さしてはならぬと云う一事だけで、イの一番に仲間に加えて貰うのだが。

―昭三一、二、一二稿―

手取城址に遊ぶ記

「紀州新聞」昭和三十一年五月二・三日掲載

1

手取城址は川辺町和佐別所谷にあり、日高川畔の東方約十七町、海抜凡そ百六十米の高処に築かれた山城の趾である。天文、永祿、天正の昔、玉置直和はこの山城に拠り、小松原の湯川氏と結んで日高地方に威を振るった。

たまたま天正十三年（一五八五年）春秀吉の紀州攻略に際し湯川氏と所見を異にし、秀吉に和せんとして湯川軍の攻略を受けたが、その後幾多の経緯を経て旧所領に戻り、慶長八年（一六〇三年）歿し、手取城もその前後に没落したものと傳えられる。

玉置氏及び手取城については「日高鑑」、「郡主旧記」、「紀伊続風土記」、「湯川記」、「湯川実記」、「日高郡誌」、「丹生村誌」等に散見するが、そうした文献は姑（しばら）くおいて、私は私の村から朝夕望見するこの美しい城

趾を、実地に訪ねて、所謂強者どもの夢の跡を偲んで見たいと、久しい以前から念願していた。
折柄この三月ごろであったか、稲原村の考古学研究家高野光男氏に会うた際この話をした処、氏も亦夙(はや)くから手取城趾踏査の志あり、一緒に行こうと云うことになった。

2

その後高野氏から田辺の中村浩氏も参加する旨連絡があった。芝口常楠氏も同行しようと申出られた。亦湯川直春をヒロインとした歴史小説を構想中の印南の小谷緑草氏も是非行くと云うことで、段々賑やかになって来た。そこで此の際他に希望者があれば行を共にしたらと、本紙を通じて一般によびかけて貰った。

3

当日四月二十七日午前九時、薄曇りの空ながら国鉄和佐駅は、道成寺詣りの人で混雑していた。待つ程もなく先ず稲原の平野一良氏が見えた。次いで山野の小山民造氏、田辺市の雑賀貞次郎、中村浩、那須卯之助の三氏、印南の小谷緑草氏、稲原の高野光男氏、最後に御坊市の芝口常楠氏、高尾英吉氏、これに小生を加えて一行十名が揃ったが、さてこの十名共地理不案内と来てハタと因(困)った。この時誰の発案であったか、柏木綱五郎氏に頼んだらと云う事になり、お願いに参った。柏木綱五郎氏には先年郷土学会で生連寺の化石コレクションや光性寺、光源寺拝観の際も大変お世話になったが、今回も快く案内を引受けられ、その上バタコを仕立てゝ城山の麓まで一行を運んでくれた。

4

別所谷は長い谷である。格別深い谷ではないが左右に雑木山が連なり、その間に続く山田の中を一筋の路が東西に長く走っている。左右の雑木山の木々は新緑に萠え、処々に山つゝじが美しい。山麓についた。松の老木が二本路傍に聳えている。
「これで樹齢どのくらいになるだろうか？」
緑草の質問だがもとより私は知る由もない。或はここから真上に聳えて見える手取城に映える、朝日夕日を知っているかも知れぬ。城趾へはここから登る、路はかなり阻しいが割合によい。
十分ばかりも登ると西南の方遙かに鳶山、西山をはじめ日高平野の諸村が展けて来た。程なく第一番の城趾へ着く、西の丸である。背の丈程の小篠が生い茂って頂上へは行けない。高野氏の踏査によると、周辺の処々に深さ二間位、巾一間位の空壕の跡が認められると云う。
西の丸の南を沿うて東に進むと、一寸した平地があり耕されて夏柑苗が数本植えられており、こゝからトロ

〳〵と二、三尺降って、更に登ると本丸の趾に出る。西の丸と本丸とは約三十間の距りがある。本丸へ登る細い坂路で高野氏が古瓦片を掘り出した。

私もそれに倣って見る。ある〳〵何れも小破片だが沢山出た。高野氏曰く、

「室町、桃山の様式を備えている」と。雨がぽつ〳〵降り出した。私には実の処桃山か室町期の物か判断がつかぬ。たゞ城趾の瓦片を得ただけで満足である。とにかく風呂敷へ拾い込む。更に進むと、また平坦な地がある。三十坪もあろうか。こゝも荒れてはいるが畑に開かれた跡である。ここで那須氏は香炉の破片を採取した。傍に天水井戸の跡があり、石垣を丸く積んでいるが、今は石や瓦片で埋まっている。

ここは戦後開墾して畑としたが、それ以前既に桑畑となったことがあり、従って戦後の開墾の時は瓦の破片のみしか出なかった吉、これは開墾者の話である。

一行は更に東の丸に足を歩んだが、私は遂に行かず、その上追々雨が強くなりそうなので、細かい調査をする暇もなく下山する。

5

山を降りた一行は途中生連寺により、手取城主玉置直和の木像を拝む。この木像は、直和が出家して仙光院と称し、高野山へ入ったとき、川辺町蛇尾にあった愛妾の許に遺したもので、その後幾星霜木像は遂に村の山田の案山子とされていたのを寛保二年(西暦一七四二年)江川の瀬見氏が、当寺に寄附したという曰くつきのものであり、七・一八水害には肩まで濁流に浸されたが、よく流失しなかったものである。

6

この寺には亦、今から数代前察応という和尚あり、この人諸国を遍歴して奇石珍石を夥しく集め、今に傳えており、先年郷土学会で見学さして貰ったが、今日もまた見せて貰う。七・一八水害のため泥まみれになったまゝのものもあり、箱もこわれたりしているが、幸いに流失を免れた。恐らく奇石化石のコレクションとしては縣下随一であろう。雑賀貞次郎氏感嘆して曰く。

「こうしておいては勿体ない、何とか整理できないだろうか」と、全く何とか保存の道を講じて貰いたい。整理保存すると云っても石の事である。何程の経費も要るまい。川辺公民舘あたり一肌ぬいで貰えないだろうか。こういう方面に尽力して貰う事こそ公民舘の使命というものだ。切にお願いしたい。このままでは散逸の恐れ多分にある。いや、もう既に散逸しているのではないかとさえ心配する。

7

斯うして私共が雨の生連寺で石を観、察応和尚の事を偲んでいるうちに一隊は高野光男氏の案内で日高川畔の縄文遺跡址を見学に行き、幾つかの土器片と、那須氏は見事な石鏃数片と石器(名称使途不明)を得て帰った。私共の行程は終わったが雨はまだやまない。この間に柏木綱五郎氏は一行のために傘を用意して下さったり、何かと真情溢るゝ御配慮をして下さった。ここに誌して厚く御礼申し上げます。

(昭和三十一年四月二十七日夜稿)

白崎行

「紀州新聞」昭和三十一年六月二十八・九日掲載

①

南紀郷土学会第四十一回例会は、快晴に恵まれた六月四日、会員神田耕一郎蒐集の貝類と、日本セメント白崎鉱山を見学した。由良駅に降りると神田氏と会員岩崎由良町長がわざ〳〵出迎えられ一同大いに恐縮する。今日は何時ものメンバーの外、新に入会された山野の小山民造氏と、御坊木協組合長柏木永一氏が参加されて一行を喜ばした。

②

神田耕一郎氏の蒐集した貝は約三千種、数千点にのぼり、北は樺太、千島から、南は南方諸島に及び、先年氏の還暦を記念して、京都大学黒田博士から贈られた米国産のものや、陸産貝を併せ殆んど全世界に亘っている。この数千点の貝は一個一個学名を記し、整然と分類整理して箱に納められ、小さいものは硝子箱に容れられている。神田氏の家は旧藩時代庄屋を勤め、明治に入っては戸長役場となった旧家で家の構えも大きい。私達が行くと云うので、わざ〳〵表座敷まで運ばれていた標本が、次々と座敷に並べられ、忽ち六畳と八畳の二間に縁側が一杯になったがなおおさまり切らない。まだ倉庫には幾十函もあると云う。

③

こうして並べられて見ると、素人の私達はたゞあれよ〳〵と目を瞠るばかり。大は一尺におよぶものから小は米粒の半分のもの、色も形もそれこそ千差万別、何と形容してよいか全く言語に絶する。ただ云えることは、植物などの標本と異なり、非常に美しいことである。赤あり青あり、全員只感嘆するばかりで声が出ない。数年前にも私達はこの標本を見学さして貰ったことがあり、その時も私は一口に貝の蒐集と云うが、大したもの

だ。ここまでやり上げれば、正に男子の一生を賭して悔いなき仕事と感激したが、この感事は今回も変わらなかった。全く一時の思い付きや、面白半分でできる事柄ではない。一道にぬきんでることが如何に容易ならざらんかをしみ〴〵と感じる。

④

この夥しい貝を前にして、神田氏の話はじゅん〳〵として尽きない。神田氏は少年時代から、植物に興味をもっていたが、或る機縁から貝類に興をひかれ、貝に打ちこまれる事になった。二十一才ごろの事と云うから六十余年の昔になる。正に半世紀を貝とともに生き抜いて来られた訳であり、この間新種を発見されたこと一再にとゞまらず、現に神田ヨウラク、神田キセル貝、神田イボシヤジク、神田ニシキニナ、神田イモ貝等々発見老神田氏の頭字が学名に附せられたもの数種類かぞえる。神田氏の話では、貝は深海産のものより、廿尋位のものの方が色彩が美しいこと、また寒帯のものより熱帯の物が美しいこと。戦後米軍の占領により、日本産の貝が米人の注目する所となり、貴重なものがドシ〳〵買われて行く、神田氏蒐集の中には、一個数千円と云うのがいくらもあること、砂浜の馬手貝の棲息している処へ塩を入れると、馬手貝が一米も飛び上がり、そこをねらって捕獲すること、この馬手貝が罐詰となり大いに弗を稼ぐこと。アオイ貝(蛸貝)の中には入った蛸が帆をかけ海上を走ること等、私達の耳に入り易い話は時間のたつのを忘れさせる。最後に個人のコレクションとして、これ程の規模のものはそうあるまいと思うがとお訊ねすると、神田氏は「然り」と謙遜しながら小さく答えられた。神田氏は今年八十三才、まだ耳もお近いし、眼鏡を用いずに新聞も見られる。なお元気一杯カクシャクとして世界の学界と絶えず交流を続けられている。矢張り人生に高い目標をもち、絶えずその世界に精進されて居れば、老を知らないのであろう。切に御自愛御加餐を祈る。

⑤

午前中を神田邸で過ごした私達は、午後神田氏と岩崎由良町長の御案内で、日本セメント株式会社白崎鉱山の見学に行く。荒磯傳いに大引の部落を離れると、行く手はるか紺碧の海に突き出た白崎の鼻が浮かぶ。高さ七十米、海中に突出すること数町、全山石灰岩からなり、白崎の村名この為に生れ、由良の湊とともに万葉の昔から歌枕として聞こえている。即ち大宝元年(西暦六六二年)九月十八日、文武天皇は奈良の都を御発輦、十月八日武漏の温泉に着かれ給うたが、この時この地方を詠んだ歌に

白崎は幸(さき)く在り侍て大船に真梶繁貫(まかじしじぬき)また皈り見む

あさびらき榜(こ)き出で我が湯羅前(ゆらのさき)釣りする海人を見て皈り来む　　(萬葉集第九)

今から凡そ千三百年の昔、咲く花の匂うが如き奈良の都の萬葉人は、山河幾百里はる〴〵紀州路は牟婁の湯を訪れ、この辺りは海路によることが多かった。時の帝をはじめおゝくの従者の召した船が紀伊の山河を右に望み乍ら、紀州灘にかゝった時、紺壁の海に聳り立つこの白崎の岬を、如何に深い感激をこめて眺めたことであろうか。私の心はそゞろに千年の昔に飛ぶ。然もこの岬には最近まで群猿が喜々として遊び、また近くのアシカ島には海の愛嬌者アシカが自然を楽しんでいた。

然し時は移り星変り、今から数十年前の明治末年からこの方、この白崎の石灰岩はセメント原料として、夜となく昼となく休みなく掘り続けられ、文字通り山容革まり、今やこの名所も消えてしまおうとしている。惜しいことではあるが已むを得ない成行である。

私達は工場の人々の好意で昼食をとり、食後鉱山を隈なく案内して貰った。海抜七十米と云うこの岬の内部は、鉱道が蜂の巣のように縦横に穿たれ、荒々しい岩肌がむき出している。坑道の内部には坑木が一本も見受けられないが、これは石灰鉱山の特徴で、これでいて落盤は全くないとの事である。私達は坑内の電灯を頼りに長い鉱道を歩んだ。処々地下水がポタリ〳〵と落ちてくる。海の方から吹き抜ける風が汗ばんだ肌に心地よい。今日は工場が休みで処々にトロッコや、電気削岩器が置かれてあり、巨大な粉砕器やコンプレッサーが睡っている。ここから大阪へ積み出される原石は、月大体二万噸に及ぶと云う。この岬ももはや長くはあるまい。内部が穿たれているばかりでなく、露天掘で掘り取られて広場になった処も二、三ヵ所ある。今のうち見ておいてよかった。私は漫々と広がる湯淺湾を距て、はるかに横たわる宮崎の鼻を望み乍ら心からこう思った。

最後に私達のために終始御歓待下さった白崎鉱山の方々に、厚く御礼を申し上げ、その御厚志を感謝申し上げる。

（昭和三十一年六月廿五日稿）

岩代遊記

「紀州新聞」昭和三十一年七月二十一・二十二・二十三・二十四・二十五日掲載

一、中山王子祠

南紀郷土学会七月例会は、十五日南部町山内片倉峠に住むカニの研究家尾崎光之助邸で開催された。私は此の機会に、切目村に鎮座する九十九王子の一つである中山王子を拝し、岩代の結松を見て有間皇子の昔を偲ぶ

ことにした。印南駅で同道を誘った中田宇南、小谷緑草の二人と一緒になった。
切目駅で降り線路の下の地下道を潜ると直ぐ中山路である。旧熊野街道にあたり道はかなり嶮しい。セメントで舗装した坂道の左右には、裕かそうな農家が並び、上るに従うて切目村の家並みと切目川を中心にした切目平野が展ける。
切目は古い村である。万葉集巻十二に

寄　物　述　思

殺目山(きりめやま)行きかふ道の朝霧ほのかにだにや妹にあはさらむ

と歌われている切目山が、ここから望まれるどの山を指したのかは今は問わない。切目村のどの山でもよい。切目山の山路にかゝる朝霧のように、ほのかにでもよい、いとしいあの人に逢えぬものだろうか？。今も昔も恋する男女の心情に変わりはない。こんなことを考えながら歩む、うち中山王子の社前に出た。王子社は想像していたより大きく荒廃していない。明治末年、神社合祀令に飽くまで反対して護り抜き、今も島田地区一帯の氏神であると云う。建仁の御幸記(西暦一二〇二年)

超山参切目中山王子

とあるその社で、旧社地はここより数町離れた東の方、榎木峠(海抜九二米)を越した地にあったもので、何時のころか此の地に遷され、旧社地には今も王子谷の名が遺っている。社殿の傍に戦時中にでも伐られたのであろうか、幾抱えもある松の切株が、半ば朽ちている。何様をお祀りしているのか、摂社の一つに夥しい草履が供えられているのも、如何にも古い熊野街道の社に相応しい。
参拝を終えた私達は、竹籔を抜け長い谷に沿うて東に進む。さきに神社の傍で見かけた苔蒸した二基の宝篋印塔はもとはこの籔かげにあったものである。谷の両側の山は余り深くない。道は割合よいが殆んど通行人はない。三、四十年前切目崎廻りの新道が開けてから、この道はすっかり忘れられている。所々で老鶯が啼いて私達の心を慰める。頬白の声もする。
やっと長い橋ヵ谷が尽きた。私達は谷の尽きる処で一息入れる。若松が拾数本あり、海から吹く風が汗ばんだ肌に心地よい。ふと気がつくと何やら碑が建っている。徳本上人の名号石であった。かなり大きい。

二、岩代の結松

結松記念碑は国道四十一号線の直ぐ傍にある。碑の高さ一米九〇、幅一米三五、表に「有馬皇子結松記念碑」と雄渾な文字が彫られ、蘇峯学人の書であり、裏面には

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた皈り見む

家にあらば笥に盛る飯を草まくら旅にしあれば椎の葉に盛る

と哀切極まりない皇子の歌二首が見える。この碑は昭和十一年（一九三六年）十一月岩代村青年團が建てた物だが、蓋し岩代村青年團はよいことをしておいたと思う。この前日高町久志に徳本上人の生家を訪ねた時も、同地の学生会によって、徳本上人誕生記念碑が建てられたとあり感じたことであるが、青年団活動が新しい生活運動に取組むのも無論結構だが、一面こうした方面に力を注ぐのも決して意義のないことではあるまい。

さて三十六代孝徳天皇の皇子であった有間皇子は、斉明天皇の四年（西暦六五八年）十月、天皇が牟婁の湯に行幸せられた後、謀叛のことあらわれて捕らえられ、十一月十日、天皇の許に送られる途中、岩代の岡で遙かに天皇が在す牟婁の湯を望み乍ら、かねて覚悟はしているものの、ひょっとして申開ができ、近臣の取成しが成功したなら、もう一度皈ってこの松を見ようものをと、痛ましくも哀れな心境を歌い、後の一首は昨日と変わる囚われの淋しい旅の心をよんだもので、哀調言外に溢れ切々の情け、今なお人の心を動かさずにはいない。されば この歌以後にも結松を詠み、薄幸の皇子の上を詠じた歌は、同じ萬葉集中にも数首をこえている。

碑の傍に第何代目かの結松があり、何れは皇子の身を偲ぶ人の仕業であろうが、松の枝をところどころ引結んでいる。然し最近の研究では浜松が枝の引結びは、松の枝そのものを結んだのではなく、松の枝に何かを結びつけたのであり、結びは再び逢うことを祈る一種のマジックであったと云う。

また椎の葉に飯を盛ると云うが、実際にあの細かい椎の葉に飯を盛れるかという疑問や、いや今云う椎と万葉時代に云うた椎とは同じものではないとする説や、「文藝春秋」五月号かに矢張り今の椎の葉でよいとする説が発表されたり、諸説あるが難しい考証は後日にして、今は尾崎邸へ行かねばならぬ。

三、尾崎邸で

結松を後にした私達は岩代駅で会員一同と合流した。いつも御見えになる芝口常楠先生と井上豊太郎先生が、それぞれの御都合で参加されなかったのが淋しいが、その他いつものメンバーが揃った。わざわざ駅まで迎えて下さった尾崎光之助氏の御案内で尾崎邸へ向かう。尾崎邸は東岩代の聚落を離れ、国道四十一号線から一、二町左手の片倉峠の頂にある。尾崎氏の家は古い家柄である。氏の説明によると千里王子の辺りを海岸沿いに、東に通じていた熊野古道が、元禄年（一六八八～一七〇四年）中北よりの片倉峠に改められ、その当時から茶屋を営んだ。「紀伊国名所図会」、後篇六の巻に

○ 片倉峠　山内村に属す桜の大樹多し茶店あり

と記し、またここの名物として、ふくだ餅を挙げ、その由来あり。多くの旅人が休息し、ふくだ餅を賞し木蔭で酒酌みかわしている絵がある。従って熊野詣での人々はもとより、田辺、熊野地の人が上方へ旅するには、必ずここを通ったもので、随分繁盛したものである。「名所図会」にある桜は既に見えないが、峠の傍に旅行者の荷物を置く為に土堤を築き、その堤に桜があったのだと云う。

後明治十年（一八七七年）頃熊野街道は、峠の下手の今の地に変更され、以来尾崎家は茶屋をやめ農を営んで今日に至っているが、家の構えは流石に大きく

くれて行く片倉山の岩つつじ　春のかたみと手折れてこしはや

と詠じた熊代繁里の短冊が遺されている。

四、オザキトガリカニ虫

尾崎光之助氏は日高実業学校の古い卒業生であり、森彦太郎先生の愛弟子にあたり、今は南部町教育委員であり、稀に見る温厚篤学の士である。先年私が「森彦太郎先生傳」を出版した際も、一方ならぬ御世話になった恩義がある。

尾崎氏は実業学校を卒業後直ちに家業を継がれ、忙しい農業の傍ら、コツ〳〵と独学で植物と貝の研究をはじめた。今は色んな事情から貝の方は余り力を注がれていないが、それでも蒐集した貝は約千五百種に及んでいる。尾崎氏の名を有名にし一躍学会に尾崎ありと知られたのは、食岩虫、オザキトガリカニムシの発見であろう、これについて昭和二十九年一月十二日の本紙紙上で、尾崎氏自身が書かれているが、もう一度その大略を記すと、

今から百餘年前、天保年間（一八三〇～四四年）紀州候に仕えていた本草学者小原桃洞という人があった。この小原桃洞が熊野浦の海岸で、岩石の下に棲む小さい虫を発見し、その習性まで調べて、この虫は岩を食って生きている虫であるとして、「食岩石」と命名して発表した。天保四年（一八三三年）のことである。

さて食岩虫は現代の動物分類学上では、広い意味でクモの類に属する、「カニムシ科」に属するものであることは想像できるが、普通のカニ虫は山林の落葉の下や、樹皮の内、或は積藁の中等に棲むもので、海岸の岩の下に棲むカニムシは最近まで見たものはなかった。処が尾崎氏は、昭和十三年八月南部町目津崎附近でカニムシを発見し、本県出身のクモの研究家植村利夫氏研究を依頼したが、当時はまだ日本にはカニ虫を専門に研究する学者がなく、又これに関する文献も不備で種名の判定には至らなかった。その内に第二次世界大戦となり、この研究も一時中断したが、終戦後の昭和二十三年（一九四八年）になって、我国の

クモ学の権威者岩田久吉氏からそのカニ虫を研究したいから標本を送ってほしいと依頼があり、尾崎氏は早速これを送った。岸田氏（？岩田氏）は研究の結果、新種として学名も用意されていたが、その頃これとは別に愛媛大学の新進教授森川国康氏からもカニ虫の標本を希望された。森川教授は研究を続けているうち、更にオーストリヤのバイエル博士に研究を依頼した結果、博士は新学名を附けて世界の学界に発表した。またわが国では岩田久吉氏から発見者尾崎氏を記念して、オザキトガリカニ虫の和名が発表された。この虫は身長五ミリ位のシラミ大の小動物で、体の割に非常に大きなハサミをもっている所からカニ虫の名が出たもので、小原桃洞の発見して以来百余年、尾崎氏が目津崎で見出してから、中に世界戦争がはさまったりして十五年、やっと名前がつけられて世に出たという面白いローマンスがある。

かくして尾崎氏の不断の努力は、ここに一つの美しい実を結んだのであった。

五、カニのコレクション

私達は尾崎氏の懇切な説明を聞きながら、広い部屋一杯に展示されたカニを見て、倦く所を知らなかった。全く一口にカニというものゝよくもこれだけの種類があり、よくもこれだけ集められたものと驚嘆した。尾崎氏の説明によると、紀州近海から発見されたカニ類は二百六十種の多きにのぼり、氏の蒐集したものは十七科、九十五属、百五十七種に及ぶという。

ざっと見渡しただけでも、生きていた時は一寸したテーブルの半分位はあろうかと思われる、巨大なタカアシガニ、松葉のような毛を生やした、いかめしい姿のマツバガニ、甲羅の色彩が頗る美しいマンジュウガニ、さてはその名の如く、優にやさしい姿のオオギガニ等々、いかめしい姿のものや、ふざけた格好のもの、とぼけたもの、小さいもの、美しいもの、醜悪なもの、只々カニを通じて千変万化極まりない、大自然造化の妙に時の経つのを知らなかった。

六、千里王子祠

こうして私達は尾崎邸に小半日を過ごし、思いを後に残しながら、程近い千里浜にでた。千里浜は矢張り熊野九十九王子の中の一社千里王子が祀られ、千里観音があり、最近は亦海水浴場としても聞こえた地である。王子の祠はその名の通り千里浜にある。社殿はやゝ荒廃しているが、この近くに鎮座する岩代王子よりも規模が大きく、樹立の深い景勝の地にある。中古廃頽に瀕していたのを徳川頼宣が修復したものと云う。建仁「御幸記」（西暦一二〇二年）に

自是又先陣過千里浜此処一町許参千里王子

とあり、これに先立つ約百年前の天仁二年の「中右記」には、

於千里浜昼養之次欲海水号塩号利

とあって、宗忠が千里浜で塩垢離をとったことが記録されているが、王子祠を拝した記事のないのは、当時まだ千里王子が祀られてなかったのであろうか。祠前に南部町観光協会が建てた記念碑があり、表に

花山院法皇が御修業の御道すがら、御病気のためこの浜の小石を枕に御籠居されたが、その御枕辺近くには、海人の塩焼く煙が立ち昇って、ひとしお侘びしく心細く思召された

と「大鏡」の次第を彫りつけ、裏面に法皇の御歌

旅の空夜半の煙とのぼりなば　あま藻汐火たくとかや見む

が刻まれている。文字は旧南部高等学校玉井玉吉先生のものという。

私達がここで涼を入れていると、折柄地続きの観音堂を修理中の棟梁が来て、私達に色々説明を加え、この附近に遺る伝説の一つ二つを興味深く語った上、上の観音堂に案内した。観音堂のことは古い文献では見かけぬようであるが、恐らく王子社に附随した小寺でもあったものと想像され、明治末年頃か大正初年ごろ、南部町出身の長岡佐助翁が力を入れて改修したもので、棟梁の説明では、御本尊の観音は那智青岸渡寺の御本尊と同じ作であると云う。

七、巨　礫　岩

さて話はここで百八十度の転換をするが、私達は王子社に着いた時から面白い石が目についた。一寸見ると赤土の塊のようだが、泥塊ではなく岩石なのである。然もその岩石塊の中にまた別の小石がとじこめられている。南部高校野田三郎教官の説明によると、これは巨礫岩と称する岩石で、紀伊沿岸には極めて少なく、僅かに目津崎を中心として、東は南部川から西は国鉄岩代駅附近までの間に見られ、礫ばかりが海底で重圧をうけて岩石となったもので、洪積世の鮮新統、つまり今から七、八十万年前に生成したものと云う。従ってこの浜から東に見える眼鏡島はこの礫岩が海水に浸蝕されてできたものであり、白浜の円月島は粘板岩が、また鬼ヶ島は砂岩が、それ〴〵海水の浸蝕作用の結果生じたものとのことである。

野田三郎氏を中心として、今日初めてこの会合に参加した南部高校の中前英三教諭ともう一人の教諭、それに広島大学理学部地質学科に在学中の学生沼野君の四名は更に船で眼鏡岩の調査に出かけた。私もすゝめられたが、朝からの強行軍と暑さで少し参り気味で、その間を休息した。私達が岩代駅で待っていると、野田氏と沼野君は皈って来たが、見ると沼野君は見事な巨礫岩の標本を持っている。素人の私から見ると床の置物にし

たい様な石である。私も一緒に行けばよかった。何れ秋にでもなれば、もう一度千里の浜を歩いて見よう。

（昭和三十一年七月十七日夜稿）

一升と一はらい

「紀州新聞」昭和三十二年三月五日掲載

○

私の居村川辺町矢田地区は、面積約千五百町歩で、そのうち七割に当たる千百町歩が山林であるが、主に雑木林や松林で、林業は余り盛んとは云えない。村の職種構成上から見ても林業を専業とするのは、中津川、千津川に数戸を数えるのみで、後は殆んど農業に従事している。

ところが毎年十二月の終わりごろから三月にかけて、つまり農閑期になると、普段田畑で鍬を使っていた連中が、俄に五人、七人と組をつくって山稼ぎに従い、自家の一年中の燃料をつくり、余った分を需要家に売り捌く。

○

その上面白いことにその薪材の容量を表す言葉が一寸変わっている。例えば松割木一本を二尺位の長さに切り、二つ割にした物を「一さや」と呼び、一さやの割木を長さ一丈、高さ二尺五寸に積み上げた物を一升と云い、取引の単位となる。だから二升の松割木と云えば、長さ二丈、高さ二尺五寸の容量に当り、さらに一升の四倍つまり四升の松割木は「一はらい」と称するが、「一はらい」目方は大体八〇〇㌔ある。従って松割木を「一はらい」買うたと云えば、八〇〇㌔の松割木を買いこんだ勘定になる。

○

一升、二升と云えば、液体を量ったり穀類を量る場合のみの用語かと思うと、枡に入りきらぬ割木を計算する時にも使うのは如何云う訳であろうか。

またこうした呼び方は、川辺町矢田地区のみでなく、稲原地区や、塩屋方面でも使われているやに聞いているが、日高川中流地区の中津村や美山村あたりの、所謂山村でも用いられているかどうか林貞助氏や高尾英吉氏の御教示を得たいものである。

（昭三二、三、一稿）

西川公園の建設に望む

「紀州新聞」昭和三十二年三月二十五日掲載

日高地方事務所の主唱で、煙樹ヶ浜の一角に小公園が建設されると云う。

つい目と鼻の処に天下に誇る県立公園煙樹ヶ浜をひかえ、日高川一つ隔てて眺望絶佳の高燥な天田台地があり、隣接する湯川町には戦国の哀史を秘めた亀山古城址をもちながら、今まで小公園はおろか、ろくな散歩道さえなかった御坊市民にとっては、確かに大きな喜びである。

私は公園や遊園地については何の知識もない。従って新聞を見ただけでは、果たしてどんなものができ上がるのか見当もつかないが、此の機会に関係者各位に一つお願いがある。

○

と云うのは外でもない、現代大浜通りが西川河畔に接する処、手っとり早く云えば池永石工店の西に、転倒したままになっている西川改修記念碑を公園内に移し建設して欲しいものだ。

そもそも〳〵この記念碑と云うのは、和田、吉原地区農民年来の懸案であった和田ふけ湿田地帯の耕水のため、昭和八年（一九三三年）二月から十一年八月まで、満三年六ヵ月に亘り縣直営事業として、工費五十三万円を以て行われた、西川改修工事の沿革を記し、その偉業を記念したもので、日高地方史研究界の権威、森彦太郎先生の撰、並びに書になるものである。

碑は、森彦太郎先生の碑文にあるように、煙樹ヶ浜の松永に翠に、西川の水永に清らかな地に、久しく当時としては世紀の偉業と云うべき、西川大改修の経緯を伝えていたが、昭和二十八年（一九五三年）の洪水に転倒したまま今日に至っているのである。

否転倒したままならまだよい。碑と台石とは離れ離れになり、おまけに石屑や塵芥が山積して、このまま放置すれば、恐らく遠からずして塵埃の下に没してしまうに違いない。私はここを通るごとに、この痛ましい記念碑の姿を見て胸が疼く。石は物を云わない。然しそれでよいのかと思う。

○

幸いにして今度西川小公園が作られると聞いた。花壇もよかろう。ブランコも賛成である。遊動円木もベン

チも無論結構だが先ず第一、この機会に大浜通りの路傍に惨めな姿を曝している記念碑を公園内に移して欲しいものだ。関係者各位にお願いする次第である。

新聞紙の傳える処によれば、公園はその名の如く西川河畔に位置すると云うが、それなればこの記念碑を建てるに洵にふさわしい地であり、記念碑があることによって、どれだけ公園に落ち着きと品位を与えるか知れぬ。各位のご一考を願って息まない。　―　完　―

（昭和三十二年三月二十日夜稿）

三十木矢之助に就いて

「紀州新聞」昭和三十一年八月十・十一日日掲載

三十木矢之助について質問を受けたが、実は「日高郡誌」人物誌の記事以外の詳しいことは知らない。随って此処では「郡誌」の記述を中心に、その略傳をお傳えするにとゞめる。

矢之助は三十木村（今の中津村三十木）に生まれた。

姓は井原氏、諱は正次井原二良左衞門正寅の嫡子であるが、三十木の生まれであるところから通称を三十木矢之助と称した。母は田尻村（今の中津村田尻）の名門龍田正兼の妹という。

矢之助は幼時を京都で過ごした。一説には龍田氏縁辺である奈良で大きくなったとも云われる。少年時代から能に親しみ、殊に横笛と鼓の妙手として聞こえた。今も日高川筋には

〃何ぼ出しても聞こらよ殿さ三十木矢之助打つ鼓〃

という俚謡が遺っている。

矢之助は壮年時代三十木に帰り、中山中組（今の中津村、美山村の全域）の大庄屋となり、古来筏流しの難所であった串本村の大滝の河中の巨岩を破砕して、筏流の便をはかったり、姉子、三十井川の村界に溝（矢之助溝）を通じて灌漑を利したり、或は高津尾村の蕨平（日高川左岸）の山脚を開拓して新田（矢之助新田）を作ったり、亦衰頽していた三十木村渓谷寺の復興に努める等、地方の産業開発と文化向上のため大いに貢献した。

この外成功を見るに至らなかったが、三十木と上田原間の灌漑溝や、大又高津尾間の溝路の計画等、大荘屋として傑れた才腕をふるった。

偶々、時の郡奉行兼代官片山又兵衞は日高川を浚渫して、日高奥地の日高奥地の物資輸送の便をはかろうと

して、中山中組大荘屋の矢之助に工事の総指揮を、また中木村（今の中津村中木）の庄屋塩崎五郎左エ門に人夫監督を命じた。かくて工事は着々進捗した。愈々竣工の日矢之助はひそかに五郎左エ門をよんで、二人の帳面の辻褄を合わそうと相談を持ちかけたが、五郎左エ門は応じなかったので矢之助は大いにこれを恨みに持つに至った。

そこで矢之助は何とか五郎左エ門を陥れんものと考え、高津尾村中長瀧の某に命じて五郎左エ門の飼牛を買い取らし、半金だけを渡し残りの金は数ヶ月たっても支払わなかった。五郎左エ門からは殘金を早く精算するようしきりに催促するが、もとより考えあっての事だから一向に払わない。堪りかねた五郎左エ門は、或夜ひそかに某方の牛を引取り牛屋の入口に

度々の催促にもかかわらず代金を支払わないから一旦牛を引取る。牛が欲しいなら殘金を持参せられよ。

中木村　五郎左エ門

と張り紙して帰った。計画は筋書き通りに運んだ。翌朝、中木村某は

「昨夜、何者とも知れず牛を盗み去りました」

と大荘屋へ訴え出た。矢之助は待っていましたとばかりに

「これ〳〵の格好の牛が盗難にあうた。心当たりの牛を見つけたものは、速やかに大荘屋の許に届出よ」

と管内諸村へふれ廻った。間もなく某から盗まれた牛は五郎左エ門方で見つけたと届出た。五郎左エ門は有無を云わさず捕えられ、矢之助の調べを受けたが、矢之助は五郎左エ門の申開きを取り上げず、勝手に調書を作り上げた上入牢申しつけ、後船津領大隈（おおくま）で打首にした。

このとき五郎左エ門には十三才と十一才になる二児があったが、五郎左エ門は刑死の前二人をよび、今までの成行を告げ

「かような次第で父は此処で果てるが、お前達も刑人の子として土地では住めないだろうから、和歌山の海善寺は父の縁故の寺故、彼の寺に参って出家を遂げ、父の菩提を弔うて呉れ。それにつけても矢之助の悪逆非道は夢忘れるな。返すがえすも憎いのは矢之助である。」

と語って、首を刎ねられた（「川中村郷土資料」による）

○

この事があって数年の後、矢之助は或土木工事の資金につまって、阿田木神社の社木を伐採して罪に問われた。たま〳〵この時和歌山海善寺にあった五郎左エ門の遺子は、矢之助の旧悪を発き、父の冤罪を訴え出た。

そこで改めて取調があり、矢之助は遂に吉原（今の美浜町）一説に天田川原で斬首に処せられ、首は三十木に送られた。時に天和三年五月十五日（西暦一六八三年）今を距てる二百七十年前である。法名宝嶽浄金信士。

○

矢之助は才人であったが才をたのんで代官片山氏を蔑視することが多かったので、片山氏は常にこれを恨んでいた。矢之助の死刑執行の日、公儀では矢之助年来の功績を惜しんで特赦の恩命があったが、代官所ではこれを秘密にして刎首の後に発表した。その為か矢之助が絶命したと同じ時刻に、和歌山にあった片山氏の本邸は怪火を発して全焼したと傳えられる。

また矢之助の妻楠女は京都或は奈良の生まれとも云うが、烈婦として聞こえ、矢之助が囚われの身となってからは深く心に期する所があり、その死刑執行の日、時を計って先ず二人の愛児を殺し、次いで自分も夫に殉じた。後村人達はその邸の趾に祠を建て、夫を矢之助宮と云い妻女の方を楠神として祀ると云う。

矢之助は直情径行で一向身辺をかまわず、また奇行にも富んでいた。曽て京に上った時、或商店の店先にあった笛を取り上げ、悠々として一曲を吹奏して、恰も傍らに人なき如くであった。また或時浪速（今の大阪市）の町を足半（あしなか）をはいて平然として歩んだので、或る履物屋の店員がこれを見て嗤った。そこで矢之助はつか〳〵とその店へ這入り

「俺の国では長草履をはかないで、足半（あしなか）を履くのが習となっている。今度一寸入用があるので足半（あいなか）の雪駄千足を注文したい。就いては手付金として一両二分置いておくから、何月何日まで作ってほしい」

と手付金を渡して去った。店の主人は驚くと共に妙な注文だと、怪しみもしたが、手付金を受け取っているので注文通りに仕上げて待ったが、遂にそのまゝその雪駄は引取りに来ず結局大きな損失を蒙った。

矢之助はまた非常な健脚家で、奈良で能の会があると、会の前日三十木を出発して翌日の会に加わったという。

○

また「南紀土俗資」に次のような傳説がある。

川上村上阿田木神社境内に矢之助杉という二股の老杉がある。昔三十木矢之助が大土木工事を起こした際工費に窮した末、遂にこの宮の禁木である大杉を伐りかけた。然し木が大きいので一日では伐りおおせない。「なあに幾日かゝっても伐って見せる」と翌日行ってみると、不思議や前の日伐った木屑が夜の間に元に戻って切

り口がなくなっていた。こんなことが幾日も続いて中々伐れなかったので、矢之助は人夫を増し遂に伐り倒した。処が更に怪しい事には、その切り口から忽ち二本の芽が吹き出し、それが段々成長したのが、今の二股杉であるという。

なおこの矢之助杉は、幹の周囲目通り二十九尺、樹高二十五間、地上から五十尺ぐらいの所から三本に分立し、樹齢約五百年と推定される見事なもので、昭和三年（一九二八年）十月本県天然記念物として指定されているが、今どうなっているか知らない。

○

また大字三十木字芝の上百七十七番地に一反二十三歩の田地があり、矢之助屋敷の趾と云われ、昔屋敷跡であった為、三十木の田地の中この田だけが溝掛りでなく、日照年には井戸水で灌漑するのが例になっていたと云うが、これも七・一八水害で流失したのではなかろうかと思う。

○

以上極めて大雑把な矢之助の素描を通じて云えることは、彼は中山中組の大荘屋として地方開発のため大きな貢献をし、また鼓と笛の名手であり、勇み肌で涙にもろい男であったが、反面情けのおもむくままに不き奔走に流れて人の恨みを買い、悲惨な最期を遂げる一因をつくった。然しその豪快な性格は郷党の人気を集め、今も川上地方には

〃三十木矢之助さいたる刀、鞘は三十目、下緒は二十目、中は檜木のあらけずり〃

と云う俚謡が遺っている程である。（終わり）

「紀州新聞」昭和三十一年十月八日掲載

御坊祭りを見て

孤高の詩人萩原朔太郎の随筆の中に「太鼓は古来戦場などで用いられ、その音は軍の士気を鼓舞するものとされているが、私はあの音を聞くと妙に物悲しさを感じる。」と云う意味のことがあったと記憶する。然し私は矢張りあの音を耳にすると心が躍り枯れた血潮がたぎりたつ。殊に秋祭りの遠太鼓は、漸く去らんとする青春の思出を掻き立て、心が弾む。

十月五日の午降り遙かに聞こえる小竹八幡社祭礼のどよめきに、年がいもなく心が浮いてふら〳〵と祭り見物に出かけた。

○

八幡神社前の広場まで来ると、既に渡御がはじまって、第何番目かの四つ太鼓が盛んに練り廻っていた。四つ太鼓は何時見ても景気がよい。押し歩いている若衆は何れも天真爛漫である。日ごろの生活苦も、小難しい理屈も何もかも放り出して、只もう子供のように担ぎはしゃいでいる。

見る人の胸に生の歓び、人生の歓喜をまともぶっつけて来る。実に愉しそうである。時々「ホーエンヤー」と掛け聲して、四つ太鼓をギシ〳〵軋ませながら、かる〴〵と小揺すりさせる。洵に張ち切れる若さの、あり余る生命力の発露が感じられて気持ちがよい。

○

私はうっかりこのほゝ笑ましい光景に見惚れて今日の祭礼見物の重要な目的である「戯瓢踊り」を見損なってしまった。戯瓢踊りは近年無形文化財に指定されているし、その上踊りの冒頭に読み上げる四恩状の読み手が、今年は外ならぬ山中三郎君であると聞いて、あのデリケートな心臓の持ち主、不艸君が一体どう云う面をして読み上げるかこっそり覗って見たいと云う、余り御上品でない企てもあったのだが、それさえすっかり忘れてしまう程、それ程四つ太鼓は私の心を捉えたのである。

○

然し世の中は変わった。私の郷村川辺町矢田地区では、今年の秋祭りには一切の祭礼行事を取りやめて、野球大会を開催すると云うことである。

理由の第一は、あゝいう四つ太鼓や屋台は時代遅れの風習で、そのために浪費される金が何萬円とか、それよりも当世流行の野球大会で、村民一同が楽しみを共にする方が、より文化的であり進歩的であると云うのである。アメリカ的合理主義の浸透である。

○

こう説明されて見るといち〳〵御説御尤もで、私には一言の余地もない。まことに結構な御時世でと云う外はない。四つ太鼓に見惚れている方が余程時代遅れと引退がらざるを得ないのであるが、引退って見ても、何かこう私の胸には釈然たらざるわざかまりが残る。つまり愚痴の塊という奴であろう。進歩主義結構、文化

的異議なしではあるが、合理主義の醸し出す余りにもキッチリした空気、ゆとりの無さが元来野人の私の肌に合わぬのであろう。世の中と云うものは、餘りに整った恰も時計の機械のように整然として住み難い。

賢い人達の中に呑兵衞があり、浪費家があり予定通りにゆかぬ所に、面白味もあり生きがいがあるのではなかろうか。野球決して悪いとは云わぬが、あれはお盆にでも、お正月にでも、御彼岸にでもできる。年に一度の氏神の御祭り位は、羽目をはずしてわっしょい〳〵やって欲しいものだ。祭礼の余興などと云うものは、何れは亡び行く運命のものではあろうが、こんなに早く然も私の村から崩れようとは思わなかった。

御坊祭り見物記が思わぬ処へペンがすべった。貰い祭りに一杯やったせいであろう。酔余りの弄筆願わくば咎め給うなかれ。

（昭和三十一年十月五日夜稿）

かんのんさま考

「紀州新聞」昭和三十一年十月九・十日掲載

○

大事なことはすぐ忘れてしまう癖に、つまらぬことが何時までも頭にこびりついている。何時であったか田辺の雑賀平三郎氏が、女陰のことを「かんのんさん」と云うが、あれは如何ゆう訳かと本紙に設問したのに対し、井上豊太郎氏は、その理由は知らないと答えられたことがあった。

成程日高地方では、虱や女陰を「かんのんさま」と云うている。虱を「かんのんさま」と呼ぶのはどちらも手の数が多い（千手観音）ためであろうことは、容易に想像できるが、女陰が何故「かんのんさま」かは難しい。全く馬鹿げた取るにも足らぬ話で、その場限りで忘れてしまえばよいのだが、それが気になる。

開けても暮れても「かんのんさま」に引かかって、も早三、四年になる。その間、目に触れる限りの、国語、漢和、古語、方言、隠語、陰名辞典を調べたが分からない。分からない処ではない、てんで「かんのんさま」をそうした意味に使用したものさえ見当たらない。されば女陰を「かんのんさま」と云うのは紀南地方に限った事であろうか、今後は傳手を求めて全国の、この隠語分布を調べて見たいとさえ考えている。

○

この間、もと日高中学校の先生であった楳垣実先生の「隠語辞典」を見ると

あみだきょう ═ 乳房、女陰（僧語）
あみだにょらい ═ 美人、女陰（僧語）

とあり、「あみだきょう」や「あみだにょらい」がともに、女陰を指す僧侶の隠語であることを知った。一つの発見である。日高地方の「かんのんさま」が僧侶間では「あみだ如來」になっているが、もともと佛様であることには変りない。

してみると、物々しく性器崇拝の、原始宗教の論ずるまでもなく、女性の彼の物は人間にとって有難いものである事は否定できない。

三千の諸佛この門より出で、三介の衆生この門に集まる

という言葉もあり、生きとし生ける者誰かこの門のおかげを蒙らざるであるから、昔の素朴な私達の祖先は、ほゝ笑ましくも、この著しく懸け離れたものを、ただ有難いものだという共通点だけで結びつけて「かんのんさま」と云い、或は「あみだ如來」と秘かに名づけたのではあるまいか。ひょっとすると酒を般若湯と云い、美人を「あみだ如來」とよび換える程智恵者の僧侶の事だから、もともと「かんのんさま」も僧侶間の隠語であったものが、一般にも広がったのかも知れない。

○

この間何かの折りに、田端憲之助氏にこの話をした処、田端氏は、「古今著聞集」の興言利口篇にあったがと思う旨答えられた。「古今著聞集」は後深草天皇（一二四六～五六年）の頃の橘成季に係るものと傳えられるから、事実とすれば、「かんのんさま」も一挙に七百年を遡り得る訳で、これは楳垣氏の「隠語辞典」以上の収穫である。

早速書箱の隅から「古今著聞集」を取り出したことは云うまでもない。期待に胸を弾ませながら頁を繰った。その一節を直訳して見ると、

昔栄性と云う坊さんが、こっそり尼さんとよい仲になった。同じ家に住みながらも、流石に世間を憚って、中一間隔てゝ別々に暮らしていたが、一事を催して来ると、白昼でも前をかき上げて「一尺五寸の小仏が頭をふって参った」と云いつゝ、尼の方へ歩んで行くと、尼さんもすかさずまえをはだけて「三間四面の小御堂の戸が開きました」と部屋へ引き入れた。

と云うのである。ここでは私の期待した「かんのんさま」と云う字句はない。一寸失望した。然し「三間四面の小御堂の戸が開いた」と云う言葉は面白い。日高地方でも、女人が隠すべき部分を現すことを、「御開帳する」と云うことは、人の知る通りだし、広く一般にも行われている隠語と見え、楳垣氏の「隠語辞典」にもち

やんと収録されている。何れにしても「かんのんさま」も「御開帳」も共に仏臭い処に、その語源を探る鍵がありそうな気がする。

○

また印南町印南原の考古学研究家高野光男氏は、観音像の光背（船形光背）から来たものではないかと、考古家らしい意見を述べてきた。成程そう云えば、確かに船形光背と女陰は、形状に於いて共通したものを持っている。傾聴すべき一説である。

○

私の「かんのんさま」考は、今の処以上の段階を全く出ない。将来閑を得て、江戸時代の稗史、随筆類を渉漁する機会が来れば、或は意外な発見があるかも知れない。その時はまた本紙上で読者に報告したいと思う。

（終り）　昭和三一・一〇・七夜稿

かんのんさま考補記

「紀州新聞」昭和三十一年十月十二日掲載

○

この間うち「かんのんさま考」を本紙上に載せた処、「書きびとしらず」と名乗る一読者から、早速手紙がとどいた。

冠省十月九日付「紀州新聞」紙上の中作「かんのんさま考」第一回を面白く拝見しました。「誹風未摘果」に、

はすは守（蓮葉）手毬つくとて開帳し　仲条の内開帳はしずかなり

などあり、この開帳は云うまでもなく、「厨子の扉を開いて内部の本尊を公衆に拝ませることであるが、転じて女子が性器を露出するを云う」と、註釈にある通りです。此辺でも開帳と普通申しています。然らば御開帳の御本尊は、かんのんさまを連想させるのは極めて自然で、私も少年の頃「かんのんさまの御開帳」とはやしたてたることを記憶します。

開帳は本尊あってのこと故、あなたの御研究とは逆で、御参考にはならないことは勿論ですが、思い

つくまゝ戯書しました。呵々

○

そう聞かされると「誹風未摘果」を持ちながら、顧みなかった私は確かに迂闊であった。云うまでもなく「誹風未摘果」は、江戸時代の人情風俗を鋭く反映した庶民文学であるから、探せば何か手がかりが得られた筈であった。

幸いにして親切な「読人知らず」は、私に代わって一読して、私の求める「かんのんさま」ではないが、これに関連した御開帳という言葉を見出して呉れた。

蓮葉守手毬つくとて開帳し

蓮葉は日高地方で云う「はっさい」に当たる。つまりお転婆な子守娘が、手毬つきに夢中になって、つい大事なところを見せたと云うのである。

仲条の内開帳はしずかなり

仲条は昔の産婦人科医のことだが、江戸時代には堕胎を専門とし、後には子堕ろし婆さんまで含めた総称であったらしいと云えば、後は説明するまでもない。仲条の御開帳は静かでなければ大変である。

○

こうして見ると、「古今著聞集」あたりに端を発したらしい御開帳という言葉は、江戸時代には盛んに使われたことが分かり、御開帳と「かんのんさま」は、愈々密接なありそうである。（三一・一〇・九夜追記）

夏の夜咄

「新紀州新聞」昭和三十一年八月十三日掲載

1

美浜町吉原、松見寺の兼平行海師は目下百日の厳行を修せられているが、この間師を訪れて四方山話の事、面白い事を聞いた。

行海師が修せられている行は叡山の所謂廻峰の行の類するもので、深更十二時頃菅笠をかむり、白衣を着し草鞋脚絆に身を固め、珠数を片手に松見寺を出て誦經しながら、二里の道を道成寺に詣で歸山するのである。

道筋は田井、經小竹、島、小松原を經て津井切から吉田八幡山の裾を通るのであるが、八幡山へかかるころは大低午前一時か二時ごろ、俗に云う家の棟も三寸下り、草木も睡る丑三ツ時になる。それでなくても彼の辺りは淋しい所である。今でこそ樹立も浅くなり近くに村の灯も見えるが、一昔前は魔辻として怖れられ、様々な怪奇な物語さえ遺っている。

全く猫の子一匹通らない。ただ行海師自身の足音だけがすた〳〵と夜のしゞまを破って聞こえるだけである。と、突然師の行く手にあたって途方もない大きな物音、丸で大木を無理矢理にヘッ裂きする様な無氣味な音が聞こえる。瞬間流石の師も思はずギョット足を止める。

亦或る夜は矢張りこの辺まで來ると、何処からともなく恰も若い女のすすり泣くような聲が、或時は低く、或時は高く、訴えるが如く、或は恨むが如く物悲しげに聞こえて來る。

全く昔からあの辺を魔辻と云うが本当です。然し修業が漸く積んで五十日目を過ぎる頃からは、こうした際害はなくなりました。亦こうした物の怪のあるのはからっと晴れ切った夜や、反対に風雨の劇しい土砂降りの夜はなく、昔からよく云いますが、雨のしょぼ〳〵と降る、陰にこもった夜の方が多うございました。つまり、そんな晩は狐狸の類が餌を索めてそこいらを彷徨するのでしょうね。と行海師の話である。

2

私にも一つの奇怪な出來事に遭遇した思い出がある。今から四十年ばかり前、私がまだ七、八才の頃ことである。その頃私の家に、さわ江とよぶねえやが居た。美人と云う程ではないが、くり〳〵した氣質の優しい娘であった。やがてねえやは近所の青年と戀に落ちた末、私の母の肝入りで青年の許へ嫁ぐことになった。結納もすんで、この冬はお嫁入りとほぼ日取りまで定まってから、ねえやは病氣になった。ねえやの病氣は中々はかばかしく行かなかった。やがてねえやは療養のため數里程離れた實家へ歸った。

実家へ歸ったねえやからは時々短い便りが來た。病氣は相變らずはっきりしなかったらしいが、子供の私は許より詳しい消息は知らなかった。ところが或日突然ねえやの家から電報が來た。長い病氣に行く末はかなんだねえやが、村外れの池で入水自殺を遂げたと云う知らせであった。

それから幾日か過ぎた或日の暮れ方、私達は台所に集まって夕飯をとっていた。と、突然表の二階の部屋の戸がギィーと開く音がした。二階の部屋はねえやの部屋にしていたが、ねえやが歸ってからは空部屋になったまゝできちんと戸を閉めてあった。無論誰も居りはしない。誰も部屋へ行った者はないのに、閉めていた入口の戸が五、六寸開け放されていた。私達は思わず顔を見合わせた。死んだねえやが戻って來たんだよ。母は靜

に私達に語ったが、きちんと閉じていた戸が、然も相當重い戸がどうして自然に開いたのか、この謎は四十年後の今も猶解けない。

鳥に因む姓の話

「紀州新聞」昭和三十二年一月一日掲載

横光利一の名作「紋章」には雁金と云う男が登場するが、美浜町吉原に「雁」と書いて「がん」と呼ぶ姓がある。

明治初年（一八六八年）まだ庶民には姓が許されず、単に何兵衞、何兵衞門で通っていたころ、雁氏は大工を家業としていた。ある年有田郡広村の醤油屋へ出稼ぎした。至って男ッ振りと気前のよい男なので、醤油屋の娘某はすっかり大工にうちこみ、遂に当時醤油醸造元と一介の大工でかなり身分は違ったが、恋に上下のへだてなく、目出度く添い遂げた。後、明治初年、一般人にも姓が許された日、嫁の里が名家である所から、その姓を貰い雁を称したものである。従って吉原雁氏の由来は広村で訊かぬと分からぬ。

○

広村雁家の由緒について、同村浜口恵照師の来書に曰く

雁氏はもと同地の土豪崎山三郎兵衞正勝より出づ、三代三郎兵衞政重の時、南流院徳川頼宣同地のもと畠山氏の邸趾に硯魚邸を設けて遊ぶ。政重屢々公に伴われ漁船に乗じ近海に出た。或時政重船上から群雁を銃撃してこれを捕らえた。公感嘆して即座に雁姓を賜う。

と。

広村にはこのほか鷺姓の家もあると聞くが、多くを知らぬ。

○

これに似た噺が、日高町荊木、鵜上豊楠氏にもある。いつのころであったか、紀伊徳川候が狩猟したとき、荊木大池附近で鵜を仕とめた。北風の烈しい日でひら〳〵と池の上に落ち、風を受けて中程に流された。

誰かある、鵜を持てッ！

と、殿様の下知が聞こえたが、寒中のことで左右の者がひるんだ。この時、

御免！

と元気な声を残し、一人の男がざんぶと身を切るような水中に飛びこみ、見事に鵜を拾い上げた。殿様の感服一方ならず、賞として銀子若干と鵜上の姓を賜った。それ故鵜上は、ウガミと訓まずウアゲと訓むと云う。

○

この噺はどこまで事実を傳えるものかは知らぬ。恐らく各地に残る姓名傳説としておく方が無難かも知れぬ。が鵜上氏少年のころ、殿様御下賜と伝える金錢、銀錢若干が秘蔵されており、今から二十七、八年前盗難に罹ったと云うのは惜しまれる。

何れにしても鵜上姓は極めて少なく、氏は数十年来同姓を索め、漸く最近千葉大学教授地球物理学者、鵜上三郎氏（千葉縣出身）を知ったのみと。

徳本上人の奇蹟

「紀州新聞」昭和三十一年十月十五・十六日掲載

日高町久志の誕生院では、昭和三十二年か三年の春、徳本上人の二百回忌を厳修すると云う事だが、考えて見ると、上人の御名は日高人にとって不世出の高僧としてよりも、寧ろ郷土が生んだ慈悲深い坊さんとして、或る親しさと懐かしさをもって響いて来る。

死んだ私の祖母などは、徳本上人とは云わないで、よく徳本さんが如何であったとか、こうなさったとか、極めて心安くまるで自分の旦那寺の和尚さんの事のように親しみ深く話して聞かせたのを覚えている。

○

その徳本上人が、千津川村の落合谷（今の川辺町千津川）で烈しい御修業中の物語りである。

千津川の里に某と云う信心深いお嫁さんがあった。ある年の春のこと、蓬餅をつくったので、日頃から皈依している上人に供養したいと思い、せっせと重箱へ入れていた。側にいた姑はジロリと重箱を覗いて、

「お前さん蓬餅を上げるのはよいが、上人さんは独り者だから、そんなに食べられるものか、その半分もあれば充分だよ……」

と叱言を云った。

「ハイ」
心の優しい嫁は静に姑の方に向い、
「でも上人様はお餅を大変お好きだと申しますし」
と重箱一杯の蓬餅を持って、いそ〳〵と落合谷の草庵を訪ねた。草庵では春が来て山桜が咲き、雲雀がのどかに鳴いているというのに、上人はそんな浮世の春にかかわりなく、相変わらず念仏三昧に余念がなかった。がやがて、人の気配に振りかえると、
「あゝ誰かと思えばお前さんであったか、それは〳〵珍しいことじゃ、ホウ俺の好物の蓬餅を呉れたのか、それは〳〵かたじけない。然しナ一寸お待ち、俺はナ見かけの通り独り者じゃ、お餅はその半分だけで充分じゃ、残りは家で婆さんが惜しがっているはずじゃデ、持って皈って婆さんにやって呉よ」
と云ったまゝ、驚いて棒立ちになった若嫁の姿も忘れたように、再び静かに勤行を続けられたと云う。

○

また上人が有田郡宮原の須谷山中で御修行中の事、上人の幼友達の西与藏と云う男が死んだ。子供の時分から至極気心があって、上人が出家の後も、道俗の別をこえ親しい間柄であったので、近所の人達は上人に知らせかた〴〵戒名をつけて貰おうと云うことになり須谷まで出かけた。上人は、
「それは遠い所を御苦労であった。然し与藏のことは心配して呉れるな、俺は昨夜のうちに極楽まで連れて行って来た。戒名もそこへ用意しておいたから安心しておいて呉れ」
と申されたので、人々は大いに驚嘆した。

○

こんな話は上人の御生涯中に幾らでもある。上人六十一年の御生涯は、一面殆んど奇蹟の連続と云ってもよい。大体徳本上人に限らず、古来の高僧智識の傳記には奇蹟がつき物である。一体今日の私達はこうした一見して現代の常識では判断し難いような奇蹟をどう受取ってよいのか、これについて私は洵に浅薄な解釈で恥しいが、私流に次のように考えている。
即ちそんなことを不思議に思うのは私共凡人の小賢しさであって、常住座臥、ただ修業に修業を重ね、雑念を去って人生の工夫に工夫をこらし、精進不断であればその心眼は曇りなくさえて、あたかも精密な受信機がどんな小さな電波をも逃がさぬように、天地間の森羅萬象が、その澄み切った魂のアンテナに鋭敏にキャッチされるのではあるまいか。

只私共のアンテナはできあいのお粗末なものである上、余りにも煩悩の曇りが多いためにそうした閃きを捉え得ないのであると。

私達が誇っている今日の科学は、まだ〳〵進歩の途中にあるのだから、こうした現象を解明することができないが、やがて幾十年かの後にはこの一件奇異に見える事柄も合理的に解明する日が必ず来る。その時になってはじめて下根の私達も成程そうであったかと納得できるので、高僧の奇蹟も決して荒唐無稽な作り話として退ける事はできないであろう。

（昭和三一・一〇・一〇夜　公社にて宿直の夜稿）

宮原から海南まで

「紀州新聞」昭和三十一年十一月十一・十二日掲載

○

十月二十八日宮原から蕪坂、藤白峠を越え海南まで歩いた。藤田草宇君に誘われて三年目である。一行は田端憲之助老、中田宇南氏を加えた四名である。

宮原駅を降りると直ぐ蕪坂にかかる。枝もたわわな蜜柑畑の間を縫う小径は、幅三尺ばかりでかなり嶮しい。これが昔の熊野街道で、幾度か法皇、上皇の御幸の跡かと思う。

道の東数町の地に岩屋城趾がそそり立つ。城趾まで上り約七町。足利の頃、畠山入道子山の三男小太郎政氏、始めて城を構え、嫡男政国、正義三代が居城した強者共が夢の跡である。

また寛政七年（一七九五年）から享和元年（一八〇一年）まで七ヵ年、念佛の行者徳本上人が御修業の地でもある。上人御修行中、結縁を求める男女があるごとに、上人は山頂の巨岩の上に立ち現れ、声高らかに御十念を授けられたが、音吐朗々として遙か山麓の有田平野に響き渡り、熊野往還を行き交う人々の腸にしみこんだと傳えられる。

○

とかくする程に坂の八合目あたり露谷の広利禅寺に着いた。数本の松と杉に囲まれた小堂であるが、「紀伊続風土記」に

建長年間（西暦一二五〇年代）覚円和尚の開基にて、旧は佛殿、塔、方丈、塔頭六軒、山林および免田四町ありしに、天正年中（一五七三～九二年）破滅して佛殿一宇、本尊十一面観音のみ存す。云々。

とあり、本尊は夙く国宝に指定された秀作である。

婆さんが茶を運んでくれた。渇いた咽喉にとても美味しい。訪う人の少ない山上のことで、婆さんはひどく喜んで、いそ〳〵と御本尊を開帳して呉れた。近年修理したと見え、金色燦然として損傷の痕は全くない。御丈け凡そ四尺、尺余の蓮座に立たせられた御姿は、室町時代の作とは云え、豊に温かく、御眼差しは遠い正（一三四六～七〇年）平の昔を夢見させられるかのようである。婆さんはポツリ〳〵と古い物語を始めた。

広利禅寺はもと西方寺と称したと云う。由良興国寺末である。明治十七年（一八八四年）の大風で本堂が倒潰した時、御本尊様は御自ら屋外に難を避けられたので、何の御怪我もなかった。その後興国寺の小堂を貰い受けて建てたのが、今の佛殿である。昭和四、五年頃（一九二九～三〇年）御本尊様を修理した際、胎内から法華経八巻が出た。修理が終って胎内に納めようとしたが、どうしても納まらぬのでこの通り別に保管している。

と木箱に蔵めた胎内経を取り出した。経文は法華経で奥書に、

奉造立

願　主　藤原保久

勧進者　僧善聖

とあり、藤原保久の発願で善聖が勧進して創建したと云うことであろう。

また別に（一三五三年）正平八癸巳七月一日

天王寺大仏師

式部法橋頼円

舎弟尾張頼基

子息駿河実円

ともあり、これは本尊十一面観音を彫刻した仏師の名で、天王寺の仏師頼円親子兄弟の合作であることを物語る。なお外に（一三三六年）建武三年十二月起草

紙数四十二枚

と云う文字も見られる。云うまでもなく、写経起草の日付と知られる。婆さんはまた云う。

斯様な有難い御本尊をおまつりしながら、余りにも不便な地にあるため、諸人のお参りを受けられない。思い切ってもう少し便利な、せめてこの山麓へでもお移ししてはと云う話もあり、篤信の人が御本尊様

にお伺いを立てたが、矢張りここを動き度ないと御告げがあった。
と話を結んだ。私達は婆さんの好意を謝し、別れを告げた。老松にまつわる葛の色が何時までも頭に残る。

○

この辺りは海抜四百米に近い。道は相変わらず険しい。水が豊富で泉溪たる谷川の音が聞こえ、水田が拓け既に刈取られた処もある。顧ると有田川を挾んで、宮原、保田の沃野が連なり、平野の盡きる所糸我の山々が望まれる。万葉集に詠まれた

足代すぎて糸我の山の桜花散らずあらなむ還り来るまで

の一首を思いうかべ、「散らずあらなむ」と桜を賞でながら旅した万葉人の歓びを想像し、足代の地は何処あたりであろうかと興趣は尽きぬ。

峠道のやや後方、蒼々たる老松の聳立するのを見る。昭和九年（一九三四年）九月確か県天然記念物の指定を受けた名木で、幹周二丈一尺、樹高約十一間、樹齢四百年以上、昔の一里松と云われ、樹下に方三間の小宇があり、傳弘法大師作の爪書き地蔵を安置していると言う。是非一見しておくよう和田喜久男氏から奬められていたが、少し戻り道になるので素通りして了ったことが今悔やまれる。

坂がやや緩やかになった処、峠路の左右に畑の部落が散在する。「紀伊続風土記」に家数七十三間とあるが、今は三十戸ぐらいと聞いた。海抜既に五百米に近いが、流石に蜜柑の産地で、家の構えも大きく裕に見える。家ごとに水道が引かれ、中々文化的である。一体どうしてこの山上にこれ程の集落が出来たのか、昔の峠路の茶屋がそも〳〵の始まりか、或は蜜柑畑の開墾が進むにつれ、耕作の便利から移住してきたのであろうか。

道の傍に太刀の宮と呼ぶ小祠がある。古来太刀を献じて祈る慣しがあり、社前には絶えず木刀を奉納していたと田端老の御説明であったが、近年その風も廃れたと見え、今は一本の太刀も見ない。

畑の集落を後に一、二町すると路は白倉山の西南に出る。蕪坂第一の高峯で海抜五百米余、硅石を産し山容白石を帯るを以て、白倉の名が出たものと想像される。近年この硅石が注目され、採掘されて山頂から策道で遠く下津港に運ばれる。深く削られた岩肌は、生々しく傷ましい。今日は休日でもあるのか、作業場に人影は見えぬ。山上の飯場では鉱夫のおかみさん達が、のんびり無駄話をしている。

坂はここから下りになるが相変わらず嶮しい。坂の中程に沓樹の集落があり、ここも蜜柑処で家並みが大きい。坂を下ると市坪、橘本の部落が加茂川の岸に沿うて散在する。勅命により常世の国から橘をもたらしたという、田道間守を祀る橘本王子があって、境内の杉の大樹が素晴らしい。白河法皇熊野御幸の時、社前に通夜

し賜うて

橘の本に一夜の旅寝して入佐の山の月を見るかな

と詠ませられたとか。加茂川沿いに数町下り、右に折れると藤白峠になる。

○

時刻は午後一時に近かった。私達は路傍の蜜柑畑で弁当を開き、少憩してまた歩いた。藤白峠は蕪坂に比べて、ずっとやさしいと聞いて来たが、矢張り急坂である。思えば昔の人は健脚であった。私達はようやく蕪坂を越えたばかりであるが、日高地方から上方へ行くには、このほかに鹿ヵ瀬、糸我の二嶮を越えねばならぬ。

昔、徳本上人は父の看病のため、月に数度は和歌山へ日帰りしたといわれ、筆者の叔父の一人は(一寸奇人であったらしいが)これも和歌山へ楽に日帰りしたと聞いたが、驚くべき脚力である。

峠の途中で家族連れの一團や、若い男女のハイカーに逢うた。漸くにして峠の頂上に出た。かなり広い池があり、池の周囲に竹籔を負うた数軒の農家がある。婆さんが一人豆がらをたゝいている。まるで南画にでもありそうな風景である。この池には真鯉、緋鯉が多く、旅人の目を楽しませたと云うが、戦争で濫獲されたか一匹も見えぬ。

池の傍に方三間ばかりの粗末な小堂があり、ここに有名な国宝の石造地蔵菩薩が安置されている。地蔵石仏として珍しい台座、光背とも一石造りで、目測御丈け一丈余の巨大なものである。御堂の扉は堅く閉ざされている。

私達は格子戸の隙間に顔をよせた。地蔵菩薩は当初から堂内に祀られていたため、堂内の薄暗い光線に浮かんだ御姿は、木彫りのように肉付がゆたかで、六百年の星霜を閲したとは思えぬ。寧ろ或る生々しささえ感じる。光背の裏に

勧進揚柳山沙門心静

元亨三葵己十月二十四日（一三二三年）

大工薩摩守行経

の銘が見られ、元亨三年(西暦一三二三年十月)海草郡山東村黒岩の旧宝光寺改宗初代の住職、心静の建立と知られる。田中敬忠氏に従えば、鎌倉中期以前の石仏で、これ程完全な優秀作は少なく、奈良時代から鎌倉時代にかけ、国宝に指定された五軀の一と云う。

また堂の前方の小高い地に、苔むした巨大な宝篋印塔がある。総高約一丈、嘗て和田喜久男氏がこれを調査

した際、附近の農家から梯子を借りたと聞いたが、それ程大きい。風化の跡が著しく、東南にやや傾斜して安定感を缺く。梵字のみ認められ、古来諸説あって誰の墓碑とも分からない。何れは世に時めいた権力者の奥津城であろうが、思えば人の代の権勢など、所詮淀みに浮かぶ泡沫の如く果敢ないものである。

○

私達は地蔵菩薩を拝し、宝篋印塔に人生の無情を味わい、峠の眺望に時の移るのを忘れた。薄ら曇りの空ながら海南、和歌山、和歌浦の市街や雑賀崎は指呼の裡にあり、名草山から紀の川を隔てた河内、和泉の山々も狭霧の中に浮かび、大気の澄んだ日は遠く摂、河から播磨の連山も望めるという。洵に街道第一の景観である。路はここから海南まで一筋の下りで、峠路の左右には「つわ蕗」と「野菊」が咲き乱れて、一入風情を添える。

藤白のみ坂を越ゆと白たえのわが衣手は涸れにけるかも

大宝元年(西暦七〇一年)冬十月、文武天皇の牟婁御幸に、供奉の一人が詠んだその峠路を、今私達は越えている。藤白の坂は万葉の昔も今も相変わらず嶮しく、名もない秋草がしとゞに濡れている。

峠の下り数町の処に「筆捨の松」が二本道に副うて立つ。松はさして大きくないが、海南観光協会の掲示に昔は道の両側に老松二株あり、周囲一丈三尺、高さ十五間、宇多天皇の御時、画工巨勢の金剛この地の風光を描かんとして及ばず、遂に筆を投じたと傳えらるとあり、洵にさもありなんと思われる程の絶景である。

やっと峠が盡きた。既に海南の人家に近い。田圃の傍に有名な有間皇子の歌碑がある。碑の高さ八尺ばかり、例の「家にあれば笥に盛る飯を……」の悲歌を、佐々木信綱博士の文字で彫りつけてある。山路約四里。これで今日の行程は終った。

(昭和三十一年十一月三日夜、公社宿直室にて誌)

「紀州新聞」昭和三十一年十一月十五日掲載

徳本上人と大殿様

○

大殿様が高野へお詣りした。高野山の天狗共が悪戯をして、忽ち雲を呼び真の闇にしたので、行列は一歩も

進む事が出来なくなった。家来の者が困じはてゝいると、駕籠の中から

「者共！高野の山に火を掛けよ！」

と大殿様の大声叱咤する声が聞こえ、同時にもと通りパット明るくなった。この話は子供の頃死んだ祖母から幾度も聞かされた。

大殿様、今でも古い人は憶えているかも知れない。紀州徳川家の八代藩主重倫候おくり名は観自在公、老して太真。晩年は多く和歌山薬種畑御殿にあったゝめ、俗に薬種畑様とも云うた。

大殿様は丈高く強健で十二文の足袋を穿いた。犬が好きで殿中のお座敷から廊下筋に到るまで何十匹も養い、仔を生むにつれ扶持方をつけて諸方へ預けた。また蜘蛛の巣をひどく嫌い、市中へ御出かけのときは、先行の近侍が「控えい！下に、下に！」と竹箒を十文字にふり廻しながら歩いたともいう。朝鮮人蔘や生姜、葱の白根が好物で、常に葱の白根を七五三にたゝき、お粥に入れて食べ、それで長寿を得たと傳えられる。文政十二年（一八二九年）六月二日歿、世寿八十四才。

非常に気性が荒々しい上愛憎常なく、若い時分は気にさわれば侍臣、妃妾も容赦なくお手討ちにした。嘗て江戸麹町の藩邸に在った時、隣の松平某邸の高楼で、夏のことで毎夕婦女達が夕涼みをしながら、大殿様のお屋敷を見下ろす。

「おのれ女子供の分際でわが邸を見下ろして談笑するのは以ての外」

と怒り、遂に一夕自ら銃をとって狙撃した。如何に御三家の一とは云え、御府内の発砲は厳しい禁令であり、たとえ殿様であろうと、家臣でない限り無礼討ちは許されない。よって幕府から国籠隠居を命ぜられ、剃髪して太真と号した。

○

こうした噪暴殆んど狂に近かった大殿様も、文化七年（一八一〇年）十月（六十五才）と、同十二年二月（七十才）の二回にわたり下屋敷の焼失した頃から柔和になられた。そうした若かりし日、怒りの発するまゝ犠牲にした侍臣達の上を思い、後悔の念に悩んだが、この心境の変化は単なるお年のせいばかりでなく、徳本上人の感化なども与って力があったものと云われる。

傳説によると、大殿様が侍臣を従えて狩に出た。遠く山野を駆けめぐっていると、頭髪蓬の如く、幾年も湯浴みもしない徳本行者が、殆んど赤裸に近い姿に麻の袈裟をつけ、一心に修業しているのを見かけた。

「一体あれは何者じゃ！」
「如何にも人間の様であるが異態のものである。鉄砲を撃て！」
忽ち銃声が轟いた。然し上人にはいささかの動揺の陰もない、もとの通り静かに一唱一礼を励んでいる。
大殿様は、つかつかと上人の側により
「其方は一体何者じゃ！」
とお訊ねがあり、上人から御修業の模様を聞かれた。気が荒いが決して馬鹿殿様ではないから、大いに感銘して
「奇特である」
とお褒めの言葉があった。また後に上人が御殿に上って、大殿様に御受戒をし、「一枚起請文」の講説をされたが、上人が法衣の片袖を覗かせると、そこには大殿様の御手討におうた人々が、浮かびきれずに地獄の責苦を受けていた。更に片方の袖を覗くと、そこは蓮の華が咲き、小鳥の遊ぶ平和な極楽が見られ、今さらながら己の罪の深さに戦慄したのであった。

○

事の真偽はとも角、この二つの物語は、上人の絶大な感化力と、藩侯の並々ならぬ関係を遺憾なく伝えるものである。然らば上人と紀伊徳川家は、何時ごろ如何にして結ばれたかとなると、諸書について見ても存外明らかでなく、「徳本行者傳」も寛政十二年（一八〇〇年）摂津留錫中の上人のもとに、太真候から紀伊国中、望みの地で国内教化に盡すよう使者があり、同年八月頃から凡そ一年余を有田郡須ガ谷に帰錫庵在、その間太真候の母公清淨院逝去のことがあり、その追善のため母公の御殿を上人に賜わり、須ガ谷に移したことを伝えるにすぎぬ。
しかし仮にも致職しているとは云え、藩侯の父君から突然使者が出たり、御殿を賜ったりすることはあるまいから、この以前、既に何等かの交渉があったのではないかと考える。何れにしても上人の徳風は、国中庶民をして生き佛様、上人様と随喜渇仰せしめたのみならず、藩の大奥までも深く浸透し、時の支配者達の魂の上にも、大きな光を投げかけたのであった。　―完―

（昭和三一・一一・五、夜）

二つの世界

「紀州新聞」昭和三十一年十一月十九日掲載

仕事の都合で、昨年の暮れから某家へ出入りしている。郡内でも聞こえた資産家である。もともと金に縁の薄い私は、この機会に世間の所謂財産家の暮らし振りを知っておきたいと考え、それとなく注意して見た。

この家の主人はもう六十がらみの初老の人であるが、親譲りの財産を護りさえすればよい人である。私達のように、生活のために働かねばならぬ境涯ではない。時間と金は持て余す程ある。私達ならさしづめ本を読むか物を書くか、とに角一かどの仕事をする所だが、全く何をしている風もない。俳句も作らない、歌も詠まない、碁も将棋もやらない、謡もやらねば、釣りに出かけるのも見たことはない。

一日の大部分を黒く拭きこんだ大黒柱によりかかって、呆然と表の人通りを眺めている。時には余程退屈した時であろう、庭におりて女中の洗濯を手傳ったりしている。

側から見ると、幾ら金があっても、あゝいう生活の何処に面白味があるのかと疑われるが、そなことは貧乏人の云う事で、当人にとっては、ぼんやりしているように見える間にも、持山の立木は一時も休まず伸び、銀行の預金は刻々増えて行く、それで結構生きがいがあるのであろう。貧乏人に何が分かるかというに違いない。

それにつけても思い出されるのは、昭和二十五年九月二日ジエーン台風の日のことである。まんの悪いことにその日私は日直であった。勤め先であの風で散々な目にあったが、その間にも気になるのは家のことであった。只でさえ怪し気な私の家は、この風でどうなったであろうか、風がおさまると同時に飛ぶようにして帰った。

途中の光景は惨胆たるものであった。大自然の猛威に慌てふためいた人々が、右往左往していた。誰の眼も血走っていた。

そんな中を私の村近くまで自転車を走らせて来ると、何と驚くべし、一人の中年男が悠然と釣りをしているではないか。見たところ餘り裕そうな男ではない。恐らく近くの裏町に借家住まいをしている労働者であろうが、その風貌には。丸で彼の処だけ風も雨もなかったような静けさがあった。世間の混乱もどこ吹く風と云ったおもむきで、無心に糸を垂れていた。

私は思わずアッと息をのんだ。一体これはなんと云うことだ。どう云う身分の男だろうか。何にしても、これ程の騒ぎにいささかも煩されず、自分の世界に没頭している彼をしみじみ羨ましいと思った事であった。

今年も台風の季節になって、ふっとこの事を思い出した。そうして昨年来見てきた某家の主人のような生活と、はたしてどちらが幸福だろうか、人間の暮らし方にも色々あるものだと考えている。

（「稲雀」十一月号より）

おけつさん

「紀州新聞」昭和三十一年十二月十一日掲載

今から廿年程前、堅田三千穂氏が「紀南新聞」の主筆であった時、「お祭り巡り」と題して、郡内諸村の祭礼の模様や、神社の由緒などを軽妙な文章にして新聞紙上に連載したことがあった。その中で湯川町宝神社のことを記したついでに、

宝神社の附近に小祠があり、里人は「おけつさん」とよんでいる。「おけつさん」と云うくらいだから、どうせろくなものであるまいと。

云う意味のことを述べていた。ろくなものか如何かは別として、「おけつさん」と云う妙な神社の名は、若い私の心を捉え今に忘れない。

× × ×

「おけつさん」は御坊駅前から真直ぐ南下して、御坊市島に通じる小松原・御坊線の西、湯川町小松原天理教会前方の田の中にあったのだが、今は他社に合祀されて跡方もない。「日高鑑」、財部村の条を見ると、

一、宮五社

としてそのうち

一社　おけち

とある。して見ると、当時(西暦一六七〇年代)既に「おけち」の名で祀られていたことが知れる。

× × ×

「おけつ」―一寸人前で口にするを憚るような名が、事もあろうにどうしてお宮の名になったのであろうか。時々思い出して考えて見るのだが、中々うまい答えが得られないまゝ二十年が過ぎた。

処が去る十月二十八日二、三人で蕪坂越えをしたとき、この峠路が昔の御幸路であると云う事から、

財部の「おけつの宮」は、昔熊野御幸の際、法皇・上皇方の糞尿を埋めた処という傳説がある。

と田端憲之助氏から聞いた。またその後聞いた一説には、藩政時代、領内巡行の殿様が用便した地ともあった。何れにしても「おけつ」と「屎尿」はまんざら縁のない話ではないから、いかにもそんな処に由来するかと、一応わかった心算でいた。

×　×　×

私はどうもおしゃべりだから、こうした長い間の疑問が解けると、嬉しくなってつい誰彼の見境もなく吹聴する癖がある。その後御坊公民館で無駄話をしている処へ、来合した古川成美氏に早速披露した。氏は歴史や民俗学に詳しい上、財部の産だからあの辺の地理にも明るい。

「へえ―そんな話ですか」

と氏独特の穏やかな微笑を浮かべながら、語った処を少し補足すると、

「あれは、はっきり保食神（うけもちの神）を祀ったものだ。保食神は田の神であり、食物の神としてウケ（ウカ）の神や、ミケツの神の名でも傳えられている。財部附近は日高でも穀倉地と云われる土地だから、保食神を祀ったもので、ミケツ神が転じて「おけつさん」になったのも極めて自然である」

と。

×　×　×

成程こう説明されて見ると、洵に尤もな気がする。

さきの屎尿埋蔵説が、どこか「おけつ」の名に無理にこじつけた様な匂いがする上、あの辺は当時の熊野街道からやゝ離れていたと想像され、また財部村の屎尿処理地だけが、何故「おけつの宮」として祀られたのかも不思議である。

それに比べて、保食説は余程理屈にかなっている。恐らくはその通りで間違いあるまい。然しこれも考えて見れば、保食神を祀った村は到る処にあるのに、どうして財部のあの宮だけが、「おけつ」の名でよばれたか、これも一寸おかしいと云えばおかしい。

（昭三一・一二・三夜誌）

煤拂と世繼ほだ

「紀州新聞」昭和三十一年十二月二十二日掲載

句作の経験はないが歳時記を読むのは愉しい。殊に最近出た山本健吉の「新俳句歳時記」は、従来顧みられなかった民俗学の成果を、多分に取入れているので教えられるところが多い。同書「煤払」の条に、

十二月十三日に、神棚をはじめ家のなかの煤払をする所が多い。この日は正月祭の準備の日であり、差

支えがあっても、神棚だけは煤払をし、またこの日を（煤払の年取・よごれ年）などと云って、すませてから簡単な食事につく所もある。この日は煤払のほか、正月飾りの松を山から迎えたり、奉公人の出かわりなどがあったり、歳暮のやりとりがあったりしたのである。年一回家中についている煤を払落とすところから出た言葉で、藁や笹が用いられ、使用後これらに神酒や供物をあげる風習もある。現在の大掃除は春秋二回で、暮れのそれはおおむね十二月二十五日か二十八日に行われているようである。―（下略）

とある。然し日高地方では、少なくとも私の居村川辺町矢田あたりでは、この風も早く廃れたと見え、明治末年生まれの私には煤払の記憶は全くない。その点奥地方面は万事が丁重で、こうした床しい風習は大正半ばごろまであったと云う。美山村寒川林貞助氏談によると、

煤払は十二月十三日行われた。この日囲炉裡の上に天井からぶらさげている自在鍵の煤を払い、藁で作った、五、六寸ぐらいの小さな俵に入れ、道の傍へ捨てた。

小さな俵へ煤を入れて捨てると云うのは面白い。手許にある二、三の民俗学書を調べたが、ほかでは一寸見かけぬようである。

○

また同書「世継ほだ」の条に

年の夜に、新しく清い火をつくり、それを新年の火とする儀式は、諸国の古い神社に行われている。京都祇園のおけら祭もその一つである。村々では昔、火を作る方法がむづかしかったころ、毎晩寝る前に、太い薪を炉の火につぎそえ、灰や籾殻をかけて、次の朝まで火を保たせた。それは主婦のつとめで、火種を絶やさぬことが、家の生きる力の連続と考えられていた。家に死人が出ると、その火が穢れたとして、はじめてそれを消し、炉の中を清めて、新しい火を作った。マッチが自由に得られるようになって、この古い習わしは衰えたが、大晦日が正月にかけての数日間、火を保ちつづける習わしは、あちこちにあり、紀州熊野から日高郡にかけての山村では、大晦日の夜に太い樫の木のほだを炉に入れて、世繼ほだと云っている。「よ」とは戸主の世代を意味するとともに、年々の豊作を云う。前の年の平和と幸福をつづける意味らしい。同じく有田郡では太い松の枝を使って（節ほだ）と云い……（以下略）

とわざ〳〵日高郡の山間部と断っているが、平地に育った私にはこの記憶も全くない。前掲林貞助氏に聞くと、美山村寒川方面では「世継ほだ」は明治末年まで続いていたが、囲炉裡が少なくなった関係か、今はすっかり

絶えたという。また美浜町和田喜久男氏の話では、同家では今も年の夜木炭を二、三本水引で縛り、翌朝その炭に火を移すが、これは「世繼ほだ」の簡略化されたものと云う。何にしても古い習俗が、生活様式の変化とともに、推移する姿が窺われて面白い。　―　完　―

三穂の海

「紀州新聞」昭和三十一年十二月二十五・二十六日掲載

南紀史蹟顕彰会第一回史蹟踏査は、十二月十五日美浜町三尾方面で行われた。この日歳末と寒冷にも拘わらず、石橋健作、小山良三、田端憲之助、田端一郎、津本漁史の諸氏に私を加えた六名が参加した。

九時十分御坊発のバスは煙樹浜の松原沿いに走る。車窓から見る老若とりぐの松の緑に混じる櫨の紅葉が美しい。間もなく磯辺に出る。延々里余に亘る大樹海、その彼方に展ける日高平野の諸村と連山、さらに松原の前方にひろがる涯しない大海原。遙かに浮かぶ切目崎、湯崎の山々、何時見ても飽きることない壮観である。

旅舘日の岬も過ぎた。旅館附近に立てられたボンボリ式の外燈の赤い色がチラと瞼をかすめる。せっかく景勝の地をしめながら待合趣味が気にかゝる。いっそ南国情緒を生かして棕梠でも植えたらと思う。

○

工野儀兵衛翁の碑は海に近い中浜の街路の傍にある。昭和六年（一九三一年）八月加奈陀三尾村人会が建てたもので、西川平吉先生の撰文、時の県知事蔵原敏捷の題字がある。

工野儀兵衛翁ハ三尾村ノ先覚者ニシテ海外発展ノ大先輩ナリ明治二十年（一八八七年）翁年三十四歳始メテ晩香波（バンクーバー）ニ渡ルヤ単身赤手辛苦備ニ至ル而モ僅ニ曙光ヲ認ムルヤ頻ニ近親隣保ヲ招キ己ヲ忘レテ指導誘掖ニ努メ保護奬励懇切ヲ極ム翁在米二十五年遂ニ自ラ産ヲ成スニ至ラズト雖モ後進ノ翁ニ依リテ志ヲ達セル者其数ヲ知ラズ今ヤ三尾ノ村民過半ハ彼地ニ居リ民戸ノ殷富近郷ニ比ナシ茲ニ在米ノ有志碑ヲ郷村ニ建テテ其功徳ヲ永遠ニ記念セント欲ス乃其梗概ヲ叙ス

翁は半農半工で農閑期には大工を業としていた。明治十八年（一八八五年）小浦出身の従兄のすゝめで、家人にも告げずカナダに密航し、バンクーバーで下宿を開業した。そして鮭漁業について見聞するに及んで、次々に故郷の人をよんだ。限られた田畑に囓りつき、一年を通じて満足に出漁する事さえできない貧しい村人達は、翁の招きで

相次いで海を渡り、明治二十六年では既に一ヵ年十名が渡航した。
「おいて行くのか気強い人よ後に心も殘さぬか」
と云う歌は、その頃村で歌われたものと云う。
とに角映画や小説で、華やかな時代の脚光を浴びている移民の村、アメリカ村三尾は、翁によって育くまれたと云って敢えて過言でない。
私達はここから引返し、村の南端龍王岬頂きに鎮座する龍王神社に詣でた。境内五千八十四坪。老樹が鬱蒼として神々しい。この社の祭神は豊玉彦神と云うが由緒は明らかでない。
昭和三十一年（一九五一年）改築されたばかりの神殿は、まだ木の香も新しい。長床に掲げられた建築費寄進の名札に、何れは海を越えたカナダの地名であろうか、ポートエンドワド、ケロナ・ウエニベック、カムループ等の文字が多くあるのも、他所では見られぬ特異なものである。
社前に「あかう（榕樹）」の大樹がある。直立二十五尺、周囲目通十五尺。大正十四年（一九二五年）七月県天然記念物に指定されたもので、樹勢猶旺盛である。
神殿の中庭、向かって左手は直下何十丈とも知れぬ絶壁で、断崖の尽きる所白浪が騒いでいる。崖の一ヵ所が二尺ばかり玉垣を施している。太古龍王の断崖をよじ、ここから社地に入ったと云う傳説があると云う。
この龍王神社は、川辺町矢田方面で雨乞いの神と信仰され、旱魃歳には決まって雨乞い参りをする。近い所では昭和三十一年の日照りにも、小熊区民が一同で参詣した。また同町土生地区では同地の旧家瀬戸家から雨乞いの秘文を貰い、村民一同で祈願の上秘文をこの崖から海に投じることが今も行われている。

○

次いで神社から程近い後磯の三穂の岩室を訪ねる。萬葉集巻三に「博通法師往紀伊国見三穂石室作歌三首」として

旗すすき久米の若子がいましける三穂の石室は見れどあかぬかも
常磐なす石室は今もありけど住みける人ぞ常なかりける
石室戸に立てる松の木汝を見れば昔の人を相見る如し

の歌や

風はやの三穂の浦わの白つゝぢ見れどさびしも亡き人思えば
水々し久米の若子がいふりけん磯の草根の枯れまく惜しも

等の歌で知られた久米の若子が在した石室が、古くからこの後磯の洞窟であると云われているのを見るためである。然し三首の作者博通法師も、歌の主人公久米の若子も古来種々論議されているが、今のところ餘りはっりせず、岩室にしても各説があって断定しがたい、と云うのがほんとうの処である。

即ち「紀伊名所図会」と本居内遠の「三穂岩室考」はこの後磯の洞窟をそれなりとし、近くは日比野道男氏も詳細実地調査の上、その著「万葉地理研究」紀伊篇で賛意を表している。

これに対し「紀伊続風土記」は、ここは風波の患があり人の住むべき地にあらずとし本の脇西山山腹の浄明寺趾にこそその地なりと挙げ、「日高郡誌」はその何れも否定し、遂に遺蹟は不明なりとしている。

さらに諸説を否定の上、本の脇海岸旅館「日の岬」西方の、通称「お六穴」こそ然りとしたものに、本居宣長の「玉勝間」及び、大阪図書舘所蔵の写本「紀伊志略」、或は「紀路草」、「紀路の歌枕」があり、現代では芝口常楠氏がある。

またこれ等の各説を悉く否定の上、別に本の脇西山山腹の山伏尾を擬している人に和田喜久男氏がある。

斯様に先学諸氏の間でも異論のあるのを、如何に向こう見ずの私と雖も、僅か半日や一日の踏査で決論を出すつもりはない。

然し打見たところ岩室は北に数十丈の断崖を負い、奥行き深く冬暖かで、まんざら人の住むべくもないとは云い難い。日比野道男の実測では、穴の入口高さ五間五尺、奥行十三間三尺、幅二間二尺、面積約三十坪という巨大なもので、満潮時で海面から穴の入口の高さ一丈九尺、折から来迎した里人の話でも、大時化のときも穴まで潮の打ちこむことは無く、現に太平洋戦争中空襲を恐れた三尾の人達は、家財道具を洞窟一ぱいに疎開していたと語っていた。

この探訪に際し和田喜久男氏から聞いた注意に従って、水のありかを聞いたが、水は附近に湧かず断崖を越え部落まで行かねば得られぬと答えた。しかしこれとてもそう遠い距離ではない。

○

小むづかしい詮索はさておき、冬とは云えここは暖かで、近くの畑のウスイ豌豆は数尺に伸び、既に花が咲き実さえ結んでいる。オーバーを着けていると、じっとりと汗ばむ程温かい。荒磯に連る累々たる巨岩に腰を下ろした私は、もう一度若子を詠んだ歌をくりかえし、歌にこもるしみじみとした哀れな調べから、遠い昔、或高貴の若人が何等かの理由によって、この地で不遇に果てられたのであろう御生涯を偲んだ。岩室から見る風早の三穂の海は、若子が存した昔と同じように、この日も白波が立ち騒いでいた。　（おわり）

節分

「紀州新聞」昭和三十二年一月二十五日掲載

今年も節分がめぐって来た。

毎年のことながら節分と云うと、「福は内、鬼は外」と豆まきにはしゃいだ、子供のころを思い出す。

節分に大豆をまいたり鰯を木の枝にさす風習は、今も全国的に行われ、年越鰯と稱してこの日魚屋さんも特に鰯を大量に仕入れて売り歩く。

大豆をまくのは穀物が持っている神秘な力で、邪霊や災厄を防ぐためであり、鰯を挿すのはその匂いで、目に見えぬ邪霊をしりぞけるためだと云われている。

○

今日聞いた話に、安住村上洞附近ではこの日、道の辻でイタドリとウツギの枯枝を集めて燃やし、その火でつゝじの二股になった小枝に、鰯の頭と尾を別々に串刺しにしたものを、

「立聞きする者その耳やくぞ、悪口云う者その口やくぞ、盗人する者その手やくぞ」

と云いながら燻べ、これを本家の入口と、納屋の入口、物置の入口と、各建物の入口の戸袋などに挿すと云う。

つまり鰯の香で邪霊の家に入るのを防ぐ呪術であろうが、川辺町矢田方面では一寸聞かぬ面白い風習である。

―完―

小石を帯に込む噺

「紀州新聞」昭和三十二年二月十四日掲載

尾籠な噺で恐縮だが、この間から矢田村誌民俗篇「迷信」の項を手がけているうち、

戸外で便意を催した時、小石を拾うて帯に込んで置けば便意が止む。

と云う迷信のあることを思い出した。日高地方で広く行われていると見え、「南紀土俗資料」にも収録されて

いる。私どもが子供の頃、遊びに夢中になっているうち、急に便意を催し、子供のことで塵紙の用意はなく家は遠いし、途方に暮れたことが屢々あったが、そんな時には同じ腕白仲間に教えられて、手頃な小石を拾って帯に込んだものだ。

まだその時分、子供達は今のように学童服ではなく、紺飛白の着物に三尺帯だったので、小石はうまく帯に狭まり、小石のおかげか如何かは疑問だが、不思議に便意は止んで、もと通り元気に夕方まで遊び呆けた記憶が残っている。

ところが面白いことに「筑前風土記」に次のような傳説が載っている。

神功皇后が新羅を伐ったとき、筑前国怡土(いと)郡児饗(こふの)野に至って、忽ち産気づかれた。そこでその野の西にある白い石を二個拾われ、御腰に挿み、妊んでいるところの御子が、もし神であれば凱旋の後誕生するよう祈られたが、果たしてその通りであった。

と、

この噺は一方は便意であり、一方は出産であり、少し趣は違うと云えば違うが、何か似通った点があり、日高地方の上記の迷信と、どこかに繋がりのあるような気がする。して見るとこんな下らない迷信も、存外古いものかも知れない。　―　完　―

地名と姓

「新紀州新聞」掲載

土地の呼び名や、人の姓に興味を持ちだして数年になる。例えば川邊町早蘇に、「沖野」と云う小字名があるが、海岸から一里も二里も距てたところを、何故「沖野」と云うのか、その由來を調べ見るのである。

土地の名前でも人の姓でも、もと〳〵人間がつけたものである。従って「沖野」と云うには、それだけの理由が當時はハッキリしていた筈である。然し何分にも古い昔の事であるため、今日では分かっているものより不明なものの方が多い。以下二つ三つ地名と姓の由來を考えて見よう。

☆

沖　野　川辺町早蘇地區の地名

海岸から遠い所だけに、一寸考えると分かり難いが、それは「沖」と云う漢字に引っかかるからである。

「オキノ」はもと〳〵「オクノ」である。即ち「奥の野」と云う意味で、「オクノ」とよばれていた。それが訛って「オキノ」となり、遂に「沖」の字を宛てたため分かり難くなった。

名屋 ═ 御坊市内の地名

魚や野菜を古くは「ナ」とよんだ。今でも祭りの鮨に用うる魚を鮨し魚(な)と云うている。即ち「ナヤ」は魚や野菜を貯蔵した小屋のあった地である。愛知縣の名古屋、九州の名護屋が共に海辺の平野にあるのは同じ理由からである。

紀小竹 ═ 御坊市内の地名

「シノ」は小さく細く叢生した竹のこと。つまり今の御坊にぼつ〳〵人が住みはじめた時分は、あの辺一帯に小竹が生い茂っていた。そこで「シノ」の地と云い、それへ紀の国の紀を取って、「紀小竹」としたが、或は日高川がまだ自由奔放に流れていて、あの附近は日高川の岸辺の野であり、「岸の野」であったのが、「紀小竹」に宛てたのかも知れない。

椿 ═ 御坊市内

ここも日高川のデルタ地帯で人が住みついた頃は、椿の木なども多かったためであろう。古い御坊のことを記した文献に、もとは椿原と云うた事が出ている。

☆

今度は人の姓に移ろう

宇恵 ═ 日高町志賀にある姓

一寸難しい字を宛てゝいるので迷うが、簡単に「上」と解してよかろう。つまりその家の位置が部落の小高い岡の上にあったからであろう。今でも農山村では上の段とか、下の段とか云う處がある。川辺町小熊には「中」と云う家もある。これも部落の中央にあるためつけられたのであろう。

貝野 ═ 中津村田尻にある姓

中津村田尻は、海岸から数里の地である。それに「貝野」はおかしいと思われるが、これも字に捉はれるからである。本来は「狭野」であろう。つまり山の中の狭い野にある家だから、「カイノ」と姓として、貝の字を宛てたのである。

世耕 ═ 東牟婁郡

本縣出身代議士で、世耕耕一と云へば誰にも馴染みの深い姓だが、これも字に捉はれて分かり難い。「世

耕」は狭処(せこ)である。山と山との狭い地、つまり谷(せこ)である。今でも「たにのせこ」と云う言葉がよく使われる。世耕代議士の生家も、恐らくそうした山の谷にあったのではないかと想像する。

以上のように普段何気なしによんでいる地名や姓も、注意して見ると面白いものである。読者各位も気をつけて心づいた事を教えて貰いたい。

昭三一・一〇・八　夜稿

王子跡と徳本上人遺跡巡り

「紀州新聞」昭和三十二年三月三十日四月一・二日掲載

春は雨の多い季節である。数日前から天候を案じていたが、幸いに三月二十一日は温かい彼岸日和で、さながら本史跡顕彰会の前途を祝福しているかのようであった。

七時二十分南海バス本社へ駈け付けると、既に芝口常楠・田端憲之助・高尾英吉・山中三郎氏の姿が見え、三上三樹雄・田辺健蔵・薗徳之助の三氏も新たに参加されて私達を喜ばした。バスが内原駅前につくと、ここに古川成美・中田宇南・深見八代雄・小山民蔵・高野光男・宮所常楠の諸氏の待期せられるあり、総勢十四名車内は急に賑やかになった。

七時五十分終点原谷奥でバスを降りる。春とは云え谷風が冷たい。一行は旧道を辿りながら、沓掛王子跡に向かう。狭い谷中を流れる原谷川の岸辺や道路の傍、山の裾と到る処、此処の特産黒竹が植えられ、家々の庭に刈り束ねた黒竹が置かれている。

私は不用意にも黒竹栽培の沿革を聞き漏らしたが、恐らくそう古いものではなく、多分大正初年か明治末年を、餘り遡らなのではないかと推測する。この黒竹は手提袋の口や日用家具として国内で使用される外、遠く海を渡り、英米佛の太公望に愛用されるという。

道の傍に一基の碑があり、「法華経塚遺跡」「鹿ヶ瀬峠にあり。是より二十五町」の文字が見られる。即ち「元亨釈書」に載る釈円善の奇怪な物語に因んで近年建てられたものである。

○

私達は程なく沓掛王子趾と傳えられる地に着いた。

ここは明治十年(一八七七年)当村皇太神社に合祀されるまで、披喜弁天社の祀れていた所で、合祀後社地は村人に払下げ

られ、一旦宅地となった。その後所有者某は、神社趾の汚すのを恐れ、家を他に移し畑とし、側の木の根元に小祠を祀った。今はその樹木も生い茂り、境内に

沓掛王子　後鳥羽院
　　御幸聖蹟

の石標さえ建てられ、やゝ荒廃の色は見えるが、すっかり神社らしくなっている。従来「紀伊続風土記」の

鍵掛王子社・方四尺五寸・境内周四町・山口にあり・境内に弁天社・長床あり・弁天社に慶長十五年（一六一〇年）の棟札あり・御幸記にししのせやまを超え・沓掛王子に参るとあるはこれ**詐**なるべし。

とあるのを初めとし、「紀伊名勝図会」も、「日高郡誌」も、すべて此処を沓掛王子趾なりとしていた。

ところが建仁（一二〇一年）御幸記には、鳥羽院の一行は沓掛王子に参詣後、昼食の御所で休息されて居り、しかもその昼食の御所はこの上手に当たる小字名御所谷であるという。して見ると後鳥羽院の一行はこゝに奉幣の後また鹿ヶ瀬峠の方へ逆戻りしたことになるが、そう云うことは到底考え得られない。然らば真の沓掛王子趾は何処か？。この点について昭和四・五年（一九二九・三〇年）の頃、芝口常楠氏が苦心調査して漸くその地をつきとめられた。私達は此処を辞して、再び芝口氏発見の王子趾へと向かった。

○

谷は益々狭い、時々老鶯が何処かで啼いている。私達は谷の中央を流れる原谷川の流れに沿うて何時か、金魚の茶屋に出た。まだ津木廻りの新道が開けず、汽車も汽船もなかった時代、長い間この街道が南紀熊野方面と、京・大阪を結ぶ、唯一の主要道路であり、法皇・上皇の御幸路でもあった。将軍も大名も、武士も町民も、歌人も俳人も此処を通ったのであり、此処を行き交う程の人は、必ず茶屋に腰を降ろし、しばし旅の疲れを癒したものである。「紀伊名勝図会」の挿絵を見ると、拾数人の旅人が、何れも脚絆、草鞋姿に身も軽く、茶屋の表を目的地に急いでおり、その中の一人は、山から引いた懸樋の水で手を洗っている。

何時の頃からであったか、茶屋ではこの水を利用して堀を作り、多くの金魚を放って旅人の目を慰めた。金魚の茶店の名は、これより起こると云う。既にその堀も金魚も跡形もないが、、懸樋の水は「名勝図会」の昔と変わらず、清冽な山の水を滴々と注いでいる。

交通の開けた現代、流石の古道も寂れて行きかう人もないが、茶屋だった家の構えはどっしりと大きく、宿場茶屋としての特殊の構造を今も遺し、道を距てた山際の二本の老松は、ありし日を語り顔に聳えている。

○

芝口氏発見の沓掛王子趾は、金魚茶屋金崎氏邸から、なお数町上手の路傍にあり、すっかり畑地となって、案内なしでは容易に知ることはできない。

こゝは鹿ヶ瀬山麓の王子谷の山の尾に当り、御所谷の名が昼食御所の旧趾を傳えていると同じく、地名王子谷は沓掛王子の存在を何より雄弁に証明するのみならず、明治十年（一八七七年）一月前記弁才天社と共に、皇太神社に合祀されるまで、此処に小祠があり、祭日には「鍵掛王子権現」の幟を立てたものという。して見ると現代弁才天社跡に建てられている王子趾の碑は、むしろこの地に移すべきではないかと思われる。

またこの王子趾と田一枚を距てゝ、数十年前まで法華堂があり、有田郡広川町養源寺に属していた。後法華堂は退轉したが、境内にあった数基の板碑が、今も路傍の樹陰に訪う人もなく草に埋れている。何れも碑面が摩滅しているが、南無妙法蓮華経の題目と、永享八年六月十九日（一四三六年）、嘉吉二年八月十五日（一四四二年）、寛正二年（一四六〇年）の年号が読まれ、最も新しいものには元禄の文字があり、共に五百余の星霜を経ている。

私達が板碑の文字を読み、寸法を測ってる間に、中田宇南・山中不艸の兩人は、溪流に浮かぶ椿の花を眺め、しきりに、句想を練っていた。実際この辺りは籔椿が多く、その田舎びた花は私達の目を愉しませた。私達はこゝで小憩後、再びもとの道を引き返したが、途中金崎氏邸前の丘上で、高野氏が矢張り永享の年号を持つ、板碑の破片一基を発見した。

○

道は原谷川の溪流に沿うて、緩い勾配で南へ下る。狭い谷ではあるが川の西岸はよく開けた麦田であり、所々にうすい豌豆が作られ、夏柑畑が交り、その間に裕そうな農家が点在する。陽だまりの畦道には蒲公英（たんぽぽ）や紫雲英（げんげ）が咲き、谷川では早くもハエが群れをなして泳いでいる。

天仁二年十月（一一〇九年）中御門右大臣藤原宗忠が熊野に詣でるとて此処を通ったときは

早朝宿所を発ったが道路には樹木が鬱然と生い繁り、雲が重なって行路が見えない。松明を点じて十町ばかり進むうち火が消えてしまった。この原は八十町ばかりあって林中には大がまがある。

と、中右記にその苦難を記し、宗忠よりおくれること約百年の、建仁元年十月（一二〇一年）藤原定家が、後鳥羽院に従って熊野参詣をした時も

鹿ヶ瀬山を越えて沓掛王子に参った。鹿ヶ瀬を過ぎると椎の大樹が生ひ重なり道は甚だ狭い。云々

とあるが、今は沃田が連なり、民家が建ち並び、まことに今昔の感が深い。

○

馬留王子趾は中々わかり難かった。彼方此方で村人に尋ねたが、誰もはっきり知らぬようであった。小学校の側だとも云い、寺の近くだとも答える者もあった。此処も大正十四・五年（一九二五・六年）の頃芝口氏の調査したところだが、何分にも三十余年の歳月を距て、当時の現状が残っていない。大分さがした末やっと「熊野九十九王子班列、馬留王子社趾」と刻まれた石標を見出した時は、正直のところ一寸ほっとした。こゝは原谷字下岡三百六十二番地に当り、国道から二間ぐらいの高さの地点で、夏柑畑と化し、王子社のありしことは、記念碑の外には何処にも偲ぶことはできぬ。

私達はここを辞して直ぐ南隣の光明寺を訪れ、本堂の縁側や境内で弁当を開いた。早春の陽が燦々とそそいで温かい。寺の奥さんが曽って芝口氏の教え子であったとかで、いそいそとお茶を運んでくれた。

食事がすんで本堂を拝観する。内陣の一部に釈迦、不動、毘沙門の三尊がまつられているが、これは往昔当村にあった福正寺（今小字名に残る）が廃滅のとき移されたものと云い、落剥損傷が著しいがその様式から見て、鎌倉或はそれ以前に遡るのではないかと、古川成美氏の説である。

当寺は寛正六年（一四六五年）明秀高雲の開基に係り、宝暦二年（一七五二年）火災のため古記録を失ったというが、境内に五輪塔などもあり、曽ては真言宗であったのかも知れぬ。

○

私達は小憩の後山を下り、原谷川を越えて内の畑王子趾に向い、途中今熊野神社に詣でた。セメント造りの階段が高く、山の中腹に続いている、誰かが数えて百八段と云うのが聞かれた。寛永三年（一六二六年）の勧請に係り、伊弉諾尊を祀るという。狭い境内で一息入れていると、中年の農夫風の男が来て、樹の間越しに彼処が鞍多和城趾と指さした。大永二年秋（一五二二年）阿波の三好義長は、畠山氏の虚に乗じて俄に兵を由良に上げるや、畠山の家臣崎山飛弾守家正は、急拠ここに城塞を築き将軍応戦の地と伝えられる。彼の男の指すところ、神社の真向いの山頂がなる程城塞の跡らしく平坦になり、それに連なる山嶺の一部がその名、鞍の如く低くなっている。此処で国語に明るい田端憲之助氏は、鞍が多和の「たわ」について説明があり、中田・古川両氏が熱心に傾聴していた。

小高い今熊野神社の境内から、向の山裾にかなり広くユーカリの植栽されているのが望まれる。私達が子供の頃聞いた〝原柿〟は何処にも見えぬ。時と共に産物も変わって行くのであろう。

内の畑王子趾は今熊野神社の、南一町ばかりの山麓にある。明治四十一年（一九〇八年）七月六日、同社が王子神社に合祀

後私有地となり、社殿のあとは今も笹原として殘り、鳥居と長床のあった処は田となっている。三上氏が頻りに社趾をカメラに収めていた。

此処はもう原八十町と云われる細長い原谷の口に近く、内の畑とよぶ処で、人家は現代の国道筋から離れ、原谷川の西岸に散在する。古く熊野街道は原谷川の西岸を通じていたと云われるが、地形から見ても肯ける。

○

一行は谷川の西岸を高家王子へ向かったが、、田端・山中・古川三氏と私は国道筋に引き返して南に下った。この道筋にあるという「かげり原」の句碑を見るためであった。

碑はすぐわかった。安楽寺の北一丁程の国道から一、二間高い草群の中にあって、道路からでも一目で知れる。

高三尺ばかりの自然石の碑面に

虫の声もつゞまるや日はかげりばら

と刻し、碑陰に

地錦庵豊萩墳

天保八（一八三七）年十一月二十九日

行年八十五才

門弟中建之

の文字が読まれる。豊萩は萩原の人、姓を崎山称したが俗名は明らかでない。俳諧を好み松尾塊亭に師事し、風交広かったが、雅遊のため生業にうとく、家遣振るわずその伝すら不明で、僅かに「はいかい旅の扇」一篇を傳うるのみと云う。

○

やっと長い原谷が尽きた四人が高家王子の境内で休憩していると、やゝおくれて一行が追いついた。神社では折から祈年祭が執行されていた。この神社は原谷川と池田川が合流する三角点の中島にあり、汽車の窓からは何時も境内に聳立する枝振のよい松を眺めているが、参詣するのは初めてである。

権亮維盛は蕪坂を打下り、鹿ヶ瀬山を越過て高家王子を伏拝み、日数漸く経るなほに千里の浜も近けり昔読んだ「源平盛衰記」の一説が思い出され、遂には那智の海に投じた維盛卿も、曽てはこの宮に旅の安全を祈願しながら熊野に急いだかと、そぞろに寿永・元暦の昔が偲ばれる。しかも本社は維盛の熊野落に先だつ八

十年、「中右記」中、既にその名があり、九十九王子社中でも由緒深き宮と知られる。

○

国道から離れ、山裾に沿うた細い野径を萩原に入る。白馬山脈の屋根に連る小丘陵で、日高平野の西南部一帯が一眸に入る、「御幸記」に

又野を過ぐ、萩、薄が遙かに靡いて眺望甚だ幽

とあるが七百年前のこの道は、まだ未開の地が多く、萩や薄の生い茂る中を一筋の野道が遠く通じていたであろう。

やゝ進むと道の右手の山際に大きな池の堤が見える。寛政三年秋十月(一七九一年)千津川落合谷における足かけ六ヵ年の荒行を終えた徳本上人が、別れを惜しむ村民達を後に、飄然草庵を構え遊行念仏した地である。明治四十二(一九〇九年)、三年の頃もと紀南新聞主筆であった堅田三千雄氏が、しばらく上人の草庵跡に住んだことがあり、当時寺を追懐した「萩原の草庵」一文を遺しているが、その一節に曰く、

余曽て明治四十二・三年のころ、東内原村あり、農村のこととて人家少なく、俄に外来の我等四人の家族を容れる空家なし。しばらく上人が苦行をつんだという、所謂萩原の草庵が久しく無住で空いていた。即ち我等四人の親子はここにいた。人里から離れる数町の山腹の池のほとりで、日高平野を一望に集めるところ。心自ら静か、しかも一室には佛陀の尊像昔のまま黒い光を放ち、一枚の縄床まだ昔のままであって、時々これに坐して鉦鼓をたたいて、念佛の真似をしてみたこともあった。この静寂な仮寓は一入我等にこの上なき喜びを与えたものであった。晨には凍るばかりの池水を汲んで口を漱ぎ、朝露につゝまれた人里を観みつゝ、後の山で薪を拾うという有様で、徳本苦行の真似をした。「紫扉暁に出づれば霜雪の如し、妻は池水を汲み我は薪を拾う」の生活であった。百四十年をへだてて、徳本と同じ水を飲み、同じ庵に露をしのいだ。其の時からいつも主人徳本が、何処かにいるような気持ち、さながらその人に会い、その人に接しているような気持ちがした。

その後この草庵も廃退して幾らか残っていた遺物は、同村安楽寺に移されたと聞いたが、この日はあたかも彼岸の中日で、安楽寺では彼岸会が営まれて、遺物を拝観できなかったのは遺憾であった。また草庵をすぐ右手に仰ぎながら、時間の都合でその地に臨んで上人苦行の昔を偲び得なかったのも残念であった。然し偶然お会いした鵜上豊楠氏に訊ねると、池畔には名号碑が建てられ、今もなお上人御修行を記念しているという。

○

次いで私達は田藤次王子に詣でた。祠は湯川町大字富安字宮の前一三四五番地にある。富安川の西岸にあたり、後に小山を負い後に鬱蒼たる樹立に囲まれて昼なお小暗い感じがする。この社は富安王子とも善童子とも出童子、出王子とも称し、「中右記」には連同持王子とある。蓋し神佛習合から生じた名稱で、善童子が本義ならんかとは田端憲之助氏の説である。

古記によると古は大社で、湯川家の盛事社領一町六反九畝を寄進せられたが、太閤南征の際没収せられ、また九月九日祭礼のときは、熊野往還筋で十五・六頭の馬が賑やかに競馬をしたものと云う。その後明治四十二年（一九〇九年）九月二十日、湯川神社に合祀されたのであるが、産土神を慕う村人は、何時かこゝに小祠らしいものを設けている。

○

こゝから愛徳山王子趾は近い、たしか夏柑畑の中に、小石を並べて碑を立てていたと云うが、何処も彼処も同じような夏柑畑で、王子趾らしいところは見当たらない。芝口氏が此処を踏査されたのは大正末年（一九二五年）で、最早三十余年の昔である。分かり難いのも無理はない。私達は野道の間や蜜柑畑の中を尋ねあぐんだ末、やっと尋ねあてた。

細い野道から数十歩の畑中に、成程 小さな石を囲み中央に高さ三尺ばかりの碑を立て「愛徳山神社跡地、明治四十一年九月」の文字が見られた。ところがこの碑を見た高尾英吉氏は、どうも「和歌山縣聖蹟」所載のものと違うようだと云い出したが（後、高尾氏の記憶違いと分かった）、先ずここに間違いあるまいということになった。

二、三年前田辺市の俳句結社「花蜜柑」の同人の一行が、王子巡りをした時も、この王子趾を見出すのに随分苦労したと聞いたが、さもあらんと思われた。

次いで桑間王子趾を訪ねる。小松原から道成寺に到る街道の側の、八幡山の麓にある。もとは山裾の今、畑となっている地にあったというが、明治末年神社合祀後、再び里人の祀ったものである。

私達は社前の狭い芝生で少憩した。今朝八時頃から歩き通してやゝ疲れを覚えた。時刻も四時を廻っている。これから法林寺に湯川直光の墓碑を弔う予定であったが、、既に時間もおそいので、真直に往生寺に向かった。天候が急変して、激しく吹きまくる北風が疲れた身に寒い。

○

往生寺では予て依頼しておいた事とて、時刻がおそいにもかかわらず、私達を心待ちにしていてくれ、住職

森川斉 訃師は、病後の不自由な体を推して私達を、徳本上人の師大円和尚の墓前に案内してくれた。大円和尚の墓碑は本堂の西の墓地の中に、歴代住職の墓と一緒に静かに睡っている。

師は日高町小浦の人、往生寺第七世として衰微していた寺門の興隆につくし、本堂を再建したが一般には徳本の師として知られている。和歌をよくし、後年徳本が多くの和歌を遺されたのも、一つは師の影響によるものと思われる。天明六年（一七八六年）四月八日寂。

さて墓地から引き返した私達は、本堂の壁に徳本上人御一代の絵のかけられているのを見出したが、これは今日拝観することになっている寺傳の御一代絵巻とは違い、絵も新しく筆使いも達者で素人離れがしており、第一絵巻物の体裁ではない。斉 訃師の説明によると当寺の縁辺の人で、画を学び、大阪に住む某という人が、寺伝の絵巻物を参考とし、行者伝によって描いたものという。この人は今劇場の衣裳や舞台装置の時代考証をしている由で、一種の風俗画としても興味が深い。

私達はやがて座敷に通されて、上人御一代絵巻を拝観した。絵巻は上下二巻にわかれ、上巻に十四図、下巻に十二図あり、各図の順位は大体年代順に上人御一代の順位を描き、絵の空欄に短い詞書が書きこまれている。そして画そのものは決して上手ではなく、むしろ稚拙に近いが、それだけにまた一種独特の味いがあり、一介の念仏行者として終始した上人の御一代を傳えるには、まことにふさわしいものである。殊に上人の最も忠実なる御弟子であった、有田郡須ヵ谷の森下栄助が、大きな弁当を首にかけ草履脚絆で、長い塔婆をかついで、上人のお供をしている処など、栄助の実直な人柄がそのまま写し出されていて、自ら微笑の浮かぶのを禁じ得ない。筆者は当山第十一代霊真と伝えられるが、霊真の事跡を知りたいものである。

私達はこの外に文政元年（一八一八年）秋九月、上人の病俄に篤くなるや、江戸の法弟、本律、本弁から遠く往生寺に寄せた書簡、次いで上人の訃と葬儀の模様を報じた書簡の、巻物仕立にしたものを拝観して寺を辞したのは、もう夜の七時を廻っていた。最後に病後を推して、私達のために御説明の勞を執られた森川斉 訃師の御厚意に、厚く御礼を申し上げる。　―　完　―

（昭和三十二年三月二十六日夜稿）

小池から入山へ

「紀州新聞」昭和三十二年五月十八・十九・二十日掲載

四月二十八日、ラジオの天気予報は気圧の谷の接近を告げ、どんよりした雨雲が低く垂れ込めていた。どう

したものかと迷ったが、とも角バスの停留所まで出掛けた。芝口常楠・三上三樹雄・高野光男の諸氏が揃っており、珍しく平野一良氏の姿も見えた。生憎と天気が悪い上に、二日続きの休日で句会があったり、翌日また短歌会があるとかで、会員の集まりは却ってよくなかった。

九時十分、市役所前からアメリカ村行きのバスに乗る。煙樹浜の松にまじる雑木の新緑が眼にしみる。昨年十一月第一回の史蹟巡礼に久米の岩屋を訪ねた時は、櫨の紅葉の美しかったことが思い出される。和田でバスを降りると、洋傘を持った亀石豊太郎氏が待っておられた。比井街道をぶら〳〵歩いていると、一停留所前で下車された神田耕一郎氏と小山民蔵氏に追いつかれた。一行は八名になった。

○

小池の香華山西福寺は高坪山(西山)の山麓にあり浄土宗鎮西派に属する。「日高郡誌」に由緒不詳とあるが、境内には一石五輪塔などがあり、或は附近に鎮坐した小池王子社の、神宮寺であったのかも知れぬ。

宝暦(一七五一〜六四年)の頃徳本上人がまだ十助と呼ばれた時、月詣りの祈願を籠められた大日堂は、今も本堂の北東の小高い崖の上にある。私達は大日堂の扉を拝して、眼のあたりに大日如来像を拝んだ。畧々等身大の坐像で

刀始永正(一五〇九年)六年己巳十一月十五日

同七年庚午二月九日仝成就云々

の胎内銘があるという。特に光背と蓮坐が美しい。次いで大日如来縁起も拝観した。古傳の縁起が虫鼠の害を受けたので、慶応(一八六五〜六八年)年間写したものだが、これもかなり傷んでいる。

私達は更に大日堂のやゝ上手にある地蔵堂を拝した。住職榎本性音住職の話では、この地蔵尊は、古く和田浦の海中から、漁網にかかって出現したものという。宝永、正徳の頃(一七〇四—一七一五)、和田浦高坪山(西山)山中古屋敷に祀られていたが、後小池の篤信家寺田某が、小池領の山上に小庵を建てゝ祀り、また明治二十五・六年ごろ現位置に移し、一般に「タカツボサン」と呼ばれていることが、和田喜久男氏の「和田村小字名考」にある。地蔵堂は方二間位、お堂の格子簾子に夥しく小さな唐鋤と「ちきり」が奉納され、中には地曳網の「ロクロ」もまじっている。この地蔵尊は夜尿症を治すと信仰され、また漁師は豊漁を祈願するという。多くの奉納者の中に川辺町土生、湯川某の名や、堺市何某の名のあったのには驚いた。夜尿症治癒の信仰が、かなり広範囲に行われていると見える。

各地の小祠や地蔵堂に髪の毛や杓子、草鞋を供えて祈願する風はよく見かけるが、唐鋤や「ちきり」を奉納するのは珍しい。然も奉納している唐鋤は頗る巧妙に作られ、その型式も古い日本在来型のものから、新式の

「ハイカラ唐鋤」と、奉納年代とともに移り変わっているのも面白い。

私達は扉を拝してうす暗い堂内に入り、地蔵尊を拝んだ。地蔵尊は高さ約二尺五寸、厚さ五寸位の扁平な和泉砂岩に、浮彫にされ、長く古屋敷の山中で風雨にさらされたため、大分摩耗しているが優しい御姿をしている。

私達は西福寺を辞して俗に和田ぶけと呼ばれる低い田圃の中の路を入山に向かった。雨は傘をさす程でもない。日高平野の西北寄りの、打ち続く広い麦田の中に、ぽっかり浮んでいる入山の姿は、あたかも太洋中の小島を思わせる。

実際話は幾万年か昔の地質時代に入るが、日高平野がまだ入江で、日高町あたりまで浪が打寄せていた頃は、入山はきっと海中の小島であったに相違ない。時代が下って日高平野にぼつ〳〵人類が住みついた頃になっても、自由奔放に流れる日高川の水と、鹿ヶ瀬山中に発した西川の水が、この附近で合流して、長くデルタ地帯であったのではないかと想像される。今もこの地帯に殘る椎崎や岩崎の地名を聞くごとに、どうも海や嶋の匂いが感じられてならぬ。

私達は以前巽三郎氏と共に、調査に来たという高野光男氏の案内で、先ず「女郎の墓」に詣でた。碑は字観音寺の山の半腹にあり、総高一尺五寸五分の一石五輪塔で、外に二寸ばかりの逆蓮の台坐がある。一見したところでは、天正三年（一五七五年）の記年を辛うじて読み得る外は明らかでないが、拓本にとると、

天正三年乙亥
五妙〇〇〇尼
四月五日

とある由。天正三年は今を距てる三百八十餘年の昔にあたり、尼とあるからには女性の碑に違いないが、入山城主青木氏の女の墓はと傳えられる外、分からない。何れにしても女郎の墓の名に相応しく如何にも女性的な、つつましやかな墓碑である。

なお、この近くの字立花には、女郎橋と呼ばれる橋もある。入山城の奥方や姫君が折々に、この橋の畔を散策されたことか。即ち女郎とは遊女の謂いではなく、高貴の女性の意であろう。女郎橋の附近を流れる西川は、かなり川幅も広く流れも緩やかである。美しく粧いした姫君を写した水は、今も昔も変わらぬが、彼女たちの居城も舘も、徒らに夏草の生い茂るにまかせ、既にその名さえ知る人はない。また女郎の墓の側に方二間程の小堂があり、土地では観音堂と云われているが、私達が拝したところでは、高さ一尺七・八寸の石地蔵であって、観音像ではなかったようだ。

○

私達は女郎の墓の側の山路を「入山城趾」の方へ登った。細い路の両側には真赤なつつじや、白い粉米のようなカマツカが咲き乱れていた。やがて山の鞍部へ出たが、そこからは路は愈々細くなっていて、雑木の茂みが深くなる。卅年ばかり前芝口常楠氏が此処を踏査された頃は、一帯の笹原であったというが、、茂るにまかせた雑木や竹は身の丈を没し、上着やズボンを茨に引っかけながら、樫や松の木につかまりつゝ辛うじて進む。処々に空壕の跡や。土塁に使ったらしい石を見かける。塁の周囲の斜面はかなり嶮しい。じっとり汗が滲んで来た。「続風土記」に、方廿五間とある城趾も深い樹立に遮られて、さっぱり展望がきかぬ。やっと陸地測量部の三角点の位置に出た。海抜八十一米である。

入山城を青木勘兵衛の居城とするのは、「日高鑑」・「郡主旧記」・「太田城水責記」・「紀伊続風土記」・「紀伊名勝図会」の等しく一致する処であるが、ひとり「日高郡誌」は強くこれを否定している。即ち青木勘兵衛は秀吉南征軍の一部将であるが、湯川氏の本拠亀山城と目と鼻の入山に、湯川氏の敵手たる青木氏が城を構える筈はなく、所詮湯川一族の居城でなければならぬと云うのである。

果たして湯川一族の城であったか、或は青木勘兵衛のそれか、遺憾ながら私の手許には、これを判断する資料をもたぬ。それにしても、もし湯川氏の支城とすれば、「日高鑑」の

青木勘兵衛段ト申仁居被申候九十年以前ぼつらく

とあるのが解せぬ。云うまでもなく「日高鑑」は郡内大左出帳の集成したようなもので、一個人の思いつきや、気まぐれの記述ではない。斯様に書き上げるには、相当の根拠があってのことに違いない。然もわづか九十年以前に没落した城主の名を取り違えるとは思えぬ。よって私は極めて常識的な考えであるが、入山城はもともと湯川氏の衛星的な城塞であった。たま〳〵天正十三年（一五八五年）秀吉の来攻で湯川氏が敗走するや、南征軍の一部将たりし青木勘兵衛が、此処に拠って、しばらく湯川残党の動静を監視したのではあるまいか。かく解すれば「日高鑑」の九十年以前没落とあるのと、略々年代にも符合してくるのではあるが？。私達はしばらく城趾の茂みに佇んで、強者共の夢の跡には、今滴るばかりの若葉が萌えている。

三宝寺は入山城趾の南丸を一、二町、字久保谷の山腹にある。寺の歴史はそう古いという程ではない。寺傳によれば、文明年中（西一四六九～一四八六）本願寺第八世蓮如上人が、高家西の道場で法を説くや、この地の三郎二郎なるものが帰依して名を心西と改め、字北裏に道場を創建し、俗体のまゝ相続した。後何時の頃か現位置に移り、更に承応三年十月二十三日（西一六五四年）御坊村西円寺（今の本願寺別院）第四世 **訝**賢が、この道

場を譲りうけ長子正元を居らしめた。許賢が道場を譲りうけた際の古文書は、今も寺宝として伝えられている。

時刻はちょうど正午に近かった。私達は明治十七年（一八八四年）再建という総欅造り五間四面の本堂に上がって弁当を開いた。手入れが行き届いているので、七十四年前の建築とは思えぬ。今ならどれ程経費をかけても、これだれの寺を建てることは難しかろう。

私達がお伺いするので、わざ〳〵仏事の席を早めに切りあげて皈られた、住職湯川宏徴師は、香りの高いお茶をいれながら、色々と寺の歴史を語られ、秘蔵の湯川直春の文書を示された。文書の内容は、「日高郡誌」古文書誌所収の通り、湯川氏と本願寺との並々ならぬ関係を物語るものであるが、私は文書の終りに書かれた直春の署名と、花押に強く心を惹かれた。鮮やかな墨痕と見事な筆跡である。時勢の赴くところ時に利あらず、潮の如き豊臣南征軍の前に、もろくも潰えたが、この文字を見ると、彼は決して凡庸なる一介の武弁ではなかったような気がする。

なおこの文書の伝承に就いては「日高郡誌」に「祖先傳来のものにあずして、他より転来するものとす」とあるが、宏徴氏の説によると、当寺の姻戚たる和歌山市旅籠町本弘寺の学僧小山憲栄師が、曽て本願寺勧学たりし日、本願寺より得て当寺に贈られたものと云う。

私達は更に本堂内陣の壁間にかけられた、筆者不詳の湯川直光の肖像画を見た。頭髪を短く五分刈りのようにして、袈裟衣を纏っているが、腰間に大小を挿し、精悍の気眉宇にみなぎる。今御坊別院所蔵の直光像はこれを模写したものという。話は中々尽きぬ。見るべきものもまだ〳〵多いが、私達は先を急がねばならぬ。

○

私達は三宝寺を出て、山路傳いに津村慎吾氏の宅を訪ねた。津村氏の家は名家である。家の所在するところが旧御坊志賀街道の峠にあたるので、峠の屋号で知られている。本家の軒に架った銅製の樋は、真青な錆をふき頗る大型で厚手である。軒の巴瓦も普通の家のものより一回り大きい。

家の裏手の畑の隅に、入山城本丸趾から運んだという石の流しがある。三尺に二尺位の礫岩で作ったもので、普通家庭のものと余り変わりはない。その他同じ本丸趾から移した井戸の囲石らしいものも二、三枚あった。このほか同家には、藩政時代の入山村の古記録も多数あると聞いたが、後日あらためて拝見することにした。

○

私達は次に津村家から二、三町南西にある入山城本丸趾と傳える地を見た。雑木と太い竹の茂った中をかわきわけて歩むと、かなり広い平坦な地に出た。さきに津村氏邸で見た流しや井戸囲いは、この辺りに放置されて

いたものであり、巽三郎氏と、高野光男氏は二、三年前、桃山時代かと思われる瓦を掘り出した地でもある。

かなりの面積を持つ住居趾と思われるが、樹立のためその規模ははっきりしない。これについて「日高鑑」は、四国の三好氏の居城趾とし、里人は入山城本丸趾と傳えている。しかし当時日高の湯川氏と四国の三好氏は宿敵の間柄であったから、湯川氏の本拠丸山城の近くに三好氏の居城があったというのはどう考えても腑に落ちぬ。

またこの地の一隅に、俗に、「おもんどさま」と呼ばれる箇所がある。もとは周り十六、七間、径四間、高さ二間程の古墳状のものであったが、今は一部が破壊されて小さくなっている。古来これに触れると祟りがあると恐れられていたが、或る勇敢な男が掘ったところ、失明した事実もあるといわれる。その形状から見て矢張り古墳、或は経塚かも知れぬ。

私達は籔の中彼方、此方と瓦片でも見当らぬかとさがしたが、一片も見かけぬまゝ、旧入山王子神社跡の、嶮しい崖を下った。入山の土豪塩崎氏の邸跡が、やゝ北の方の田圃の中に眺められた。

朝からどんよりした空模様は、相変らずうっとおしい。塩崎橋近くで解散したのは午後四時頃であった。（完）

昭和三二・五・一〇夜稿

塩屋　野島紀行

「紀州新聞」昭和三十二年六月十六・十七・十八日掲載

ありふれた感懐だが月日のたつのは早い。昨年十二月誕生した南紀史跡顕彰会も、今日六月二日で第四回目の史跡探訪になる。二、三日前紀州新聞社を通じて、美浜町浜の瀬の一青年から同行の申出があり、日高高等学校歴史班も、電話をもって入会届をしてきた。ひょっとすると、今日はかなり大勢の参加があるかも知れぬと、定刻八時半前に、集合地天田橋東詰の広場へ出かけた。芝口常楠氏が待っておられた。

この辺りは大正初年（一九一二年頃）ころまで、一帯に寂しい竹籔で、その間にぽつん〳〵と木賃宿や瓦屋が点在していたと記憶する。その後昭和に入って、にわかに中紀製材をはじめ幾つかの製材所や工場が立ち並び、一時は御坊市の新工業地帯に発展するかに見えたが、昭和二十八年（一九五三年）の水害で土地ぐるみ流失し、今はその旧観さえ想像するさえ困難である。

○

私と芝口氏はこの広場の南方数町の所に起伏する、なだらかな狼煙山を眺めた。狼煙山は別に蟹田山とも云い、海抜わずか五〇米余にすぎぬが、日高河口を扼し、日高湾の東南に臨む要害の地である。物情騒然たる幕末の頃は、この山頂で狼煙を焚いて、黒船来るの危急を報じた。つまり当時の紀州沿岸防備の触角であったのだ。またこの山には、もと古墳があったと覚しく、今も山腹の開墾畑に、土器片の散乱するのを見かける。

○

とかくするうちに高野光男、井原武、神田耕一郎、亀石豊太郎、高尾英吉の諸氏が揃った。私達はここから程近い河南中学校の北西、県道御坊―川中線の傍にある原要助の碑を訪ねた。

原要助は三百瀬の人、一に用助もつくる。和佐手取城主玉置氏に仕え武芸に秀でたが、傍輩の妬みを受け天田胡瓜坂で害された。一説には、元亀二年(一五七一)、湯川勢が田辺、牟婁の方面を侵略せんと図り、却って目良、愛須等熊野連合軍の逆襲する処となり、塩屋田中に戦い原要助、荊木六郎左右衛等を亡うと(南紀古士傳、紀伊国戦国列傳、その他)。今塩屋町森岡に由来不明の宝篋印塔あり、或はこの碑と同じころ建立した荊木氏の供養塔にあらざるかと云われる。

碑は総高六、七尺に及ぶ大きなものであるが、四百年近い星霜を経て処々に亀裂を生じたのをセメントで補修している。碑銘も甚だ明瞭を欠くが、先年芝口常楠氏が苦心判読した所によると、

慶長戊戌(一九八年)十二月
孝子舎弟玉置九左右衛門
天機養勇
孝子舎弟玉置九右衛門
俗名原用助

と読まれたという。天機養勇は、原要助の法号、慶長戊戌即ち慶長二年(一五九八)その子玉置九左右衛門、九右衛門兄弟相よって、父の供養のため建立したことを示す。

今碑のある辺りはもと胡瓜坂と称し、小さな峠で峠権現社が祀られ、碑はその境内に建てられていた。後権現社が合祀され、碑のみ山上に残されていたが、近年近くに河南中学校が設立され、また道路の改修で峠が削り取られたため、現位置に移された。

○

私達は更に近くの極楽寺を訪ねた。浄土宗鎮西派に属し、同地の旧家中村氏の祖孫次郎信次剃髪して秀仙と

号し、父の菩提のため天正年間（一五七三―一五九一）小庵を創建したのを濫觴とする。本尊阿彌陀如来座像が多く見る結跏趺坐でなく、日本流にきちっと両膝を揃えていられるのが珍しく感じられる。

次いで境内薬師堂の扉を排して、薬師如来を拝む。先年京都大学美学部飯島勉教授来寺の際、彌陀・薬師ともに室町時代の作であろうと語られた由。当寺の檀徒総代の一人である高尾英吉氏の説明によれば、薬師堂はもと藤田町藤井、専念寺境内にあったが、明治十五年（一八八二年）頃價額十五円で買受けここに移したという。

○

極楽寺を辞した一行は、寺の前の細い田圃中の道を、谷傳いに北塩屋本村の方へ歩いているうち、天田火葬場に出た。ここは小さな台地状をなし、前記極楽寺の開祖秀仙の祖中村氏が、鍋倉氏を称した永正年間（一五〇四―一五二〇）能舞台を設け、後赤坂氏（今御坊市西町在住）が邸宅を営んだ地であり、何時のころか火葬場となったが、里人は今でも赤坂屋敷と呼んでいる。

私達は長い谷中の小径を辿っているうちに、北塩屋の聚落の裏通りに出た。狼煙山から連なる低い山裾を半周したことになる。道幅は三、四尺ばかりで、道は建ちならんだ人家の間を縫うように続いている。古い熊野街道の一部である。道路の右手思いがけぬ所に広場があって、小さな薬師堂がある。固く扉を閉し薄暗い堂内に燈明が一つぽつんと点っているのみで、御尊像は拝すべくもない。堂の軒下に五輪塔が五、六個集められていた。或は程近い円満寺が、もと真言宗であったと云うから、その時代のものかも知れぬ。

○

円満寺では境内墓地の一隅にある高野忠右衛門翁の墓碑が私の心を捉えた。碑面に「義侠高野忠右衛門碑」の九文字を刻し、側面に

身はここに露ときえても行末の　こころにかかる袖の村雨

と辞世の一首が彫られている。翁は北鹽屋に生まれ四十余年に亘り塩屋浦漁業組合長をつとめた。晩年浜ノ瀬浦と漁場境界の紛争が起り、寝食を忘れてその解決に挺身したが、事、志と違い当時の村長松永公一の背信によりその主張敗れるや、一日円満寺に区民大会を召集して事件の経過を報告後、壮烈な自決を遂げた。時に明治四十年（一九〇七年）一月二十四日、来年はあたかも五十年忌に当たるという。何れにしても鹽屋漁民には忘れることのできぬ恩人であるのみならず、日高人にもっと知られてよい人である。翁については同村鹽路吉太郎氏に詳しい研究があるが、他日稿を改めてその詳細を傳えたい。

○

塩屋王子神社の仁井田好古の「塩屋王子祠前碑」の前に、山田四郎氏と、はるゞ印南から参加した中田宇南、小谷緑草両氏が待っていた。

塩屋村在日高川之海口昔時煮塩為業因名焉

に始まる碑文は流石に堂々たる名文であり、文字も筆者好古先生の人柄そままの、一畫一点もゆるがせぬ謹厳なものである。数年前の一日南紀郷土学会を、当神社々務所で開催した事を思い出す。また私は昨年十月十五日、高野光男氏と二人でこの碑の拓本をとったことがある。碑は高さ六尺、幅四尺一寸、厚さ五寸、基石は周二間三尺、高さ、一尺五寸に及ぶ巨大なものである。

里傳によれば、碑石、基石共に、鰹島附近の海中にあったものを、天保二年（一八三一）庄屋岡本嘉助が、漁師百余名を動員して、大網でゆわえ漁船数艘でこれを運び奉納したものという。建立後百餘年しかならぬが石質の関係か、風化の痕が著しく、一部文字の磨滅したところや亀裂を来した箇所がある。今のうちに蓋屋でも設けて保護したいものである。

今の松原通りの塩路写真館の先々代塩路権兵衛は要人と称し、鹽屋の人で家業酒醸造業の傍ら神官をつとめた。そうした関係から仁井田好古自筆の、塩屋王子祠前碑の原本を家蔵していたが、七・一八水害で泥土にまみれ、遂に遺棄したと聞いたが惜しまれてならぬ。

○

塩屋王子社は、九十九王子中でも古くから顕れた宮である。鬱蒼たる老樹の下七十二段の石段を上って右手に、

塩屋王子は所謂九十九王子の中最著聞なるものゝ一にして、又美人王子と云う。大同年間（千百卅四年前）魚屋権兵衛塩屋連重辰、始めて製塩業をこの地に拓き、その発展を祈願せんが為周ねく漁民に図り、地を爰に相して社殿を創建し、自ら伊勢神宮の御分霊を勧請せるものと傳えらる。云々。

とその沿革を記した札を立てている。私達は境内の一遇に建てられた後二条内大臣の

思うことくみてかなふる神なれば
塩屋にあとをたるるなりけり
徳大寺左大臣

立ちのぼる塩屋の煙浦風に
靡くを神の心ともがな

の二首を彫ちこんだ歌碑を仰ぎ、熊野行幸の天皇・上皇が幾度か車駕をとどめられ、風光を賞し、時には歌会を催された昔を偲んだ。社前の那耆の一株は新緑の若葉をつけ、樹下には多くの実が落ちていた。私達はその幾つかを拾って社前を辞した。

○

ここから王子川を渡り、塩屋小学校の横を通って、再び畑中の細い道を辿ると、程なく俗に太神宮跡と称する跡に出る。地名の示す如くもと小祠が祀られていたが、合祀後は雑草の生い茂るにまかせていた。処が今次の食糧不足で開墾した際、提瓶を発掘した。或は古墳ではなかろうかと云うのである。

ここは南鹽屋聚落の裏手にあたり、高さ十米位の小砂丘の一端をなし、東は猪野々、中村方面へ連なる水田である。今塩屋小学校の実習地となっているというが、荒廃して夏草が伸びている。私達は山田四郎氏に案内されて、彼方此方歩き廻っているうちに、夥しく貝殻の散乱しているのを見た。また一部に古墳の天井石らしいものの露出しているのも認めた。

然も山田氏の説明によると、貝殻の散乱しているのはこの一廓に限られ、外では見かけないという。はたして古墳か、貝塚か、これは今後の慎重な調査を俟たねば俄に判断できないが、或は貝塚ではないかと思われる節が多分にある。少なくとも古墳であることは殆んど間違いあるまい。もしこれが貝塚であれば、本郡最初のものである。何れにしても甚だ興味のある者である。

○

次いで浄土真宗光専寺に至る。平井野右衛門の碑を訪ねるためであった。庫裏へ廻って来意を告げると、数日前にも紀州新聞で見たとその旨を語られたので、随分捜したが、遂に見出せずに終ったと話された。

墓地はあまり広くない、そんな筈がないがと、古い墓石を一つ一つ調べたが判らない。私が此所に松翁平井野右衛門の墓があり、、墓石に辞世の句が彫られていると知ったのは、故森彦太郎先生の「日高ところどころ」と題する小文集を読んだ時からである。森先生は決して与太を書かれる人ではない。不思議に思ったがどうしても分からなかった。時刻はもう午後一時に近かった。そこで一先ず昼食を摂って、またゆっくり探そうと云うことになり、お茶を買って寺の縁で一同弁当を開いた。

「日高郡誌」によると、本寺も元真言宗で鷲峰山麓にあったが、文明年間（一四六九～八七年）蓮如の教化で真宗となり、元禄十六年（一七〇三年）寺号公称、元文二年十二月一日（一七三七）本堂焼失、安永七年（一七七八）現位置に再建されたものである。それにしても、境内の柏槇の老樹の巨大さに驚かされる。地上五尺のところで幹周一丈八尺、樹高七間、昭和四年（一九二〇年）

二月本県天然記念物に指定されているが、柏槇としては串本町潮岬本ノ宮神宮に次ぐ、県下で第二のものに次ぐ、県下で第二の名木である。やゝ樹勢の衰えるのが惜しい。

私達は食後もう一度墓地を調べた。あった、やはりあった。碑は墓地の北の一隅にあり、高さ一尺四寸ばかり、如何にも俳人の墓石らしい、つゝましやかなものである。表に光寿院釈教観とその法名を刻し、側面に天保十五甲辰五月二十日、さらに別の側面に（一八四四年）

涼しさは裸参りや彌陀の国　　松翁

と辞世の一句がある。松翁俗姓平井野右衞門、風雅を好み、蘭を愛し、或時秘蔵の蘭を藩主に献じ、野呂介石の絵を賜るという。今大阪毎日新聞社在勤の平井忠雄氏の祖にあたる。

○

旧街道をぶらぶらと祓戸に出る。背後になだらかな山を負い、前面は渺々（びょうびょう）たる紀州灘が開け、西に海を隔て四国の島山、東南は切目崎、湯崎を望み眺望絶景である。地名祓戸の名はおそらく此所を旅する古代人が、遙か、煙波の彼方に見る熊野の霊域に対し、神に祈り自然に念じて、祓いの式を挙げたのによるものであろう。

私達はこのあたりで、単車を飛ばして来た巽三郎氏を迎え、一行は十一名になった。畑中に立つ伝説清姫草履塚を見て、囁橋を渡ると壁崎の断崖が海中に突出している。その根元のゆるやかな坂を登ると、万葉集の

わが欲りし野島は見せつ底深き
阿胡根の浦の玉ぞ拾はぬ

の一首で有名な野島に出る。端詞によれば、中皇命が牟婁の湯に行かれた時、御従の一人がこの辺りで詠んだものであるが、古来万葉学者の間で、この野島を淡路の野島としたり、或は沼島または伊島であるとなし、難しい論議が出ている。しかし昭和十一年（一九三六年）版「名田村誌」には

―又後ヶ芝地先に於いて漁夫の「アカネザシ」と称する地点あり、阿胡根の転訛なりという、云々―

と注目すべき記載あり、和田喜久男氏の稿本「野島」にも

そのアカネザシは野島の字後ケ芝（ごけがしば）の地先三十間許で深さ二尋より六尋に及び、面積は横に五十間ばかり、沖へ七、八十間許で浮石（うきいし）と云う岩礁にとまり云々

と同地南隆三氏の調査により、「名田村誌」の記事を確認している。例え万葉学者がどのように説こうと、この地こそ万葉の野島の地であると私達は信じる。

○

さらに私達は畑中に並ぶ十三塚を見て、俗に新首さんと称する二つの古墳を見た。明治初年（一八六八年）村民木下惣市という者が、祈禱者某の告げにより発掘したもので、玄室の広さ間口七尺、奥行八尺、四壁巨石を積み上げ、殆んど原型を遺し、中に石地蔵を祀る。扉を排して玄室に入ると、内部はしっとりと湿気を帯び、千数百年前の昔ここに葬られた墳の主のことが思い出される。

このあたり一帯は実に古墳が多い、彼方の丘、彼方の山腹と至る処にある。名田は今も水田の少ない処である。そうした地にどうしてこれだけ多くの古墳が営まれたのであろうか。彼等を支えた富は何処から得られたのだろうか。こう考えて来る時、それは前面に果てしなく広がる海洋の外にあるまい。つまり彼等は海の豪族であったのだ、とは高野光男氏の力説するところである。

私達はこの古墳の前で記念撮影後、程近い観音寺で小憩して、帰路についた。　（昭三二、六、一一夜）

おちせさんとしまくら草

「紀州新聞」昭和三十二年九月四日掲載

小谷緑草は憎い男であるが、良い男である。何時であったか紀州新聞へ妙な小編を発表して、その中で私がラムネ玉や古い煉瓦のかけらを、曲玉や土器の破片と間違えて石炭箱一杯に集めていると書いた。それを読んだ或る正直な私の先輩は、「君あれは本当かい」とわざ〳〵尋ねられた。こんな風に私に大恥をかゝせ、正直な私の先輩を惑わせたりする処は憎らしいが、「おせちさんとしまくら草」を書いたりする処は優しい良い男である。

この間芝口常楠先生をお訪ねした時、「小谷さんから、むらさきかたばみのことを訊きにきた」と語られたが、私はその時、とっさにハハン緑草近いうちに何か書くなと直感した。と云うのは、その前の史跡顕彰会で野島方面を歩いた時、緑草がそこいら一面に咲いているこの花のことを異常な熱心さで、芝口先生に訊ねていたことを記憶していたかである。

実を云うと私もこの可憐な、然も太々しい「むらさきかたばみ」には、一寸興味を動かして、その傳来等について調べた事がある。殊に緑草も書いているように、その呼び名が土地々々によって種々雑多である点も興味がもたれたが、つい書くのが面倒になって止めてしまった。それを今度緑草が書いてくれたのだから嬉しい。正直に云うと私が書いたのでは中々あんなに旨く書けない。きっとゴタ〳〵した変な文書になったに違いない。

それを緑草はいとも軽妙にユーモラスに然もしみじみとした一文でまとめてくれた。

○

前置きか馬鹿に長くなったが、緑草が書いた以外にまだ幾つかの呼び名がある。主に南部町岩代の尾崎光之助氏に聞いたものだが書いておこう。

「むらさきかたばみ」

南部……タシチ草……南部町田辺屋七郎氏（糸川七郎）の伝来せるによる。

岩代……ずいしょう草……東岩代光明寺先住、三宅瑞昌師伝来による。

田辺……はやま草……田辺市秋津医師羽山氏の名をとる。

川辺町江川……おへや草……川辺町江川西川医師の傳来せるものによる。西川家を里人「お部屋」と尊称した。

美浜町和田……ほんだ草……本田氏、初めてこの花を種苗商から取りよせ栽培したと云う。

猶緑草が書いたウエンジョ草（上城草）のウエンジョは南部の小字名であること、これも尾崎氏から聞いた。

（昭三二・九・二朝記）

宮川早生温州傳来聞書

「紀州新聞」昭和三十二年七月九日掲載

○

○　沖の暗いのに白帆が見える　あれは紀の国蜜柑船

今も宴会で賑やかに歌われるこの俗曲や

○　今度来る時持て来ておくれ　有田蜜柑の枝折りを

○　有田山見りゃ蜜柑が恋し　日高山見りゃ揚梅こいし

と日高地方の俚謡にも遺っている在来の紀州蜜柑は、近頃は殆んど見られない。それと云うのも古来の紀州蜜柑は、風味は優れているが果実が小さく、種が多いので、近代人の嗜好にあわなくなり、明治中頃から次第に種子の少ない温州蜜柑に取って変えられたのである。

○

ところが最近、とくに第二次世界大戦後、急速に栽培が増加し、やがては温州蜜柑の壘に迫ろうとしているものに早生温州がある。まだ在来の温州蜜柑が小僧ッ子のような真青な姿で、固く枝に食っついている九月末、早くも色づいて人々の食欲をそそるところが、せっかちな近代人の嗜好に投じると共に、収量の多い点が栽培家の魅力となり、早生温州急増の原因となった。

昭和二十九年（一九五四年）十一月和歌山県果実農業協同組合連合会発行の「和歌山県の果樹」によると、この早生温州の歴史は新しく、明治二十五年（一八九二年）大分縣津久見市で発見されたのを最初とし、本県に入った径路は明らかでなく、恐らく苗木購入の際混入したらしいとある。

然し一口に早生温州と云うものにも、その種類が多く、比較的知られているものに、大長早生（割合古くからあったが枝変わりし易き缺点あり）、亀井早生（大阪府下亀井家で発見されたもの）等があり、本県で発見されたものにも、井関早生（那賀郡龍門村の元助役井関氏の畑で偶発したもの）と内芝早生の二種がある。

○

このうちで現在本県で最も広く栽培されているのは宮川早生であり、宮川は殆んど早生温州の代名詞の様になってしまったが、これを最初に本県に移入したのは、実に本郡川辺町若野の故小林源楠翁であると云う。少なくとも日高郡に移入したのは小林翁を以て最初とする。

そも〳〵宮川早生と云うのは、昭和初年（一九二四年）ごろ福岡県山門郡（村名を忘れた（城内村））の医師宮川某栽培の温州蜜柑に偶発したものと云われ、それが附近の苗木商某の手で次第に増殖された。たま〳〵当時苗木商を営んでいた小林翁は、如何にしてこれを知ったか、とに角この宮川早生の苗木を、西牟婁郡三栖村の某氏と各五十本宛買入れて、自家の畑に植えこんだ。昭和四、五年（一九二九・三〇年）ごろのことであった。これが今や急速に産額を増加し、近い将来には温州蜜柑の王座をゆさぶろうとしている。宮川早生栽培の濫觴であると云う。

○

（後　記）「矢田村誌」農業篇執筆中、小林健一郎氏に早生温州の旧矢田村に於ける栽培沿革を質して、聞き得たことを、メモ代りに書いて見た。或は誤りなしとは云い切れぬ。識者の御教示を得れば幸いである。

―昭三二・七・七―

衣奈八幡宮と西教寺

「紀州新聞」昭和三十二年七月十五・十六・十七日掲載

衣奈八幡宮

季節外れの梅雨前線が今日も本州附近に停滞して鬱陶しい天気である。そのせいか会員の集まりがよくない。由良駅前に集合したのは、高尾英吉・井原武・宮所恒楠・それに衣奈方面に所要で行くついでに同行を申し出た丸山乙松氏と、今日初めて参加した日高々校二年生の塩崎計一君に私を加えた六名である。

三名ずつ分乗した小型タクシーは、駅前から興国寺横を通り、辷るように峠道を上って行く。昭和五年（一九三〇年）着工、昭和十八年竣工した、長さ三〇六㍍の衣奈トンネルは今改修中である。アセチレン灯をつけて工夫の働いているトンネルを抜け、羊腸たる山脚の道を幾廻りかするうち衣奈八幡宮前に着いた。私達が大きな赤い鳥居を仰いで、境内に入ろうとすると、後から社掌上山義男氏が忙しい中を案内に見えられた。

○

昭和七年（一九三二年）八月二十六日有田郷土巡礼会の人々が此処を訪れたときは、恰も県道の改修中で、境内の巨木老樹が伐り倒され、俗地になったと慨嘆した記事を、つい最近読み返した私は、定めて殺風景な境内かと想像して来たのだが、どうしてどうして、だら〳〵上りの参道は大樹鬱蒼として幽邃極まりない。低く垂れこめた雨雲のせいか、深い木立におおわれた道は、昼なお小暗い。どこかで鳴いている春蝉が妙に心にしみる。やがて私達は石段の前に出た。

「日高郡誌」に「八幡山脚海に迫る所二層百十四段の磴道を作りて云々」と記され

○ 高い高い階段（きだはし）高い、六十二段の階段高い

○ 六十二段の階段よりも衣奈の八幡百二段

○ 衣奈の八幡百二段よりも原の金比羅百七つ

と俚謡にまで謡われた高い石段である。

石磴を上った処に長床があり、正面に拝殿、幣殿、神殿と続く。神殿は流造り檜葺だが、明治二十一年（一八八八年）の暴風に倒潰、明治二十五、六年の再建にかかり、また幣殿、神殿は昭和五年（一九三〇年）の再建で共に新しい。湯浅町の郷土

研究家西尾秀氏はその著「郷土巡礼」中で

社殿は近頃改築されたものだが、神佛混合時代の様式を復古さしすぎたかの感がある。

と評しているが、成程そういえば拝殿の構造、特に屋根の線や蛙股その他の彫刻にも、どこかに寺院の匂いが感じられる。

私達が上山氏から色々説明を聞いているとき、同地の御影文右衛門氏がこの機会に皆と共に絵巻物を拝観したいと一行の中に加わった。

いうまでもなく衣奈八幡宮は、神功皇后が朝鮮征伐から凱旋の途次、反軍の鋭鋒を避けて大引浦に上陸されたとき、土豪登見岩守が若布を献じ宮を造営して迎えまつった地で、今も社殿の傍大蘇鉄に近く、皇子が敷かせられたと伝うる瑞石がある。またこの地はもと石清水八幡宮の神領であったから、恐らくその頃石清水八幡宮から勧請したものであろうとも云われる。何れにしても県内有数の古社であり、岩守の子孫である上山家は由緒ある古い家柄である。

社傳によれば往古は、塔堂・楼門・舞台・僧座・中座・御旅屋・獅子座等が備わり、僧坊六ヶ所、社人十余人を擁し、近世においては湯川氏の祈願所として社領を寄せられ、壮麗を誇ったが、天正の兵火、維新の神佛分離、今次の大戦争によって昔日の面影を失った。

私達はそぼふる小雨の境内に佇んで華やかだった往時を回想したり、所蔵の棟札を見た。

現存の標札は総数六枚、元和十年（一六二四年）のものが最も古く、次いで寛永八年（一六三一年）、元禄三年（一六九〇年）、文政五年（一八二二年）、文化五年（一八〇五年）、その他余り古いものは見当たらぬ。丸山氏が頻りに境内の森厳さに感嘆している。私達が棟札を見て長床まで戻って来ると、山田四郎氏が一汽車おくれて、汗をふきふき駈けつけた。

○

一行は八幡宮の拝観を終えて上山氏宅を訪れた。通用門をくゞると蔦葛の青い土塀を繞らした、見るから旧家らしい構えが見える。奥座敷に通された。一位老公から賜った「玄遠」の大扁額が掲げられている。古文書の大部分は、先年来水産庁史料編纂所に提出しているというが、残されたものだけでも夥しい数に上る。到底半日や一日目で目を通すことは難しい。一見したところ虫害が甚だしい。じっくり腰を入れて調べると、貴重な資料が得られるに違いない。一寸目についたものゝ中にも、寛文年間（一六六一～七三年）の殺生禁断の制文、享和年間（一八〇一～四年）第八代藩主徳川重倫、所謂大殿様が八幡宮御参拝の際の一件書類、或は文化四年（一八〇四年）「紀伊続風土記」編纂に当り、編纂所へ提出した書類の写し等々。

あまり劇しくはないが時々ザーと音を立てて雨が過ぎる。こうした湿気の高い日に心苦しかったが、せっかく来たこととて秘宝の衣奈八幡宮縁起を拝観する。

○

衣奈八幡宮縁起は、かなり太い上下二巻の絵巻になっている。詞書は後醍醐天皇の功臣贈太政大臣師賢の孫で、内大臣家賢の子花山院長親の自筆である。長親は左衞門督右近大将と累進して内大臣となり元中（一三九〇）頃出家入道して耕雲明魏と号したが、内外の典籍に通暁し、特に国文学・歌道に明るく、永享元年七月十日（一四二九）京都で歿した。

昭和十九年（一九四四年）一月、東京大学史料編纂所の村田正士氏がこの縁起を見、後大学に持ち帰り多くの学者が審査鑑賞の結果を、その著「南北朝史論」に詳しく収めている。即ち

（仮名使い原文の儘）―なほ最近私は霊厳寺縁起及び衣奈八幡宮縁起の二縁起をも見ることが出来たのである。この二縁起は従来殆んど世に知られなかった長親の著作として興趣深きものであり、特に後者は詞書が彼の自筆にかかるのみならず、その図絵は美術史上からも注目せらるべきものと思ふ。よってこゝにこの絵巻について聊か述べてみたいと思ふのである。

衣奈八幡宮縁起絵巻はかなり太い上下二巻からなっている。上巻には八幡宮の御祭神たる応神天皇の御事蹟に筆を起こし、ついで石清水八幡宮の由緒鎮坐の次第に及び、蒙古襲来の際におけるはこ崎宮の霊験に終わっている。下巻は同じく初めに八幡宮鎮坐に至る由緒を述べ、次いで衣奈八幡宮に関する由緒次第を記しているのである。絵は室町時代の然るべき画工の手にあり、詞書は実に長親の自筆にかかるものである。

画風は極めて素朴で美術上優秀なるものとは称し難かろうが、その反面拘泥なく奔放自由なところが見られるのである。この縁起絵巻下巻末に長親自身の長文にわたる奥書があり明瞭に成立由来を物語っている。

上山氏が時々短い説明を加えながら、絵巻物を繰り展げて行く。保存の悪かった時代があったのか、両巻とも初めの方がかなり傷んで、上端の朽損した箇所があるが、中程からは損傷が少なく、朱や金泥が鮮な色を放ち、文字は流石に殿上人の手になったものらしい優雅なものである。村田氏の説明にある通り、上巻は八幡宮祭祀の一般論とも云うべきものに比べ、下巻は衣奈八幡宮鎮坐の次第を述べているため、嘗ては屡々諸人の観覧に供したこともあったのか、処々紙が磨り減って文字の読めない処もある。

この縁起は応永九年夏（一四〇二）完成したものであることが、長親自筆の奥書によって知られるが、惜しむらくは奥書は今失われている。ただ江戸時代に、忠実に書写せられた詞書写本が幾冊かあって、当時まだ朽損部や奥書の存していたことがわかり、原本欠損の部分を補うことができる。

私達はこの秘蔵の絵巻物を上山氏のご厚意により、目のあたりに心ゆくまで観覧できた上、その写本一冊と村田正志著「南北朝史論」を借用することを許された。どうした訳かこの縁起の詞書は、「紀伊続風土記」や「日高郡誌」にも収録されていないばかりでなく、嘗て世上に流布したのを見ない。何として詞書全文と村田氏の「南北朝史論」中の「花山院長親と衣奈八幡宮絵巻」を謄写して同学の士に頒ちたいと考えている。私達が雨の音を聴きながら昼食を摂り、猶古文書を探ってると、巽三郎氏と高野光男氏が、タクシーを飛ばして来た。

○

上山氏邸を辞した私達は、雨の中を上山氏の案内で、浄土宗西山派法林寺を訪ねた。享保の頃（一七一六～三六年）僧文碩の中興と伝うるこの寺には、明治初年（一八六八年）八幡宮の別当寺極楽寺が廃されたとき、本尊その他が移されているので、それを拝観するためである。和尚が本堂前の小堂の扉を開けてくれた。中央にまつられた阿彌陀如来は、御丈四尺ばかり金色燦然としているが、金箔は塗り変えられたものらしい。その横の十一面観音は、鎌倉時代頃の作と覚えているが、御手に後補の痕が見られる。

西教寺

私達は此処から更に西教寺を訪ねた。手入れのとどいた庭が雨に濡れて美しい。私事に亘るが、此所の先々住藤田真龍師は、日高地方近代の名僧と云われた人で、私の家がまだ盛大であったころ、時々訪ねられたと死んだ祖母から聞いたことを想い出す。師遷化の後その法話集「真龍和上語録」一巻を贈られたことがあり、一入懐かしい。

寺宝「一向専修念佛名帳」は、もと高家村西円寺に傳わったが、今この寺に移されている。西円寺は興国四年（一三四三）高家村の某、和歌浦留錫中の本願寺第三世覚如上人に謁して人生の大事を聴き、飜然佛門に入り名を了忍房と改め、一の道場を創建するを始めとし、実に紀州に於ける浄土真宗最初の地と云われ、「名帳」は当時了忍房を中心に東西から参じた真宗同行者の名を録したものである。

私達は広い本堂で秘宝の名帳を囲んで、ゆっくり展観することが出来た。

興国四年六月十三日始之
後文明五年（一四七三年）癸己六月八日写
釈自二了忍房一相二傳之一

と云う奥書の次に、門徒百二十余人（内男子六十余人、女子五十余人）の名が連ねられている。初めに書かれているのが古来の門徒で、終になる程新付の門徒であろうが、ここには東は矢田・小熊・若野・和佐、西は小池・阿尾・三尾、南は吉原・島・天田の人々の名が見られる。小熊の金蔵寺や和佐の光源寺は、この名簿中の信徒達によって、その基礎を築かれたものであろう。何れにしてもささやかな高家村の一真宗道場を中心に、易行道の信仰に燃えた門徒達が、幾里の道を遠しとせず、馳せ参じた姿を思い浮かべる時、その熱烈さと純粋さに感動せずにはいられぬ。

興国四年に書き初められ、百三十年後の文明五年に写しかえられてからでも既に五百年近い歳月を閲するが、巻物仕立てに表装された名帳は保存がゆきとどいていて、いささかも損傷の痕が見られぬ。まことにこの一巻こそは、日高に於ける真宗興隆の経路を尋ねる貴重な資料であるのみならず、書付けられた百廿余人の名前が、今から見るとそれ〴〵特異なもので、庶民資料としても価値が高い。私達は片仮名まじりの筆の跡を飽かずに眺めた。

私達は次いで当寺に傳わる蓮如上人御愛用の竹杖と、御親筆の六字名号、蓮如の子実如上人の六字名号を見た。何れも西円寺から移されたものであるが、文明年間（一四六九～一四八六）蓮如上人紀州教化の時、西円寺に錫を留め住持了心房に与えられたものである。竹杖は黒い漆塗りの箱に蔵められているが、長さ四尺ばかり、黒竹でつや〳〵と磨き上げられ、面白いことに二本の茎が癒着して一本になっている。それにしても愛用の杖というのが本来ともに摩滅した痕のないのは、保存に当たり汚損部を切り捨てたのであろうか。

六号名号は豪華な金襴表装の大幅である。五百年の星霜を経て、流石に紙は黒ずんでいるが、幾多の苦難に屈せず八十五年の生涯を宗教教理の組織宣傳と教線の拡張と宗団の膨脹に捧げた、真宗中興の祖らしい強い気魄の充ちた文字が、今も見る人の胸をうつ。

実如の親筆もまた同じ仕立ての大幅であり、父蓮如に似た豪快な文字である。実如が紀州に巡錫の年代は今明らかにしないが、父の遺蹟を巡拝して日高に入るや、数日間を西円寺におくり、文明の昔を偲び、即ち記念のために染筆して住持に贈るという。

○

朝から降ったりやんだりの雨はまだ降りつづけている。西教寺本堂から眺めると、真向かいの衣奈八幡宮の森の木々は、雨にぬれて生気溢れるばかりである。私達は朝来衣奈八幡宮縁起と云い、門徒名帳と云い、蓮如・実如の親筆の名号と云い、稀代の秘宝の数々を心ゆくまで拝観して、近来にない大きな感銘を得た。この上欲張って、せっかく充ち足りた心を乱したくなかった。湯浅廻りで大葉山を見る予定を変更して、また小型タクシーで午後四時ごろ由良駅に皈った。

（昭和三十二年六月十四日夜）

興国寺の一夜

「紀州新聞」昭和三十二年八月十八・十九日掲載

①

有名な由良町興国寺の灯籠焼は、毎年旧暦七月十五日深更行われる。恰も今年の十五夜は土曜日であったので、南紀史跡顕彰会の胆煎で、数年越し宿望の灯籠焼を心ゆくまで見学することを得た。

当日午後五時半由良駅前に集合した会員十四名は、まだ西日の照りつける衣奈街道を興国寺に向かった。明治二十一年（一八八八年）の暴風で倒潰、昭和十三年（一九三八年）の再建にかかる大門を過ぎて、三、四町、境内に近い茶店の傍に、長さ二間・直径三尺五寸、総重量八十貫、日本一と云われる大松明が四本用意されていた。

この大松明は土地では特に松明と云わずに土用とよび、地元門前部落の青年達が、毎年精魂こめて作りあげるが、鬼歯朶の生を束ね周囲を青笹で巻き、太い竹の輪でしめつけてある。折から茶店の傍の広場で若者達が数名でこれを担ぐ稽古をしていた。四人の若者が棒で担ぎあげ、一人の青年にかつがせようとしている。四人の者が力を抜くと、全重量は一人の肩にかかる。若者は面を紅潮させて力を入れるが、思わず足もとがよろめく。他の四人が走りよって助けを入れる。こんなことを何回もくりかえすのを眺めながら、私は青年達に訊いた。

「目方はどれ程あるだろうか」

「重いので八十貫。軽いものでも六十貫を越える。昨年であったか刈りあつめた鬼歯朶をはじめ、一切の材料を計算したが、周囲の笹だけでも二十貫に余った。昔はもっと重く百貫近くあったと云うが、今の若い

者は肩が弱くなって、せいぜい七、八十貫、それ以上は無理だ」
「一体そんな重いものを本当に一人で担ぐのか」
「勿論、肩に乗せるのは手傳って貰うが、肩にしたら一人で担ぐ。然しこれも一種の気合と「こつ」です。怠けた気分で取りかかると、押し潰される。時には無理をして脊髄を傷めたり、肩や腰を怪我する者もあるにはある」
「土用(大松明)は例年門前部落の各隣組が、分担して一本ずつ作る。それで何処の組で六十貫のものを作ったのなら、負けずに七十貫のを作ろうと！自然競争の形になる」
私は若者の話を聞きながら、ふと先程古川成美氏が
「どうもこの灯籠焼は、お盆の精霊流しに成年式の行事が結びついたように思われる」
と語ったことを思い出した。つまりこの途方もない巨大な灯籠を担ぐことによって、初めて若人が青年として社会に認められるのだ。あり余る若人の力と意気を、灯籠担ぎで世間に誇示し、一人前の男として部落の承認を求めた名残であろうと云うのである。私は古川氏のこの解釈を卓見だと思う。

②

私達は深い樹立の参道に足を運んだ。古色を帯びた石畳にさす木洩れ日が涼しい。石磴の傍らに神田耕一郎氏が待って居られた。
やがて私達は書院に通され、先着の井上豊太郎先生と会うた。行事が始まるまでまだ大分間がある。余り御行儀のよくない一行は、広い書院に寝転んだり、無駄話をして時間を消す。高尾英吉氏が持参の「紀伊国名所図絵」を取り出し、興国寺の頁を開いている。裏山を取り込んだ庭には芙蓉が咲いていた。その間にも時刻のたつにつれ、境内に追々人が集まる気配がし、何れは遠い処から訪ねて来たのであろう虚無僧姿の修行僧が一人二人と案内されて来るのも、如何にも禅林らしい風景である。そのうち山中三郎氏を先頭に、二十日会の数名が来て私達と合流した。
私達は夕食後、灯籠焼を見学に出た。いつか広い境内はすっかり夕闇にとざされ、本堂には赤々と燈明が輝き、境内の彼方此方に屋台店が並んでいる。参拝の人々の群れが流れるように続く。時々その群れの中に燈籠を持った人がまじる。灯籠は本堂に着くと、そのまま御堂を三周して傍らに下り、行事の始まるまで控えている。
この灯籠は所謂切子灯籠で、細かく色々な細工を施し、家の定紋をつけ、下の方には南無阿彌陀佛と切抜い

てある。試みに灯籠を持って来た一人に尋ねると、

「灯籠は門前、畑の興国寺檀家の家から持って来る。白い灯籠はその年の新仏のある家のものであり、彩色のあるものは年忌のあった家のもので、年忌灯籠と云う。昔は百を越すことも珍しくなかったが、近年死亡率の低下がこんな方面にも顕れて、六、七十になった。骨組みは灯籠屋が作るが、紙は大抵自分達で貼る。手のこんだものになると三千円位かかるが、一千円位のものが多いようだ……」

はなしを聞いているうちにも、続々灯籠が集まる。参拝の群衆にまじって、一際高く掲げられてくる灯籠の灯を見ていると、

「あゝあれも新佛か、一体誰が死んだのだろうな！」

親か、子か、妻か、兄か、と様々に想像が湧き、誰かの歌

我子の来る初盆の夜ぞ門に焚く　俺が迎火大きく燃えな

の一首が、ふっと思い出された。

③

灯籠焼行事は午後十時半頃本堂佛前での勤行に始まり、参集した灯籠が「なむあみだぶ」の間の長い称名をくりかえしつつ本堂を三周して境内を出発し、数町下手の無常堂に至って行われるのだが、昨年二十日会で見学した山中三郎氏の話では、無常堂附近は大変な人手だから、早い目に行っておかぬと中々見られない。と云う忠告に従って、今年は本堂の方を見ないで無常堂に重点をおくことにして、少し早いが山を下った。

無常堂は参道から二、三丁南へ折れた、小さな灌漑池の下手にある。藁葺方三間ばかりの簡素な建物だが、千木を置いているのが珍しい。堂の前が一寸した広場で、灯籠焼は此所で行われる。

私は一人で最も見晴らしのよさそうな処に腰を下ろした。程なく、高尾英吉・宮所常楠・薗悌二郎・井原武・津本鉄城・小山民三の諸氏が見えた。行事にはまだ大分間がある。四方山話がはずむ。

抑々灯籠焼のことは、各地で行われるお盆の灯籠流しの変形で、興国寺の近くに河流がないため斯様な形式になったものであろうが、それにしても十五日夜に行われるのがおかしいと云う疑問に対し、十五日に行われる処は他に幾らもあり、現に御坊でも十五日夜行われていると、高尾・津本両氏が教えてくれた。

また灯籠が寺に着くと、先ず本堂を三周し、出発に当たっても三周するのは如何云う訳であろうかとの問いに、津本鉄城師は印度の最敬礼に当り、仏典には囲繞三度の礼とある。つまり本堂に対し最高の礼をするのであると。

話はそれからそれへと尽きぬが、行事も中々始まらぬ。追々観衆が集まって何時か私達の周囲は、見物の男女でいっぱいになった。薄ら曇りの空にかかった月は、鷲峰山につづく由良の山々を朧ろに照らし、墨絵のように美しい。夜露がしっとりと降りて来た。

④

待つこと二時間余り、九時半ごろであったろうか、ふと立ち上った私の目に数枚の稲田を距てた興国寺参道を、静々と下って来る灯籠の列を見出した。列は長くゆっくりと無常堂の方に動いて来る。哀調を帯びた鉦の音が遥かに夜風に渡って聞こえる。やがて一際大きな興国寺の灯籠を先頭に、幾十の灯籠が無常堂を通って、広場へ集まり、天狗踊り(たいまつ踊)が始まった。

真黒な恰も烏か天狗を思わせる服装の若者が十二、三人両手に燃え熾る松明を一本ずつ持ち、中央の松明を囲んで円陣を作って踊り出した。踊りは両手の松明を前後左右に打ち振り、一寸昔の亜鈴体操の形を思わせる簡単なものだが、松明の光に浮かぶ黒装束と腰に挿した団扇が印象的で、踊る度に前後左右に弧を画く火線が極めて美しい。

櫓の上からスピーカーに乗って流れる歌詞は、何時までも「なーむーあーみーだーぶー」のテンポのゆるい称名をくりかえすだけであるが、それに混じる尺八の音が無限の哀感をこめ、盆行事にふさわしい。

こうして踊りはくりかえし、くりかえし続けられる。手にした松明が燃えつきると、また新しいのと取りかえられる。幾千の眼は悉く十数人の踊り手の上に集注されている。

月が何時か天心にかかった。この時無常堂の彼方で人のざわめきが起こったと思うと、長さ二間、重量八十貫といわれる土用(大灯明)が、その両端を焔々と燃やしながら一人の若者に担がれて、無常堂をくぐって、サッと広場に運びこまれた。観客の群れからは思わず讃嘆の声と拍手の嵐がおこった。

土用(大灯松)を担いだ若者は、場内に入ると篝火の周囲を三周するのだが、重さが重さだけに中々一度では出来ず、屡々取り落とし、その度に数名の介添人が駈けよって肩に乗せてやる。こうして幾回か失敗を重ねた末、漸く囲繞三度の礼が終わって、土用は片隅へ置かれた。

そのうちにも第二、第三、第四の土用が次々に場内に入り、四本の土用が揃ったところで、幾度も中央に集まったり、また離れたり、或は立てかけたりをくりかえす。その間土用は焔々と燃えるので介添人は、腰の渋団扇で叩き消して火勢を殺いだり、また煽り立てたりして、燃焼度を調整する。この時間が頗る長い。とに角何等かの方法が定っていて、その方式の通り行おうとするのだが、重量と火熱で思う通り運ばぬらしいことは

分かるが、それがどういう形にしようと云うのか観衆には中々分からぬ。ここらでマイクを通じて行事に精通している人が簡単な説明を加えてほしいものである。

やっと形式が整ったらしい。四本の土用が井の字型に組合わされた。興国寺の大灯籠が静かに動き出して、一際高い「なーむーあーみーだー」の声の中で火中に投じられた。同時に周囲に控えていた幾十百の灯籠が動き出して、一斉に燃え熾る四本の土用めがけて投げられた。

パッと火炎が上る。パチ〳〵と青竹のはぜる音、灯籠の焼ける煙、天を冲する火焔が深更の由良の谷々を照らし、白昼のように明るくなった。豪家壮麗極まりない火の饗宴である。焔々たる火焔の周囲を巡る僧侶の姿が小さく見える。やがて数名の僧侶が次第に燃えつきてゆく火団の傍で、浄かに読経を捧げて灯籠焼は終了した。

⑤

十数名の会員と夏の一夜を禅林で明かした私は、翌早朝五時に眼を覚ました。そっと起き出でて境内に歩を運ぶと、昨夜の雑沓は跡方もなく、ひっそりと静まりかえっている。

方三間に近き巨きな浴室で面を洗い、一人で風呂をたてていると、井原武氏が来て手伝ってくれる。一風呂浴びて皆を呼びに行く。朝食後雲水僧の指導で、私は会員一同と共に、生まれて初めて坐禅堂で小時間坐った後、特に許されて旧国宝開山法灯国師木像を、目のあたり拝むことを得た。

坐禅堂から開山堂への階段は、板張りだが塵一つ見当らぬ。かなり急な階段を静かに踏んで行くと、堂の扉が左右に開かれ、南北の戸が開け放たれ、国師の木像が明るく浮かぶ。

この木像は国師八十七才の御姿を写したものだが、正応六年(西一二九三)徒弟達等が相寄って、師の御姿を永く傳えるために、当時高名なさる仏工に彫刻を命じた。仏工は日夜苦心して国師の像を刻んだが、如何にしても国師の澄みきった御眼差を写すことが出来なかった。あゝでもない、こうでもないと様々に工夫を凝らしているうち、或時ふと

「世間では禅師の老師のと御大層なことを云うているが、もし俺がこの一刀で咽喉を刺してみろ、それっきりじゃないか、して見れば……」

とこんな邪念が心の中にフッと浮かんだ。その時であった、静かにトウ木によられていた国師は

「おい〳〵、つまらぬことを考えるものではないぞ」

と、たしなめられたと傳えられる。

永仁六年（西一二九八）十月十三日、国師遷化されて六百六十年を距てて、今仰ぎみる御尊像は、鎌倉彫刻の特長をよく具え、その写実的な手法は、さながら生ける如く国師の清澄高邁な御風格の中に溢るる気魄を傳え、私達の心を強くうつ。

猶この開山像が昭和八年（一九三三年）春大修理をされた時、胎内から大小二個の銅器鍍金筒が現れ、中に金字妙法蓮華経一部、金剛般若経一巻、梵網経一巻、その他の写経が納められてあり、筒の外面に弘安九年（一二八六年）三月十五日とあったことが「鷲峯余光」に見えている。

それにしても興国寺創草以来七百年、その間天正の兵乱をはじめ、幾多の転変に際会しながら、御像が無事に伝えられたことは、一に国師の御高徳によるものと感激にたえぬ。私達は静かに御像に拝礼を終え、ギィッと開山堂の扉を鎖す音を聞きながら、階段を下った。

（昭和三二・八・一四稿）

御坊あちこち

「紀州新聞」昭和三十二年九月二十一・二十二・二十三日掲載

善妙寺焼

九月十五日は史跡を訪うにふさわしい、爽やかな秋日和であった。午前九時善妙寺の山門をくぐると、既に神田耕一郎・小山民三・亀石豊太郎・井原武・高尾光男等の諸氏が集まり、住職木下靖夫師は善妙寺焼の数々を陳列して待っておられた。やゝ後れて芝口常楠氏と、田端英夫教官引卒の日高高等学校歴史学部の、男女八名の参加があり、いつもはどちらかと云えば、老人臭い本会も、俄に若々しい賑やかなものになった。

「日高郡誌」によると、善妙寺は永正十六年四月二十一日（一五一九）の創立で、初めは島道場と云われた。その後百六十年程経た延宝四年七月（一六七六）、善妙寺と寺号公称の許可があり、宝永三年（一七〇五）信徒達の寄附で本堂が再建され、次いで宝永九年住職玄瑞が私財をもって改築した。今の本堂がこれである。

この善妙寺の第六世の住職に、玄了（宝暦九年（一七五九年）正月十九日歿）と云う和尚があった。華厳宝漂に師事して善妙寺の額を貰っている程で、相当学識の高い僧であったが、この玄了の作った焼物が、世に云う善妙寺焼である。多分享保から寛保（一七一六～一七二四）ごろの事と推定される。

善妙寺焼は数多い紀州の陶器中製作年代が最も古く、且つ、簡雅素朴の気分に充ち、郷土的色彩の豊かなものであるが、如何にせん辺鄙の地で、然も個人の趣味的製作であり、製作期間も短かったので、今日遺っているものは極めて少ない。従って巷間往々善妙寺焼と称するものを見聞するが、かなり注意して見る必要があると云うのが偽りのない処である。

然し流石に本家である。その大部分は散逸したと云うものゝ、歴代相傳えて来た数は多いが、陳列されたうち花器四点に、特にこの陶器の特徴を見ることができる。茶碗・盃・中猪口等の小品にも捨てがたい気品があって、好事かならずとも唾涎を禁じ得ない。

殊に私達の興味を惹いたのは、その粘土で造ったらしい硯箱型や芭蕉、或は鶴または龍を象どった小皿の原型で、木下靖夫師の話ではこの型で造られた芭蕉の皿は、広川町浜口家に拾枚を秘蔵されているとのことであった。さぞ見事なものであろうと想像される。第六代紀州藩主宗直卿に献上して、屡々御褒めに預かったと云う作品等も、恐らくこうした型で慎重に製作したものではないかと思われる。

もう一つ私達はここで面白いものを見た。それは竈跡から発掘された数十個の破片と二、三点の焼具である。昭和十六、七年頃（一九四一、四二年）のこと、木下靖夫師は予てから善妙寺焼窯跡と傳えられる、大字島福井義一郎氏所有の字向河原の水田約一坪を掘りかえした処、地下約二尺の地点で窯跡らしい赤土に達し、更に作業を続けた処、多数の陶器破片と、既に火熱より融化した窯内壁の一部を得た。それも陳列されているのだ。

これはまことに大きな発見である。従来窯は境内か或は寺院附近と推定されていたが、誰もこれを確認した者はなかった。それが今回発見されたのである。これによって、遺品の少ないことや関係文献の缺如により、と角困難であった善妙寺焼の研究に、一つの有力な資料を加え得たことになる。木下氏の名は紀伊国陶磁研究上、銘記されるであろう。

小竹元宮と祝塚

祝塚は、はふりづかと訓む。はふりは神職のことである。つまり古代の神主を葬った塚である。小竹の元宮も祝塚も日高高等学校西舘の西二、三町の地にある。共に田圃の中に小さな塚状となって遺り、数本の樹木があるので直ぐわかる。私達は早くもやゝ黄ばんだ水田の中の細い畦路を通り、先ず祝塚に歩を運んだ。

祝塚はもとはもっと大きかったのであろうが、段々掘り毀たれて、今は二、三坪の小塚に過ぎぬ。一本の松

を中心に雑木と秋草が生い茂り、足の踏み入れ場もない。小竹祝塚と彫った三尺ばかりの古碑が、叢に埋まれている。

「日本書紀」の記事に従えば、神功皇后が新羅から凱旋の途次、忍熊王の乱を避けて紀伊に到り、日高の地で太子に会い、小竹宮に本営を移したが、この時大きな異変がおこった。それは昼が暗くなってまるで夜の如き状態が幾日もつづいたのである。天変である。皇后は紀直(きのあたい)の祖豊耳に、これは一体何故であろうとたずねた。その時一人の老爺があって、「話しにきいた阿豆那比(あずない)の罪と云うのがこれらしい」と答えた。「その阿豆那比(あずない)とは何のこと」と重ねて聞くと、「二つの社の祝(はふり)を一緒に埋葬したことを云うのだ」とのことであった。そこで左様なことがあったかどうかを聞きあわせると、村人の一人が次のような話をした。

小竹の祝と天野の祝(伊都郡天野神社)とは仲のよい友達であった。ところが小竹の祝が病気で死んだ。天野祝はひどく泣き悲しんで、自分は彼の生前よい友達であったのだから、死んでも一緒の穴に葬らべきだと云って、小竹祝の亡骸の側で死んだので、合せて葬った。多分これであろうと云うので、墓を開いて見ると果たしてその通りであった。そこで棺を別にして場所をちがえて埋めたので日の光はもとの如く輝き、夜と昼の区別もできた。

これが小竹祝塚の由来である。猶この祝塚については古代史上屢々論議されて来たが、未だ解決に至っていない。近刊のアテネ新書の「神功皇后」中にも、著書肥後和男が新しい史学の立場から、これを取りあげているのが一寸目にとまった。また小竹祝塚の碑は天明年間(一七八一―一七八六)に建てたものであることが、井上豊太郎先生の未刊「小竹八幡神社誌」にある。

小竹元宮趾は祝塚の北一町ばかりの地にある。現在、薗・島・名屋、及び美浜町浜の瀬の産土神である小竹八幡は、もとこの地に祀られていた。即ち延宝年中(一六七三―一六八〇)それまで藩公の別邸であった薗別邸の跡の下げ渡しを受けて遷坐するまで、古来から此処に鎮坐していたのである。古傳によれば往古は大社であって、一の鳥居は二十余町南東の北塩屋八熊ガ鼻にあり、末社四十九社、経堂一ヵ所、社領もあって壮麗な社殿であったが、天正の兵火(一五八五年)で一切を焼亡したと云う。現代も附近に釜井戸・南釜井戸の小字名があり、また馬場小路の地名も最近まで遺っていたと傳えられるが、今はその旧地も徒らに雑草の生い茂るにまかせ、戦時中に開墾したのであろうか、僅かの芝生を掘りかえして野菜をつくり、鉄条網さえ繞らしている。

遷座してしまえばそれ迄と云えばまた何をか云わんやであるが、御坊市民にとっては忘れ難い旧地である。僅か二坪、三坪の地に大根や藷を作ったとて何程の収穫があろうか、まことに心なき仕業である。折角の由緒

の地である。せめては屎尿の汚れをさけ、いつまでも自然の姿でおきたい。

本願寺日高別院

本堂の前に立って驚いた。普段は見慣れて左程にも感じないが、こうして改めて見直すと実に巨きな建物である。この時ふと道成寺の本堂とどちらが大きいのだろうかと思ったが、道成寺の方は桁行六十六尺五寸・梁行五十八尺六寸五分、日高別院の方は十二間四面で、単に大きさの点だけを比較するとこの方が少し大きい。恐らく一個の木造建築物としては、郡内第一のものであろう。云うまでもないが今日私達が仰ぎみる壮大な伽藍は、決して一日にしてなったものではない。実に幾多の変転を経て来ているのである。

天文元年(一五三二)と云うから、今から凡そ四百三十年の昔、群雄割拠とて諸国に戦乱の絶え間のなかった時代、日高丸山の城主湯川直光は細川勢に党して河内において、四国の三好勢と戦った。激戦数日不幸にして細川勢は敗れ、直光の部隊も大半を失った。そこで直光は予てから浅からぬ関係のあった本願寺に援けを求めた。直光の書翰を見た本願寺第十世證如上人は、直ちに大和・河内の門徒に檄を飛ばして直光に加勢させた。よって直光は大勝を得、その上證如上人の好意で、三十余騎の騎兵に護られて小松原に帰った。

もと〳〵の真宗の信者で入道して政岸と称していた直光は、その後益々信仰を堅くし、且つ證如の厚恩に報いるため、天文九年(一五四〇)吉原浦(美浜町吉原)に一宇の佛堂を創立した。その地は今の松見寺の界隈と傳えられ、表十間・裏十一間・境内東西三十八間・南北四十五間というかなり大きなものであり、有田郡星尾山神光寺阿彌陀仏を迎えて本尊とした。これが今の日高別院のそもそもの淵源であり、当時は吉原坊舎と称した。

その後天正十三年(一五八五)春、豊臣軍の来攻にあい湯川一門は熊野に落ち、吉原坊舎も焼亡したが、御本尊は薗浦の住人岩崎円宗に護られ、住職𠮟存が奉じた御影とともに熊野に逃れた。翌天正十四年戦いが止むや、郡内の僧俗が協力して薗浦の椿原に仮堂を建て、薗坊舎と称した。椿原は今の御坊の椿通りであり、小字古寺内がその地だと云われる。

この年湯川氏の滅亡を知った神光寺では、人を遣して御本尊を取り戻したが、既に湯川氏を失った薗御坊舎としては如何ともすることができなかった。この時財部の篤信家糸田久左衛門は、決然として単身神光寺に至って再びこれを奪いかえした。久左衛門が御本尊を背にして鹿ヶ瀬峠まで来ると、頻りに後から呼ぶ声がする。追手が迫って来たのだ。久左衛門がヒョイと後ろを振りかえると、彼の胸を目がけて流星の如く流れ矢が飛ん

で来た。思わず胸を覆ったが、不思議にも何の怪我もなかった。飛ぶようにして寺に帰り御本尊を安置すると、畏るべし長矢は深く御本尊の胸につゝ立っていた。糸田氏の子孫は今も湯川町財部に健在であるが、その後は久左衛門の功により、毎年正月には別院から鏡餅を贈った。このことは極めて近年まで続けられていたが、今次大戦により止んだ。

文禄四年（一五九五）国守浅野氏の家臣（？）佐竹伊賀守の奉行で、薗・島両村の荒地の内四町四方が下賜され薗坊舎を移した。即ち現在の位置であり、御坊舎の所在に因んで、御坊の地名も生まれ、三百六十年の今日御坊市と云われる基ともなった。その後寛永七年（一六三〇）本堂再建、同十二年の西円寺号の下賜、享保年中（一七二六―三五）本山出張所への変化等、種々の経緯を経て、明治初年（一八六八年）遂に日高別院となったのであるが、ここで現代の本堂建立の次第を述べておきたい。

江戸時代の末、御坊に喜多忠右衛門（天保九年（一八三八年）歿）・津本所左衛門（天保九年歿）の二人の真宗篤信家があった。かねてから御堂を再建したいと考え、千両彩票（今の宝くじの如きもの）を購入し、もしこれが當ればすっかり再建に寄附しようとより〳〵話し合っていた。処がその志を感応されたか、うまい具合に彩票が當せんした。そこで二人は欣喜してこの当せん金を基として、各地に寄付を募り、或は木材を買うために上方に出向く等、八方奔走して、遂に今日見るが如き郡内第一の本堂が完成した。時に文政八年三月十五日（一八二五）であった。

私達は書院で休憩の後、輪番渡辺一実師の案内でこの寺の開基湯川直光の画像を拝観した。元来直光の画像はこの外にもう一幅あった。それは文禄四年（一五九五）薗坊舎がこの地に移った時画かれたものであったが、中古故あって紛失した。それで近年に至って筑紫翠雲が「紀伊名勝図会」から模写したものが今傳わるものである。画像は入道後の姿であって、法衣をまとうてはいるが、流石に眉宇の間には、戦国の武将らしい精悍の気が現れている。この寺にとっては洵に貴重なものであるばかりでなく、御坊市民乃至は日高郡民にとっても、また忘れることの出来ぬ人物である。私達は四百年の昔丸山城にあって、日高地方を制覇し、別院を創立した直光の像を、深い感慨をもって眺めた。

次いで本堂内陣に神光寺傳来と傳える御本尊を拝む。御丈け四尺ばかり、成程仔細に拝すると御胸の辺りに、鹿ヶ瀬峠で糸田久左衛門の身代りになって受けられた矢痕が、今も生々しく遺っている。吉原坊舎に迎えられてからでも既に四百年、その間或時は熊野山中に移り、或時は神光寺に戻る等、幾多の苦難の道を歩まれただけに、御足や御手に後補の痕が見られる。

この外秘蔵の證如上人自讃の真影、或は蓮如上人の六字名号と、私達は渡辺一実師の説明を聞きながら飽くことを知らなかったが、やがて境内に出た。

曽ては本縣の天然記念物に指定され、湯川直春の亡魂に絡る怪しい傳説さえもつ名木捻柏槇も、遂に樹令が尽きたか、今は正に枯死の寸前にある。以前明治二十七、八年（一八九四・五年）頃にもこの老樹の衰弱が激しく、正に枯死せんとしたことがあった。この時は幸にして御坊市松原通り岩国屋の先代久兵衛氏が奔走して、柏槇の周囲に石檀を設け肥料を施し、厚く保護したので今日まで生き延びた。しかし今の御坊には久兵衛氏の如き篤志家は居ないらしい。あたら名木も惜しいことであるが是非もない。

猶この時直光の肖像を模写した画家翠雲が老柏槇を画き、これに虎溪道者の讃した一幅が遺っていて甚だ面白いが、詩讃はかなり長いものなので今は省略する。

ついで私達は墓地を探る。日高別院は檀家が少ないので墓碑の数はそう多くはないが、それでも色々興味深い発見があった。その第一は岡崎屋坂上甚吉氏が明治二十七年（一八九四年）五月湯浅町桑田善七のため建立した一基で、側面に二首の和歌が彫られている。

阪上氏は御坊町中町の綿糸商であった。真宗の篤信者として聞こえ、日高別院のためにも尽くすところが多く、現に本堂椽の擬宝珠には「大正四年（一九一五年）三月　施主坂上甚吉、六十四才」と彫られているのを見る。歌によると阪上氏は桑田善七から浄土真宗の奥義を聴いて信仰に入った。後明治廿七年信仰上の師の追善の為に建碑したものゝ如くである。

またもう一基にも二首の歌があったが、この方は碑面が摩滅して拓本にでもとらぬと、誰の墓とも分からぬ。この外、玉置先生の墓というのもあった。これもさっぱり読めない。処々判読し得たところから考えて、元禄（一八九五年頃）頃の人で、門人達が玉置氏の三十三回忌に建碑したもので、玉置氏は恐らく当時薗浦にあって漢学塾でも開いていたのではないかと推測される。十月になれば何れこれらの碑の拓本をとり、猶詳しく調べて見るつもりである。

（昭和三二・九・一八夜）

戯瓢踊り雑感

「紀州新聞」昭和三十二年十月二十五日掲載

今年は冬の訪れが早いようだ。ついこの間秋祭がすんだばかりなのに、風はもう冷たい。今ごろになってお祭りの話や、戯瓢踊りのことを持ち出すのは、いさゝか季節外れの感がないでもない。実は同学の先輩高野光男氏のそそのかしもあり、興の去らぬうちにとペンを執った。

○

戯瓢踊りは御坊市小竹八幡秋祭りの踊りであることは、今さら云うまでもない。二、三年前本県の無形文化財にしてされているし、戦前もNHKから全国に紹介された位である。が、その由緒沿革等に至っては何ら拠るべきものがなく、古い念佛踊りの流れをくむものであろうと云う外、余りはっきりしたことは知られていない。

私も何時かはゆっくりこの踊りを見たいものと思いながら、中々その機会がなかった。去年はわざ〳〵浜の瀬の御旅所まで出掛けたのだが、途中で女の子に見惚れたりして、浜へ着いた時は、踊りはとっくにすんだ後であった。今年はその失敗にこりて、高野光男氏と小一時間も前から祠前の広場にがんばって、心ゆくまで参観した。

○

踊りの細かい描写は面倒でもあり、小難しいから省略するが、先ず私の興味をそそったのは、踊り手の幾人かが大事そうに持っている大きな瓢簞であった。有名な正徳四年(西一七一四)の記銘のある瓢簞の外は木製のものと云うが、とに角踊り手の幾人かが瓢を手にしている。形は何れも細長くねじれていて、長さ一尺三、四寸ぐらいのものである。私はこれを見た瞬間トッサに、これは男性のシンボルではないかとおもった。こう云う目で見ると、別の踊り手が持っている鉦も女性のシンボルのような気がしてならなかった。また踊りの所作の中にも何か性的なものが感じられた。

つまりこの踊りは単なる念佛踊りの一種と云うだけでなく、もっと古い時代の原始舞踏、随って生を壽ぐ生めよ増やせよ的な性神的な踊りがあって、それに後代の念佛踊りや奴踊り等が結びついたのではないかと、一応思ったことであった。

最もこの想像については、御坊という土地はもと〳〵非常に新しい土地で、そんな古代には、村も人もなかったと云う反論もあろう。然し御坊乃至薗浦の発生は比較的新しいにしても、紀小竹と名屋浦はかなり古代に遡り得るのではないかと思う。このことは名屋という地名や「日本書紀」の小竹宮の記事、もっと古くは、美浜町田井から出土した縄文式土器が傍証になる。

○

戯瓢踊りについてこんな想像を逞しうしている折柄、面白い記事が目についた。それは古美術研究家の野間清六氏が、美術雑誌「ミュージック」九月号に発表した、「佐渡に残る古踊」と題する一文である。かなり長

いものなので要約すると、

佐渡にはツブロザシまたは岩戸神楽と称する踊りがあって、ヒョットコ面をつけた男と、おかめ面をつけた女役が登場するが、男役の方は巨大な男根を持って踊り廻る。これに類した踊りは三河地方の田遊びを始め、あちこちの土俗の間に見られるが、私は何となく伎楽に関係あるもののように思う。これらの踊りが存在することは、田遊び踊りの傳ったものと一応考えられるが、この佐渡に近い地域になく、ひとり佐渡だけにあることについては、古代伎楽の名残とも考えられる。と云うのは、奈良時代すでにこの佐渡には國分寺も建立されているのであり、またこの国分寺の寺楽として伎楽の存在したことも考えられるからで、それが崩れながら、その面白い部分、簡単な部分だけが、大衆に模倣されて残ったものと思われる。これを岩戸神楽と呼んでいるのでは、古い陽物崇拝が生成の根元的なものであるためでもあろうが、古い傳統を有する踊りと云うので、神話時代の天の岩戸に於ける踊りと結びついたものと解釈する。またこれをツブロザシと云い、この踊りでは瓢簞とササラを用いるからだと説明しているが、これは語源をもっと究明する必要があろう。云々……

と云うのである。

○

さてこの野間氏の記述によるツブロザシ踊りと、戯瓢踊りを比較すると、私は伎楽については何の知識もないから確かなことは云えないが、戯瓢踊りには伎楽の関係はないようである。また日高地方に国分寺があったと云うことも聞かない。彼は巨大なる男根を持つが、此方は大きな瓢簞を持ち、彼のササラのかわりに此方は扇子を持つ相違があるが、私はどうもツブロザシ踊りの男根と戯瓢踊りの瓢簞は同一のもののような気がする。彼の露わなるに比べて、此方の瓢簞は美しく象徴化したものでないかと考える。殊に瓢簞のことをツブロザシと云うに至っては、益々この疑いが濃い。

○

私の戯瓢踊りに対する記事はこれで終わる。もとより論文と云えるような筋の通ったものではない。気まぐれな雑文の類にすぎぬ。然し之がひょっとして今後の戯瓢踊の研究に、何らかの手掛かりにならぬだろうかと、ひそかな希望を託する。

何れにしてもこうした古い文化遺材は、年々影をうすくして来つつある。今年見た戯瓢踊りにしても、大部退化し形が頽れているように感じられた。せっかく長い間受けついで来た庶民芸術の花である。単に神社に附

属した神事とする事にとどめず、何とか公民館あたりが一肌ぬいで保存会でもつくり、この踊りの正しい格調を護持して欲しいものである。

（昭和三二・一〇・二一稿）

山名將治詩集を讀む

「紀州新聞」昭和三十二年十月三十日掲載

①

御坊公民館の山中主事から、「山名將治詩集」をすゝめられた。頁をくった私が最初にもらした言葉は、「この詩なら私にもわかる」と云う一語であった。

この不用意な言葉からでも知られるように、私の詩に対する感覚は頗る怪しい。こう云う男が詩を語ろうと云うのだから、何を云い出すかも知れたものではない。

× × ×

実は山名氏の詩集が出ると新聞で見たときは、そこいらに多い文学青年の手すさびに過ぎぬだろうと、多寡をくゝっていた。ところが讀んで見ると、私の考えの大間違であったことがわかった。

彼の詩はそんな生易しい文字の遊戯ではない。流行の言葉でいえば、正に生命をはって書いた詩だ。ピチ〳〵した生命の躍動がじかに響いてくる、腹の底から流れ出る悠久なるものへの詠嘆、美へのあこがれ、真理への情熱が凝ってもって数十篇の詩となっている。

然もそこには若い人の陥り易い思想の裸踊りが見られない。詩想は高く昇華され、言葉は一字一点に至るまで厳しく選択されている。この間も「日高新報」の藤田草宇君と私と云う、極めて散文的な二人がよって話したことであったが、どの一篇をとっても、一語も加えることもできないし、一字を減ずることも許されない。否言葉の増減はもちろんだが、文字を変えることもできぬ。平仮名を漢字に変えても全体が死んでしまう。一行の長短。と、の打ち方一つにもぎりぎりの処を出している。無論雑文と詩とは自ら異なるが、こんな詩に接すると文章が書けない。殊に私をよろこばしたのは、全詩篇に溢るゝ快い韻律である。快いリズムである。彼自身がその後書で「舌頭百転韻自らなる」と述べているなだらかな調べである。

× × ×

何にでも手を出したがる私は、昔から色んな詩集を見て来た。少年の日の有本芳水、誰もが一度は通る石川啄木、やや長じては藤村、晩翠・犀星・夜雨・白秋・佐藤春夫、そして三好達治・丸山薫あたりまでついて来た私はそこで詩を読むことをやめた。一つには生活がいそがしくなったためでもあるが、所謂新しい詩人の詩が私にはわからなくなったからである。

ところが山名氏の詩にはそんな難解なところはない、素直である。自由詩本来の美しい調べがあり、正しい詩風がある。蓋し私をして「この詩なら私にもわかる」と叫ばしめた所以である。

②

さて私は詩の正しい鑑賞のし方を知らない。あるのは私の得手勝手な好悪だけであるが、そのかたくな好悪の眼鏡を通じて撰ぶとすれば、矢張り作者自身も自負している冒頭の「てては」であろう。

ててはばくちに　おかはかねもけに　わかものはくるわに

にはじまる、この詩は行数にしてわずかに八行、文字にして七十三字に過ぎぬが、「これはこれとして一つの巧まざる宇宙を醸成してゐると云えよう云々」と彼自らも述べているように、世界幾億の人間が、否生きとし生けるもろもろの生物が、皆それぞれの星を負うて生きて行く悲しさが、しみじみとうたわれている。殊に

てんでんばらばらに　とりはねぐらに
ふねはみなとに　かへる(蛙)やくちな(蛇)ははとう(冬)みん(眠)に

と結んだ手法は見事である。これだけの内容を小説に盛るとすれば、忽ち数百頁の長編がなるであろう。

次に「寒夜」か好きだ。

桶もるるおとのはばしく　地にふるあはれしめやぎ
しづるるは雪かとおもふ　笹の葉におとのひそまる

短いものだが美しい。「はばしく」と云い「しづるる」とはいみじくも歌ったものかなと感嘆する。さみしい冬の夜、外は静かな雪だ。然しこの冬は紀州路の冬でもあろうか、自然はそう酷烈ではない。また幻想詩篇中の

火は燃し　水は流し　土は埋む
林野は禽獣の目に光る

ここに悠久なる時の流れを見る。かくて日本列島に人が住みついて、数千年の歴史が重ねられて来た。その他「盆の太鼓は土で聴け」や、少年詩集の数々に心を惹かれる。わけても

蚯蚓（みみず）

ちんちん痛いと泣いた子の
すげなく眠ったまくらもと　ミルクの鑵に蚯蚓入れ

は思わず、ほゝえまされると同時に、詩の鑑賞には邪道ではあるが、私には民俗学的な面白さがある。

こんな風に挙げてゆけば、あまり多くない彼の詩を悉くあげつらうことになる。由来芸術作品の説明程つまらぬものはない。のみならず私の下手な解説は、却って彼の詩の真價を害わんことをおそれる。読者もまた甚だ迷惑であろう。私もまた嘗って古川成美氏が彼の詩集を紹介した際、用いた彼の詩「即興」の一節をもってこの文を終ろう。

ああ聴くなかれ　聴くなかれ
過ぎこし道を聴くなかれ

この道隈（みちくま）のにはたづみ
水に影して逝く雲を　しづかにたちて見てしがも

（昭和三二・一〇・二六）

土橋俊一氏著
福澤諭吉をすゝむ

「紀州新聞」昭和三十二年十一月十五日掲載

土橋俊一氏は日高高等学校の前身、日高中学校の卒業生である。もともと和歌山の生まれであるが、家庭の事情で中学生時代を御坊でおくった。大浜通りのいろは書店竹田初三氏等の一年先輩であり、二年間のシベリヤ抑留生活も一緒であったという。

昭和二十七年私が「森彦太郎先生傳」を書いた時、田端春三氏邸でお逢いした上、出版に当たっては印刷所の斡旋や、校正・装釘等について一方ならぬ御世話になった。「森彦太郎先生傳」が今も時々人の噂にのぼる程の出来栄えで、世に出すことが出来たのは、全く土橋氏の盡力の賜であった。爾来は私は土橋氏を深く徳として

いる。

わずかに数回お会いしただけであるが、若いに似ず立派な人物たと思っている。慶応大学に学び、福沢諭吉に私淑していると聞いたが、見るから福沢諭吉や小泉信三の流れをくんだ、質実でものやわらかで、然も中に一本しっかりした筋の通った、所謂太いバックボーンのある青年紳士であった。

○

その土橋俊一氏が今度少年傳記文庫の一篇として東京　国土社から「福沢諭吉」を出版した。B６版二百七十頁堂々たる美本である。福沢諭吉については今さらいうまでもない。維新革命の前夜とも云うべき天保五年十二月(一八三四)極めて貧しい下級武士の末っ子として、大阪で生まれた。

混沌たる世相の中で早く西欧文化を身につけ、近代日本を築きあげた我が国の大先覚者である。私は常に福沢諭吉・内村鑑三・森鴎外の三人を、それぞれ歩んだ道は異なるが、我が国近代の三大偉人であると尊敬しているが、とりわけ福沢諭吉程わが国の文化・経済の上に、大きな影響をもたらした人物は、他にそう沢山あるまいと信じている。

彼が七十年の生涯を倦むことなく説き去り説き来った、人権平等の思想、科学的な物の見方、自由独立の精神は、今日においてもなお新しい。否日本が第二次世界大戦という大きな犠牲を払って、やっと手に入れたものは福沢諭吉が数十年前既に口を酸っぱくして説いた、平等思想であり、科学思想であり、自由の精神ではなかったかとさえ思う。

○

ともあれ維新前夜の混乱のさなかにあって、時代のせんたんをあゆむ諭吉のふるまいには、ひとつのきまりのようなひとすじにつらぬいたきびしさがあった。武士の刀をみてその長いほど大馬鹿だといゝきった彼

「ばかメートル」

なんとユーモラスな、しかもはげしいいかりをひそめた言葉であろうか。

これは土橋氏の福沢諭吉の一節である。私の下手な説明よりこの短い一節が福沢諭吉の人となりと、本の内容を雄弁に物語る。日本は遂にこの「バカメートル」のために国を破った。

○

この間日高新報は「風」の中で、南部高等学校の先生達の尊敬する人物の一班にふれていたが、その中には

福沢を挙げた先生は一人もなかった。今も小学校では無論福沢諭吉を教えているのだろうが、現代の高校の先生達には、既に福沢はそれ程無関心な存在なのであろうか。一寸さみしい気がする。

福沢は決して百年や二百年で姿を没するような小さな人物ではない。彼こそ時代とともに、益々その偉大さを認められる人物である。青少年達はすべからくもう一度この卓抜な先覚者の広い思想と実践力、そして高い人格を学んでおいてよかろうと思う。

○

由来福沢の傳記は、有名な彼の「福翁自傳」をはじめ、数十種をもって数えるであろうが、幸いにして今回郷土に縁故の深い土橋氏が、少年向きの讀物として「福沢諭吉」を書いた。少年向きと云うが決して調子をおろしていない。土橋氏は大学卒業以来、ずっと福沢諭吉研究を続けてきた人である。昭和二十年（一九四五年）から二十二年までの満二年間を抑留生活者としてシベリヤで過ごした日も、ボロ〳〵になった「福翁自傳」を離さなかったという人である。いまも慶応大学で出す新しい「福沢諭吉全集」の編集に当たっている人だ。資料も正確、豊富だし、実に読みやすいキビ〳〵した文章である。日高地方の小・中学校や公民舘の図書室に、是非一冊を備えて青少年に読ましてほしいものである。

（昭和三二・一一・八）

南方熊楠先生の書

紀州田辺に隠栖していた世界的粘菌学者南方熊楠博士は奇行をもっても有名だったが、この奇行博士俳句もつくり絵もかく、しかも短冊きらいで誰が何とすすめてもいっかな書かぬ。だが「だが一万円よこせば書くよ」とニコリともせず大まじめだった。大正中期（一九二〇年頃）の一万円だから、今日からみるとざっと百万円というところ。

大阪のさる実業家が「では、御希望通りの揮毫料を用意しましたからどうぞ……」と懐中から現生と短冊とをとりだしたら、先生しばらくその短冊と金包みを見くらべていたが、やがて表情がうごいた。刹那ただ一言「御免！」といって素ッ裸になって床の中にもぐりこんでしまった。とりつく島がないとはこのことで、実業家はおこるにもおこれずすご〳〵と皈らざる得なかった。

これは多賀博著「短冊覚書」と云う本の中の一節である。後がまだ少しあるが長くなるので肝心のところだ

けを抜いた。この文章の中に南方熊楠博士とあるのは著者の思い違いで、学古今東西に通じ博士以上の学識をうたわれながら、博士号などてんで問題にしないで生涯を終った南方さんである。

話に多少の誇張があるにしても、如何にもありそうな事である。ここに一万円の札束を見せつけられ、表情がやや動いた瞬間「御免！」とばかり床にもぐりこんだあたり、南方さんの面目躍如たるものがある。この時に限らず南方さんは年中殆んど素ッ裸で、粘菌や植物の標本を山積した書斎でどぐろを巻いていたらしい。

× × ×

それはとも角、こんなに得がたい南方さんの短冊を、最近二枚見ることが出来た。

暮れの二十一日のこと、所要があって塩屋町の山田栄太郎氏御夫妻を御訪ねし、四方山話の末、噺がたまたま南方さんに及んだ時、山田さんは蔵の中から唐紙に書いた南方さんの絵と、二枚の短冊を出して来られた。例によって粗末な短冊に、南方さん独特の無雑作な文字で

山田氏　妹が子らおし並びけり　三福若し多ね女

とあり、もう一枚には

かく迄もおし移りゆく世にわれを　松風の音の絶えぬうれしさ

と認め、短冊の裏一杯に、此の歌の由来を細々と数百言に亘って書きつけた、頗る珍重さるべきものである。また唐紙の方は昭和三年（一九二八～二九年）から四年にかけて、南方さんが美山村妹尾の国有林で数ヶ月間粘菌採取された時に書かれたもので、妹尾即事と題して

己れ九才の程より菌学に志し内外諸方を歴遊して息まず。六十歳に及んで此地に来り寒苦を忍び研究す、これが何の役に立つ事か自らも知らず。

苔の下に埋もれぬものや蟹の甲

と一句を記し、妹尾国有林をざっと素描して下の方に蟹を一匹描いてある。一体南方さんは多賀博氏も書いている様に、歌も詠み、句もつくり、絵もかかれたが、殊にその巧まぬ絵は飄々として一種の風格があり、この一匹の蟹の姿を見ていると自ら微笑がうかんで来る。

× × ×

ところが私も最近南方さんの絵を一枚手に入れた。これも山田氏のものと同じく妹尾国有林で畫かれたものだが、先ず

吉村勢子より書信して妹尾の山居はいかにととひ越けるに

と題して

吾部屋は奥山つづき谷深くのきばにふとき氷柱をぞ見る

と有名な太田道灌の「我がいほは……」のかえ歌を書き、紙一杯に妹尾の山小屋と、山小屋から望んだ冬の山を写し、小屋の軒からは太い氷柱を二、三本垂れ下らしている。床を飾るべきロクな掛軸の一本もない私は、今年の正月はこの軸をかけて楽しむことにしている。

（完）

後　書　き

一、「清水長一郎遺文集(1)」に続き「遺文集(2)」やっと打ち終えた。

随想あり・紀行記あり・民俗資料あり、こんなものまでと思うものまで載せてしまった。いずれはすっきりと整理するつもりだ。

一、昭和三十一、二年頃はと云えば私は中学生の頃である。少しの畑仕事を家族に押しつけて、休日ごと出掛けとは新聞記事を見るまで家族誰も知らないことであった。

一、今、御坊文化財研究会となっているが、紀南郷土学会、紀南史跡顕彰会と名前も変遷し発展いていったことがよくわかる。

当時の紀南郷土謄写版刷りの貴重な発表資料と会則が保存されていたのでいずれはデジタル化したいと思っている。

平成二十四(二〇一二)年七月二十四日(火)

清水　章博